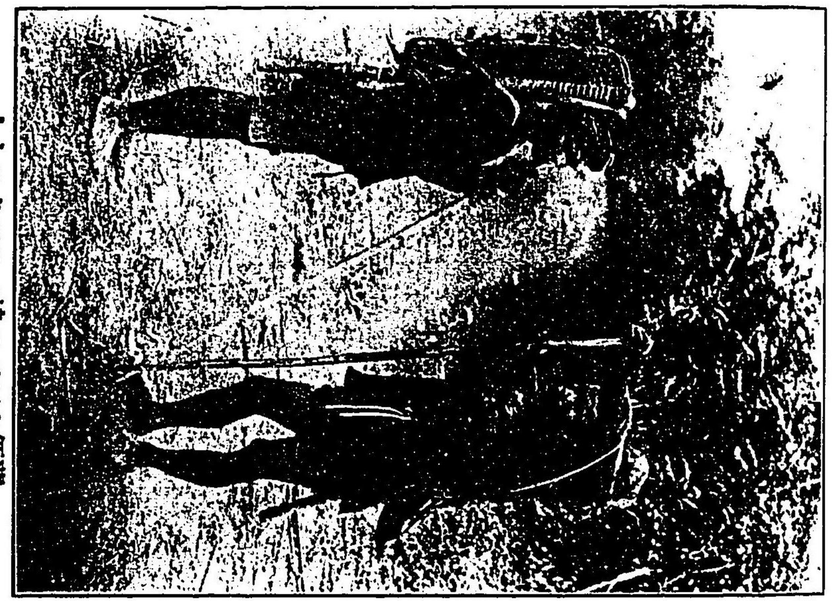
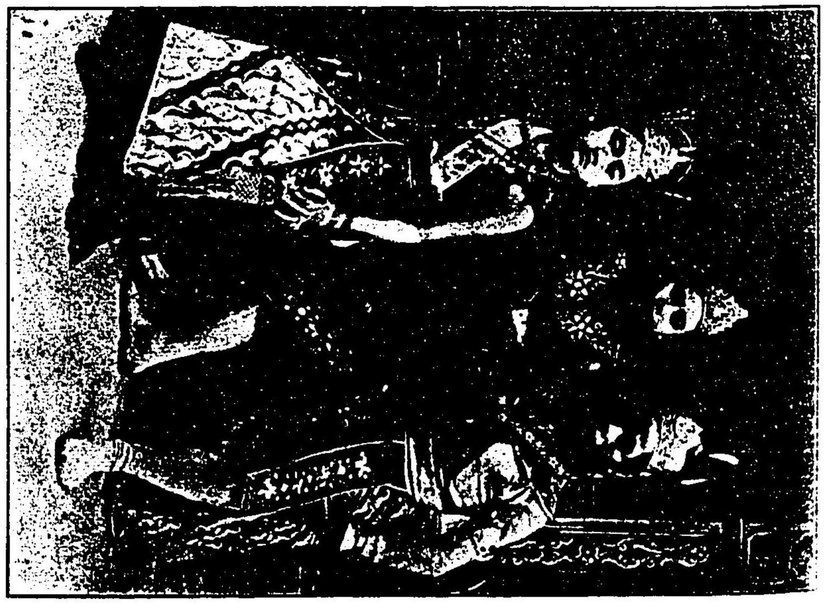
きか、かゝる間に十四世期頃には已に爪哇全島に君臨する王家ありて、其權力、スマトラ、ボルネヲ以下スンダ群島に波及したるものゝ如く、其制度を見るに純然たる封建にして、朝廷の大官は即ち地方に封土を有し、封土の大小によりて其養ふべき兵士の多少を規定せられ、一定の數だけは必らず養はざるべからざると共に、一定の數を超ゆべからざること我封建諸侯の如し、而して此封建君主の外、別に中央朝廷の威權を代表して諸侯を監察し、且つ中央朝廷のために租稅を集むる代官ありて、郡邑、都市、必らず諸侯の權力を奉ずる地方官吏と、中央朝廷の權力を奉ずる官吏の相並行すること、猶ほ我鎌倉時代に於て、各州郡國、舊來の官吏の外、別に鎌倉の官吏を並遣したるが如し、此外また更らに觀察使と云ふべきもの二人ありて、各州に其部下を發し、日々各地の形勢を中央朝廷に報告す、思ふに此の如きは蓋し中央朝廷は外來の印度人にして、土着の封建諸侯と相疑ふの餘に出しものならん、之によりて之を見れば、其制度の才、政治の術、相當に發達して、



爪哇人士ロタンロヂ島スベヤを領國



爪哇人士のヤイヂタバ

決して當時世界の諸國に比して、甚しく後れたるものにあらざりしを知るに足らん。而して其内に於て相攻戰するのみならず、外に向つては海賊を業とし、王公貴人も、海賊たるを以て自から誇るに至り、遂にマレー半島までも其勢力の下に置くに至りたるは氣力剛健、海濤を家とする一國民なりしをトするに足らん。

ジャヴァ征服の順序

かゝる間に西方歐洲に於ては敢爲大膽、組織の才あつて握把の力ある和蘭の勃興するあり、遂に西班牙をして東方の利益を專らにせざらしめんと欲し、葡萄牙の首府リスボンの經驗家より聞きし報告を便りて、千五百六十五年一艦隊を發して東方に向はしめしが、其事失敗に終り、船と人とを失したるも、蘭人猶ほ悔えず、千五百九十八年に至りて、更に個人、會社の船舶を合して二十二艘の艦隊を出し、資本に對する四割の利益を見るや、東方經畧の精神全國に横溢し、幾多の船舶利を爭ふに至り、遂に千六百一年國會の法律によりて、東方貿易の船舶を合同して一の組合を作らしむ。是れ所謂東印度特許會社なるも

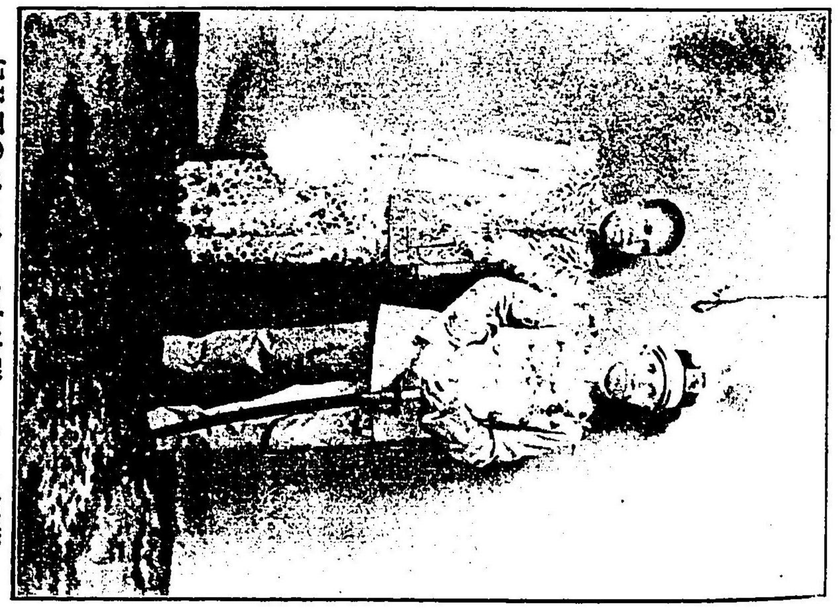
のにして、東方貿易專有の權と、兵馬交戰の權とを有し、喜望峯よりマゼラン海峽に至る間に於て、國會の名を以て同盟を約し、條約を結び、城廓を築き、文武一切の政治を施す權ありて、居然たる一大政府を現出し來る。此より和蘭船舶の東洋に趨くもの多しと雖も、多くモロッカス群島のスパイス(香料)島附近を來往して、土產を貿易すと雖も、艦隊に組織なきを以て、同一會社の船舶、相競ふて同一島嶼に買ふがため、蘭人の利益漸やく少なし。此に於てか此等の船艦、商業を組織して紀律約束を立るの必要を感じ、千六百九年會社の總督を置くに至りしが、自然にまた總督の居住する首都を定むるの必要を感じマレー半島のジョホールと爪哇を得んと欲したるが、ジョホールは當時已に葡萄牙の手中にあるを以て、先づ爪哇を得んと欲し、千六百十九年總督クーン一千五百の兵を以てスンダより上陸し、バンタムに居住するジャカトラ王に對して其土地を求む。ジャカトラ王、英船の助力を得て之を拒ぐも、其效なく、遂にジャカトラを奪はる。東印度會社已にジャカトラを取るや、都を此に定めて其貿易を擴張せんとす、然ども蘭人の望む所、尙ほ商利にありて政權にあらず。此時に方りて、爪哇はバンダム及びマトラムの二王國ありて、互に相侵害しながらもまた互に蘭人の貿易を妨ぐるを怠らず。此に於てか會社總督は其貿易の安全を保護するが爲め、國王土酋等に外交關係を生ずるに至り、時としては之を欺き、時としては之と戰ひ、時としては之に賂遺し、知らず識らず領土を擴張せざるべからざるに至る。然れども多くの場合に於て蘭人は土人全體を敵とせず、或る時は王室の利益を代表し、或時は平人保護の名により土人の勢力を代表して其利害のために戰ふの地に立ちたりき。此の如くして商業會社は、漸く政治會社となり、遂に爪哇よりマレー群島全體に、和蘭の政令を行はざるべからざるに至る。即ち千七百五年にはマトラム王と約してプレンガルを得、千七百四十五年にはセリボンよりバンユワンギに至る東北地方一帶は會社の有となり、千七百五十五年にはマトラム王國は遂にスウラカルタ

とジョクジャカルタの二國に分れ、千八百八年にはバンタム王國は遂に全然夷平せらる。

英國ジャヴァを取り且つ返す

此間千七百九十五年、佛國の大革命に際し和蘭の共和黨、兵を擧げて佛國の共和黨を迎へたるがため、和蘭の王ウイリアム五世、逃れて英國に去りしかば、千八百十一年英國、其囑托により、和蘭に代りて一時、爪哇以下の蘭領殖民地を統御せんとす。爪哇在留の蘭人は、固より之に抵抗したれども、其效なく、遂に佛蘭の同盟破るゝ時まで、之を占領すと云ふ條件の下に、英人の占領に一任す。英國は當初より爪哇の一大富源たるを知らず、唯だ知る處は、土酋と交戰事日なく、財用日に費ゆるの一事のみ、故に深く之に意を注がず遂にナポレオン沒落の後、之を和蘭に還附し、和蘭また英國が新嘉坡を占領するを公認して已む。若し英國にして當時爪哇の資源を知つて、之を和蘭に還附せざりしならば、東洋の局面別に一變し、歷史は更に數頁を增加したりしならん。已にして千

八土酋スペヤを領國



妃及王のダンリマヲ中鳥群スペヤを領國

八百二十五年、爪哇全島の王號を僭稱したるジッパ、ネガラ意を決して蘭人と戰ふ。是れマレー人の最後の戰なりしがため、交戰最も困難にして、和蘭兵の死するもの五年間に、一萬五千人、財用最も窘窮を告げしが、遂に千八百五十年に至りて辛うじて之を夷ぐ。然れども、ネガラの膽氣、善戰は深甚なる印象をマレー人に遺し、土人其死を信せず、再び現はれて土人の爲に戰ふべしと信ずるもの多かりき。ジッパネガラの死後、年を追ふて和蘭の政令、全島に普及し、純然たる和蘭の殖民地となる。此の如く爪哇スマトラ以下のマレー群島は、隨唐頃の朝貢を初として、明の鄭和がスマトラ宣慰使を置きしを終りとして、支那の威令、マレー海に行はるゝもの久しかりしに係らず、和蘭がマレー群島を取るに方りては、支那は全然之を知らず、之を知るも、一辭を挾む能はず。其殖民地の離脱すること熟柿の風に逢ふて地に落るよりも脆弱なるに至りては、深く歎嘆して己む能はざるものあり。而して和蘭が爪哇を取りし後も、多數の支那人は異圖を抱くの名の下に虐殺

せられ、數萬の良民、肝膽地に塗るの慘事あるも、支那の朝廷之を知らざるに至りては、何ぞ其政府たらにあらん。余はマレー諸州を見るごとに、和蘭の之を得たることよりも、寧ろ支那が之を失したることに對して、無限の感慨を生ずるを禁ずる能はず。

土人の社會組織　和蘭は或は自から撰びて、或は已むを得ず、爪哇及びマレー群島を畧取したり。其政治は人心腐敗して、百紀弛廢せる支那に比して善良なるべくして、事實は然らず。支那は宗國の空名を得て、多少の朝貢を收めんとするに過ぎざるに、和蘭は政權の外、經濟的組織によりて利益を吸取せずんば已まざらんとす。故にマレー群島は蘭人の手に歸したる日より、爐中に投せらる。凡そ緬甸、暹羅等の他の東洋君主專制國にあるが如く、爪哇以下のマレー諸州に於ては、君主專制は極端まで實行せられ、人民、國土、山川、皆な王の有にあらざるはなく、王者の一顰一笑は、人民の生命財產の安全に關す。臣民若し美婦人を有せんか、其人の妻たると、娘子たるとを問はず、王若し求むれば其後宮を通過せざるべからず。何となれば人民は王のものなればなり。人民は一年三百六十五日の中、九十日は王のため勞銀なしに力役せざるべからず。王若し求むれば一百五十日までも辭すべからず。何となれば、土地もまた王土にして、人民は王澤によりて地上に生存するものなればなり。其村落制度を見るに支那の儒者が、歷代人類社會の理想と信じたる周の井田の遺法にして、各村の田畑は村民協同して之を耕作し、得る所の產物は、之を六分して、其一分は其土地の所有を王室より許されたる者に分ち、其一分の二朱を僧侶に與へ、餘ます所の四分と、八朱は之を耕作者と王室との間に平分す。土地已に一村共同の力によりて耕作せらるゝを以て、田租の責任もまた一村共同の責任に歸す。是より延きて村落に罪人ありて之を發見する能はずんば其尤は村落に歸するに至る。爪哇君臣の關係此の如し。然るに佛國革命を生じたるほどに風氣開發したる歐洲より來りたる和蘭人は、此の如き君臣の關係を見

て、之を怪まず、之を其儘に繼承して、更らに組織的に、有效的に、之を運用して曰く、瓜哇人は其王に對するが如く、我等にも爲せば即ち足れりと、而して此等の君主專制の繼承者たる會社は專制政治を行ふに方りて、決して自から直接政治を行はず。舊王土酋の手を經て之を行ふ。即ち其形に於ては、王若しくは土酋は、會社と契約を結びて其土地を蘭人に讓與し、會社に對して或る物品は有價にて、或物品は無價に納むべく、有事の日は武器を以て會社を助くべしと爲し、一方に於ては會社に讓與したる土地を、王自から借り受けて、更に之を小分して、農民に貸與し、其報償として生產の一部を己に納めしめ、此中より半ばは會社に納め、半ば自家の用に供し、曾て地主たりし舊王土司は、轉つて受負人の地位に立つ。それ己に蘭人の受負者となり、蘭人は文武の權力によりて、其契約を果さんことを迫る。此に於てか舊王土司は、人民を鞭撻して勞作せしめ、以て其會社に對する貢納を果さゞるべからず、是より人民牛馬の如く、鞭影に慄くに至り、其疎懶性を爲して勞作せざるものは、其舊王土司の領分以外に放逐せらる。何となれば土人には土地所有の權なければなり。是より土人山に入りて天生のバナナを食い、野に至りてアンボの土を食ふものあるに至る。然れども其久うして堪へずして村落に歸るや再び鞭撻の下に勞作せざるべからず。是れ謂所る强迫勞動法にして、瓜哇土人の幸福此より亡ぶ。

蘭人政術の妙　余は此の如き政策を案出したるは、何人の頭腦なるかを知らず、世間、バンデンボッシュ總督となすも、必ずしも一人の力にあらざるべし、後來二百年間、和蘭の瓜哇に於ける成功は、此原則を隨處に應用したるに外ならず、此制度の下に於て、舊王土司は和蘭の統治に屬するも、猶ほ名義に於ては治者たるを失はざるを以て、燕雀の君臣、自大の心、之がため滿足す。彼等は其官職を保たんがためには、東印度會社の總督に約束したるものは、之を納付せざるべからざるを以て、極力人民を鞭撻す。故に人民、若し負擔の重きに苦しまんか、彼等怨恨の情は

舊王土司に集りて、總督蘭人に集らず。蘭人は制度の上より此の如く思考せしむるのみならず、時に觸れ、折に遇ふて、土人をして此く信せしめんことを勉めて怠らず。故に若し舊王土司が總督蘭人と相爭ふに當りては、農民の同情は常に總督蘭人に集り、ブランダ人は人民を舊王土司の壓抑より救はんがために戰ふものなりと信ずるに至りたりき。固より一の國家が殖民地を有するや、政治上の責任は其避くべき所にあらずと雖も、新附の民を得て、國礎未だ固からざるに方りては、勉めて事端を釀すを避けざるべからず。事端已に釀すべからずとせば、現在存立する社會組織は、勉めて之を利用し、漫りに變革破壞せず、蘭人、自から其大綱を攬り、形勢の推移によりて、事を進めんとしたるもの、政治家の經綸なりと云はざるべからず。余は私かに疑ふ日本人をして若し此地に立たしめば、性急短慮なる政治家、必らず、同化、畫一、根本的變革等の意義なき壯語に醉ふて、舊王土司を排し、自ら直接政治を行ひ、事あれば舊王土司を味方とする能はず、一般平人の同情をも有する能はず、萬里獨往の客となるにあらずんば止まざるべし、余は此點に關して、蘭人我に比して一日の長あるを否定する能はず。

會社の失敗

蘭人の政術は此の如く巧妙なりしに似ず、其商業政策は全然、失敗に歸したりき。其原因は會社が當初の目的を忘れて、政治を主とする政府となり、國土を擴張するに力を用いて、商業に注意を怠りしこと、官吏の人選宜しきを得ず、會社の事業以外に、官吏自から私かに貿易を營み、船荷過重のため沈沒したる船舶少からざること、東洋貿易を專有するがため、怠慢放縱に流れしこと、其船舶往々英國船の攻擊する所となりて、或は捕獲せられ或は沈沒するものありしこと、及び資金の缺乏せること等にありと雖も、詮し來れば會社の組織宜しきを得ず、重役自から株主を欺きて利益を占め、其寵幸によりて匪人を用い、之より万事混亂、紀綱頽廢したるに外ならずして、猶ほ我日糖事件の如きのみ。故に千七百九十八年に至り、政府は全然會社を廢し、其負債一億三千四百萬フロリンを國庫の

負擔として、國家自から會社の事業を繼續するに至たりき、而して此後の爪哇統治に關しては、政府に「亞細亞領院」を設け、其政策を定めんが爲め、委員をして事情を調査せしめ、委員は『荷蘭は其殖民地に對しては直接政治よりも、寧ろ監督政治を行はさるへからず、土人は其風俗習慣と共に、舊法舊制の下に土司に一任せさるへからす』と報告す、是より爾來制度に幾變更ありと雖も、此政策は歴代準據せられて今日に至る。

強迫勞働法一變して耕作法となる

東印度會社は失敗したりと雖も、二百年間國家が之によりて利益したるは、殆んど計量する能はす、何となれは和蘭が一時、世界の銀行翁となりしもの、實に東印度會社によりて、南國の利益を吸集したるが爲に外ならさればなり、去れば政府も東印度會社を廢止したる後、委員を設けて其破産始末を調査して後、其政策は大體に於て之を繼承するに決して更らに幾多の改良を加ふ、所謂強迫勞働法は、一轉して耕作法となり、其政術一層組織的

セレベス島サマリンダ王の一族

爪哇ブレンガル土酋の一族

となりて、一層掃蕩的の性質を帶び來る。即ち會社時代にありては、舊王の權力を其儘に繼承して、國土人民、悉く會社の有にして、舊王土司は會社より土地を借りて、更らに之れを小作人に小分して貸與するか如き關係となりしが、今や政府は獨り租稅として、人民の勞力を以て作りたる作物の幾分を受納するのみならず、全國の土地が其所有權の下にありと云ふ理由の下に、其土地に植付くへき作物の種類を制限し、或る地方には珈琲、或る地方には藍草、或る地方には香料を課して、之れを耕作せしめ、米其他、歐洲の市場に於て需要なきものは、土人の生存に必要なる少量の外、之を作ることを禁ず。此命令耕作は獨り人民が借地人として納むる租稅に用らるゝ作物のみならず、政府が人民の所有品として、一定の代價を仕拂ふて買取する作物にまで應用す、而して此價格ある耕作物すらも、政府に賣拂ふの外、他に賣ることを禁せられ、而して其價格はまた政府の命令によりて定めらる。若し舊王土司にして一片、其人民を憐むの意あらば、極力此の如き政策を

匡正すべきに、彼等は寸毫匡正の志なきのみならず、政府より來る路遺に迷ひ、却て蘭人を助けて其統治區域内より、年々必らず幾何の砂糖珈琲を賣り出すべしと約し、人民を鞭撻して其約束を果さんとす。余が最も驚愕したるは、蘭人と舊王土司との約束賣買が直接に條約せられず、支那人が其間に立ちて契約當事者の一人たることにして、舊王土司は己の所有したる土地を蘭人に與へて、却て自から大借地人たるのみならず、此大借地人たるの權利すら之れを用ゆるの道を知らず、また一定の年限を期して、之れを支那人に貸與して利を貪り、而して支那人は政府と約束して、一定の作物を年々政府に賣らんとし、舊王土司は之に必要なる勞力を集むるに就きて支那人を助くるの義務を負ふに至つては其愚憐むに勝ゆと云ふべし。今ま熱帶地方に於て最も困難なる問題は、勞力供給の一事にあり。是れ熱帶は人口の稀薄なるに加へて、山にバナヽあり、河海に魚あり、風雪を防ぐ家屋の必要なく、寒氣を防ぐ衣服の必要もなきが故に、人民の勞作を促かすべき誘因なく、一日勞作して、賃銀を得れば、三日は遊樂飲宴せんとするもの多ければなり。然るに舊王土司は僅少なる利益を分配せられて、此最も困難なる義務を負擔し、其勞力の得られさるや、鞭を用ひて人民を強ゆ。此に至りては人民悉く奴隷の域に墜落したるものにして、從前の政治も人民が悉く王臣たる原則は相同じと雖も、此の如く統率的に實行せられさりしを以て多少生を聊するの地ありしと雖も、此に至りて人民最も痛苦を極む。然れども此の如き鞭撻も、猶ほ十分の作物を生せざるや、民屋農家の前後にある僅少の園庭にまでも珈琲を植へざるべからす、先人の墓上にまでも砂糖を植ざるべからずと云ふに至り、人民の逃散相尋ぎ、村邑の烟火、爲めに消て蕭條たるものすらありたりき。會社廢せられて百事改端すと雖も、此田制のみは益々苛酷を極む。唯た舊來、農耕の上に人民を苦しむるの外、舊王土司、及び會社、共に故なく多數の土人を家事、旅行等に使役して賃銀を與へず、或は與ふるも名義に止るまでの少額を與ふに過きざりしが、會社廢

せられて後總督デーンデル極力此等の弊風を匡正せんとし、凡て無報酬を以て土人を使役するは道路溝河の修築、政府用物品の運搬、船舶荷物の上下等に限ると規定したる一事のみは、多少土人の痛苦を減少したりき。

英人が試みたる自由主義の失敗

和蘭が東印度會社を廢止して總督府を設け、其後久しからずして佛國大革命の結果として、英國が一時爪哇を占領したるは前章已に論じたるが如し。自由及び個人の權利を主張するに熱心なる英人は、爪哇に於ける蘭人が土人を強迫して勞作、農業を爲さしむるを見て、傍觀することなく、直ちに之を改革せんとして、第一强迫勞働によりて作りたる產物を、法外の低價を以て買取ること、及び齋王土司が縱まゝに土人を使役することは、全然之を廢止し。第二に政府は各土人の土地より、一定の租稅を徵收することを得るも土地の耕作は何物にても、人民の自由に一任し、且つ其賣買も人民の自由とし、土司の手を經ず、政府自から直接に人民に政治を行ふこと、第三地方の事情を案じ、

スウラバヤ府稻垣氏夫妻

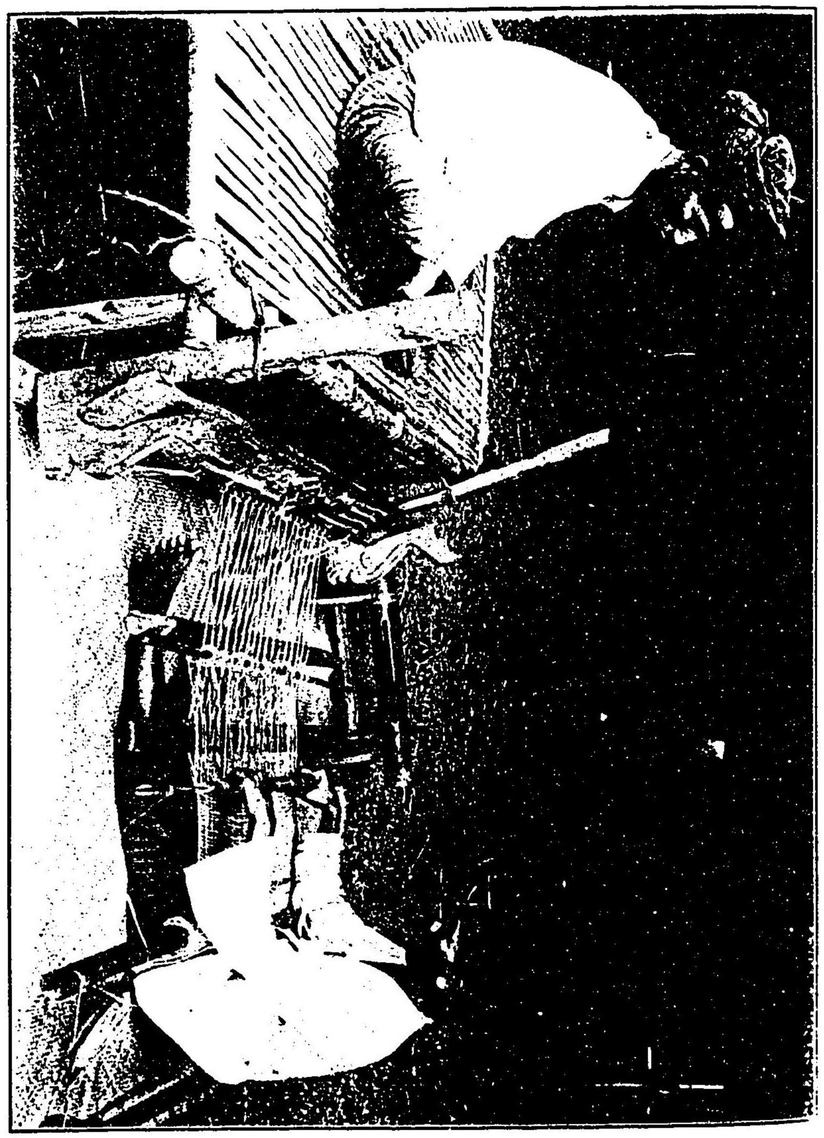
穩當なる借地料を以て、土地を人民に小作せしむることを原則として、法令を作り、且つ此法令に準據したる仁政を行ふこと頗る勉めたりと雖も、其結果は案外に良好ならざりき。是れ瓜哇人、久しく奴隷の境界にあり、卒然として解放せらるゝも容易に自から方向を定めて自立する能はず。且つ怠慢性となりて、他より强迫する者なくんば、努力勞役するの氣魂なく、耕作者は其賃銀を增加して、勞力を得んとするも容易に之を應するものなく、其結果として農業は衰退し、貿易は縮小するに至りたりき。

和蘭本國の輿論耕作法を一變す

故に革命戰爭の後、英國が瓜哇を和蘭に返附するや、和蘭はまた一時に英人の施設を廢絕して、多く舊制に復し、多少の改修を加ふ。即ち英國時代にありては、各土人より租稅を徵收したるも、之を復舊して、一村若しくは一邑より徵收することゝす。是れマレー及び多くの東洋各地にありては、村落は一の自治體にして、刑罰すらも村落に課し、以て罪人隱匿の地なから

しむるの風習なるを以て、一村に稅を課し、轉々して各人に分課せしむるは、怠納者なく且つ割合に公平なるを以てなり。但ブレンガル地方のみは納稅は個人の責任たり。第二、村落の課稅は年々の定額を定めず、收穫の狀況を案じて每年之れを變更することとし、第三に人民は其租稅として納むるものは必すしも、金納に限らず、其便宜とする所によりて納稅するを得せしむ。而して英國が土司の手を經ずして直接に人民を統治せんとしたるを排し、全然舊制に復し、土司を以て人民直轄の治者となす。是れ最も土人の感情、利害に通じ到底外人の得て學ぶ能はさるものを有すればなり。而して舊王土司が土人を强迫して勞作せしめ、且つ耕作物の產出を受負とする一事のみは、愈よ勵行せられて力を餘ます所なく、政府が製產多き地方にありては、舊王、土司、及び村老に與ふるに政府の土地を以てして、之を褒賞するに至りて極まる。元來、舊王土司が勢力なき所以は、土地を有せざるが爲めのみ。今や土地を得るやマレー人間に於ては人民は土地に附屬するものと信せらるゝがため人民に課役を命ずるの權を生し、自大、放縱、壓抑を極め純然たる封建の舊制を小模型の中に再生して、甚たしきは怠納者を追放し、其妻子を家に入れて奴隸たらしむるものあり。痛苦の聲全島に充溢し、遂に千八百二十年エヅウアルド、デッケルをして『和蘭貿易會社の珈琲競賣』と題する小說を著はして天下に訴ふるの已むを得ざるに至らしむ。デッケルは和蘭政府が爪哇に遣はしたる小官吏にして、官、副理事に至りしが、其長官が土司と通謀して、土人を掠奪抑壓するを見て、慷慨の情禁ずべからず。蘭人が飲むコヒーが、如何に土人の血によりて栽培せらるゝかを述べて、其義憤を公衆に告たるものにして、一時、天下に傳唱せられて、人心を皷動す。此時爪哇總督は其權力の過大にして、且つ其事實を母國に秘したるより、各黨の猜疑を受け、加ふるに自由黨漸やく議會に勢力を得て、其自由主義を隨處に應用せんとするの氣運に際會し、此等の著書によりて煽揚せられたる人心と相吻合し、千八百七十年の議會には殖民政策に關して討

議を開くに至り、遂に田制法を制定して、強迫勞働を禁じ、併せて、政府の事業專有を廢し、單獨なる歐洲人の渡航營業を奬勵し、且つ一村が勞働契約を結ぶを禁じて、土人を土司政府の强迫より保護す。此に至りて瓜哇は他の諸國に於けるが如く、自由勞働、自由營業の國となりて、二百年來の歷史此に終を告ぐ。唯た政府が國有土地の珈琲耕作に適當なりと見る地方に居住し、且つ政府の土地を借受くる土民に對してのみ地租に代ゆるに勞力を以てし、且つ其生產する珈琲に、强迫買收法を適用するは以前に異ならず。故に千八百七十年の法律によりて强迫耕作法は廢止せられたりと雖も、珈琲耕作に對しては除外例ありとす。但し此方面に於ける强迫耕作法も年々歲々、消滅して、自由耕作に變しつゝあるは掩ふべからずとするのみ。然れども瓜哇が今日の如く砂糖コヒーの耕作、全國に普遍して、一大國產となりしものは、强迫勞働の結果たるを忘るべからざるなり。別に强迫勞働法を行ふもの、英領印度に於て、少しく別個の形式に於て之を行ひたることあ



瓜哇土人布を織る

るも、今は已に之なく、西班牙は曾て之をヒリツピンに行ふたるも、千八百八十年之を廢止す。此等の制度今日に於ては行ふべからざるも、其當時該地方にありては奴隷制度より自由勞働に移るべき過渡時代に於て、一大有效の制度たるを忘るべからざるなり。

土人の教育

以上は瓜哇が蘭人の手中に落ちし以來の政治及び制度變遷の大要にして、如何に蘭人が土人を待遇したるかを見るべし。今や慘虐なる制度は悉く迭廢せられ、土人は自由の天日を得たるが如し。然れども是れ唯だ一人の壓政者を離れて、他の壓政者の手中に落ちたるのみ。智識なき自由は、適ま以て人をして陷穽に落らしむるを助くるに過きず。舊王土司の鞭鞭を免れたる土人は、却つて歐洲人、支那人の經濟的繩索に縛せられて、また動く能はざらんとす。且つ久しく奴隷の狀態にありたるものは急に之を解放するも、容易に奴隷の心性を脫する能はず。之を脫するは唯だ教育の力なりと雖も、和蘭政府はまた危險を犯して、

土人を教育するの愚を爲さゝらんとするものゝ如し。即ち千九百六年の報告によれば、爪哇及びマヅウラ島に於て、土人の爲めの官立小學校は三百二十三にして、七萬五千人の學童あり。私立小學は四百四十六にして、五萬人の學童あり。政府が之に費す所は二百三十萬ギルダアに過ぎず、此外別に藩王土司の子弟の爲めに、四個の學校ありて二百六十人の學童を有す。三千萬人の子弟を教育するに、此僅少の學校を以てす。思ふに政府は學校を以て一種の裝飾とするに止まり其普及を望まざるものか。蓋し、土人教育問題は何れの殖民地ありても、一大難問題たり。大抵殖民地には固有の文學の、土人を教育するに足るものなきを以て、宗國の文字文學を教へざるべからず。然れども宗國の文字文學を知らしむれば、日常の用に供するに止らず、必らずや其中に周流する自主、自立、國民、人種等の精神に感觸せざる能はず。服屬したる人民をして、此等の文學を知りて、此等の精神に感動せしむるは、即ち彼等に叛亂を教ゆるに等し。是れ英國が印度に行ふたる所にして、其結果として『印度人の權利』『印度人の印度』なる運動を生じて、自から其控御に究するは中外の等しく見る所なりとす。此點に於ては、蘭人は英人よりも却りて實際的人種と稱するを得べきか。

奴隸の如き生活　其結果として土人は依然たる土人にして、近代生活は寸毫も彼等の間に入らずと云ふも過言にあらざるが如く、柱は依然として竹にして、屋根は舊の如く藁にて葺はれたる家屋の中に、葬式にて歌ふが如き音樂を歌ふを聞きては、亡國の民の、亡國の哀音を聞くの感、禁ずる能はず。彼等は皆て洋服を着る能はず、靴を穿つ能はず、歐洲風の帽子を着くる能はず、若此禁令を犯すものは、一ヶ月の禁獄に處すべしと定められたるが、今日に於ても昔時の風俗を墨守して遷らず。依然として熱天炎地に素足にて歩行し、體を掩ふにはマレー風の上着と、湯文字とを以てし、上流の婦女のみは、我國にて幕府の貞享前後まで用られたる『かつぎ』の如き更紗木綿を頭部より被むり、男子は風呂敷の如き更紗木綿を以

て頭部を掩ふ、蓋し風俗上の禁令は今日は効力なしと雖も、和蘭官吏が土人の風俗は斯くあれかしと望む一事已に足れり。土人は無効の法律をも墨守して移らず。土人は富人と雖も一等汽車に乗る能はず。和蘭人は如何に貧窮するも、土人の家の雇人となる能はず。是れ祖國の自尊心を傷ればなり。土人は如何に有爲卓拔の才幹あるも、歐州人を妻とする能はず。是れ土人をして歐州人を天上の人種と信ずる『美風』を破らしむるの端緒なればなり。和蘭人は如何に才色雙絶の土人女子を發見するも、之を正當なる妻女として迎ふる能はず。是れ土人をして歐州人と同等なりと信せしむるの基なればなり。余は中部爪哇より南部爪哇に到る頃、汽車、市街等にて勞働者を使役して賃銀を與ふるに、彼等が膝を屈し、雙手を重ねて之を受るを見、また土人のクーリーが車室の中に入り來りし時、蘭人が之を蹴るも一言を發せずして逃げ去りしを見たり。

爪哇の將來は一大雜種國

蘭人は此の如く、土人を敎へて蘭人を天上の人の如く見て、敢て抗する能はざるを信ぜしむと雖も、『愛』の力は、法制をも破ること、猶ほ我上代の良民賤民の區別が、賤民中の美人の力によりて蹂躙せられたるが如く、蘭人は如何に人種的自尊心を維持せんと欲すと雖も、愛の前には法制なく、相競ふて土人を娵る、然ども法禁の命ずる所を破る能はざるを以て、正當の妻とせず、妾婦として養ふのみ。和蘭政府また此事實を默認するの外なく、蘭人は土人を娵る能はざるも、蘭人と土人の間に生れたる混血兒を妻とすることは公認せられ、而して土人は軍隊に入るも、其昇進は制限せらるゝ所あるに反して、混血兒は昇進して將軍たるの權利を有し、現に爪哇守備隊司令官は此種の人に屬す。夫れ此の如く土人の婦女は蘭人と相娵る能はずと雖も、其蘭人の妾婦となるや、其子は蘭人と同一の權利を享有するを以て、所謂る母は賤しけれども子は尊ときの風を生じ、土女相率へて蘭人の妾婦たらんとするを希ひ、全國到る所混血兒を見ざるの地なしと云ふも過言にあらず。殊に爪哇の守備隊は和蘭の常備軍を派遣

せるものにあらず。給料を懸けて募集したる雇兵にして、其給料は以て歐州婦人を妻として養ふに足らざるが爲、相率へて土人を妾とし、非常の速力を以て混血兒を製産す。余は多くの殖民地を見たれども、爪哇の如く混血兒多きものを見ず。而して和蘭政府また此事實を承認して、二種の法律、二種の政治を行ふ。曰く歐州人及び之と同階級の國民に適用する法律、政治、曰く土人及び土人と同階級の他の亞細亞人に對する法律、政治、是なり。而して滔々たる混血兒が、皆な歐州及び是と同階級の種族中に編入せらるゝがため、其自尊自大の氣、近つくべからず。邊境、群島、爪哇の中央と交通少なき地方に於て、日本人及び英人に對して、往々亡狀あるものは、多くは混血兒官吏なりとす。余は曾て和蘭の一官吏に對して、爪哇の混血兒は和蘭人よりも、更らに一層和蘭人なりと評したるに、其人唯だ苦笑するのみなりき。而して彼等は土人と親近ならざると共に、和蘭人に對しても、中心欝々悶々たること少ならず。往々にして本國より來る輕薄少年が、本國人たるの特權によりて、經驗ある老人の混血兒を超越するを誹るものなきにあらず。思ふに爪哇に於ける將來の一大問題は、混血兒にあらんか。

爪哇歳入の欠陥

和蘭人が土人を待つや抑壓を極む。余は之を評して不法若しくは慘虐と云ふを好まざるも、和蘭人が、文明の名によりて之を領有せんには、今少しく土人の生活慾を刺激するも、決して和蘭の患を爲すものにあらざるべしと信ず。然ども和蘭政府は其慈悲深き壓抑によりて、飽まで土人の生活を現狀に止まらしめ、永久に此國を農業殖民地たらしめ其土の産する所を以て、歐州の市場を控制せんとするの外、餘念なきもの丶如し。今爪哇の面積は五萬五百五十英里にして其十分の四は開墾せられたりと云はゞ、蘭人が如何に農業に勉勵せるかを想像するに難からず。過去三十五年間に和蘭政府が此領島より本國に吸集したる純益、四億グルデンにして、毎年の純益或は一千萬グルデン、時として四千万グルデンに當る。蘭人各自の貿易より得る處は此外にありと云へば、其土産の

如何に豐富なるかを想見するに足らん。然るに瓜哇政府の歳入は左の如く、近年不足勝にして大凡毎年八百万圓内外の不足あり、一に本國の補助を仰ぐと云ふに至りては、驚くべき現象と云はざるべからず。

歳	入	歳	出	△不足◉剰餘
千九百四年	一五二六一七二三三	一六六五二七〇九九	△	一三九一九八五七
千九百五年	一五五六四六〇六三	一六六二二二七八	△	一〇五七六七一五
千九百六年	一六九三四〇〇〇四	一六七九五〇八五一	◉	一三八九一五三
千九百七年	一九四七一六七六七	一七二九九〇五〇〇	◉	一一七三六二六七
千九百八年	一七五一四二三九六	一八一七四六〇一二	△	六六〇三六一六
千九百九年	一八〇一四八七五五	一八七一四三九三〇	△	六一九九七五五

右の歳入の内容を案ずるに、輸入税、輸出税、消費税、地租、營業税、人頭税、相續税、印紙税、專業受負税(阿片吸煙舖、賭博店、質屋)、礦山、山林許可税、政府所有の土地より生ずる産物の賣上高(コヒー、錫、シンコナ)等にして甚しきは一本の樂樹にまでも課税す。而して其税目に於ては前後變化なきに係らず、漸やく不足を生ずるに至りしものは何ぞ、蓋し會社時代は言ふまでもなく、總督時代に至りても千八百七十年

師技社會株製鴻臺・員社井三・婦夫氏野高者著てに府ヤバラウス

の改革以前は、蘭領印度の財政は之を議會に詳示せず、總督の獨斷を以て萬事を決定したるがため、好都合に運ばれたりと雖も、七十年の改革以來、殖民地の財政は、本國政府之を定め、議會の協賛を要することとなりしを以て、收支の增減自由ならず同時に强迫勞働法の廢止以來、政府は無代價に等しき勞働を以て、國有の土地を耕作せしむるの便宜を失したるもの、歳入欠陷の重なる原因たりと云はざるべからず。

和蘭政府の短見

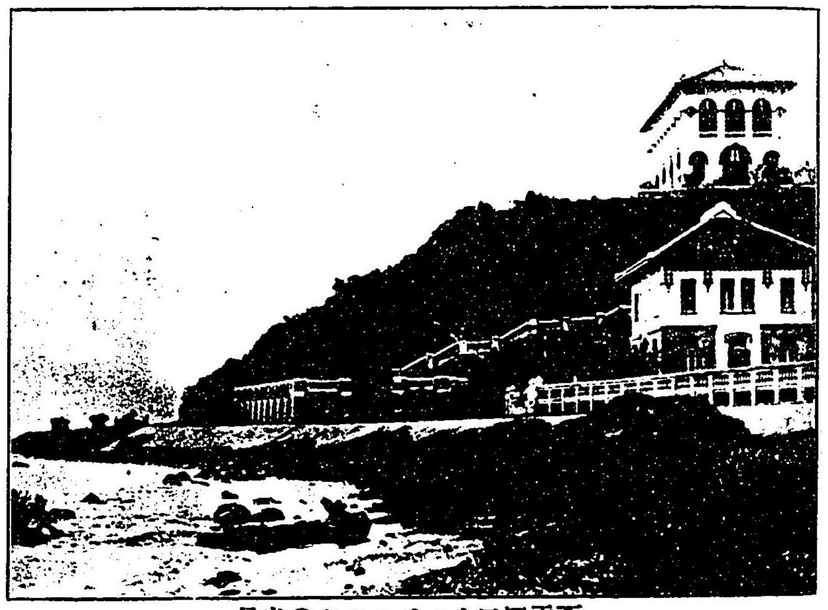
斯の如き形勢の變化に處して、和蘭政府が取るべき政策は土人の生活狀態を改良して、生活慾を刺激し、彼等をして自から蘭貨の購買者たらしむるにありと雖も、和蘭政府は依然として、土人を壓抑して其耳目を開かしむるを好まざるが如し、蓋し殖民政策に關する和蘭人の智能は、殆んど東印度會社及び、爪哇總督府に畜藏せられたりと云ふも過言にあらず、而して會社の廢せられて、總督が其專制獨斷の權を奪はれて以來、和蘭には殖民政策と稱するものあ

ることなく、唯だ勉めて殖民地より收歛せんと欲する外ならざる凡庸政治となり了る。千八百七十年殖民大臣ドアールは自今蘭領殖民地よりの貢金を毎年一千万圓に制限し、之より以上の剩餘金あらば、之を以て殖民地の改良進歩のために消費せんと計畫したれども、衆議院は之を否決し、剩餘金は一切本國國庫の所得とするに決したり。是れ衆議院は多くは算數を尙ぶ中等社會の代表にして、殖民地を開發して、未來の寶庫とせんと云ふが如き遠謀深慮は、其能く解する所にあらざればなり。此の如く中等民族の勘定政畧と、政治家の殖民政策と相爭ふ間、千八百七十三年のスマトラ戰爭起り、兵禍連年結びて解けず、此役に費したる數千万圓と、爾後年々の設備との爲め、蘭領印度の財政は、漸次、剩餘金を生ずること少なきに至る。然れども和蘭政府は、猶ほ此殖民地より黃金を收集するの政策を廢棄せざるが如し。

外國人、蘭人、共に土地を買ふ能はず

蘭領殖民地を開發して、其財源を涵養する第二の手段は、外國の資本を注入せしなるにありと雖も、和蘭政府は一切の土地を、外國人は勿論、和蘭人にすらも賣却せしめず。土地の轉移は唯だ其借地權の轉移に過ぎず。東印度會社時代より、爪哇及び各島嶼の土地の大部分は國有にして、舊王土司も皆な國有の土地を借受けて、更らに之を土人小民に分貸するものに過ぎざりしは、余が前條に於て說きし所なり。其後東印度會社の役員に賞與せんが爲めに、土地を與たるより私有地を生じ、また英國の一時占領時代に私有地を增加し、更らに總督府時代に入りて强迫耕作法を勵行せんがため、舊王土司に土地を分與して此政策に協力せしめたるより、更らに私有地を增加し、土地國有の原則ありと雖も、事實は往々にして例外の私有地あり。而して此私有地の大部分が土人の手中にあるを以て、狡猾なる蘭人、支那人等が土人の愚朴に乘じ、名義のみの金錢を與へ、甘言を以て其土地を奪取するもの少からず。今日に於ては私有地の大部分は蘭人支那人に歸す。此に於てか法令を以て土人の外、土地を購ふの

權なしとするに至りたり。然ども猶ほ借地權の名義の下に、土人の土地が外國人の手中に入るもの多きが爲め、政府は全國の私有地を買上げて再び國有の故態に復歸せしめんと欲し、近時毎年五十万圓の豫算を計上して私有地を買上つゝあり。然れども事業の宏大に比して金額少きがため、今や公債を發して、一時に全國の私有地を買上げんと計畫しつゝあり、本國政府の同意せざるが爲め、其事容易に行はれ難しと雖も、本國政府も結局、殖民地政府の提議に同意するの外なからん。余曾て政府の官吏に問ふに何故に土地を國有とするかを以てす。彼答て曰く何故と云ふか請ふ蘭人、支那人が如何なる手段を以て、土人を欺きて土地を盜むかを見よ。彼等が借地の名義の下に所有する土地は、一エークル六七圓の少額を以て買たるに過ぎず。それすらも借金の利子のために抵當として占領せらるゝなり。甚しきは其製造所に通ふ職工に給料を前貸して、其償還の後るゝや、其所有地を占領せしものすらあり。而して、強迫耕作法は已に法律によりて廢棄せら



西貢河口サンジャックの光景

西貢附近チョロンにおける安南人の演劇

たりと雖も、然ども蒙昧にして久しく奴隷の境遇にありしマレー人は、土地を有するものは即ち人民を有するものなりと妄信し、他人の土地を借るものは、地主のため奴隷の如くに使役せらるべきものなりと信ずるもの多きがため、蘭人支那人にして、土地を私有せば、強迫耕作の舊習を呼び起すは勢ゐ自から然らしむる所なり。是れ政府が土地回收に鋭意する所以のみと。今や世界の經濟學者の多くは、多少にても社會主義の色澤を帶びざるもの少なし。社會主義の極意は土地の國有にありとせば、爪哇政府は社會主義の理想を實行しつゝあるものにして頗る興味ある政治と云はざるべからず。

今日の田制

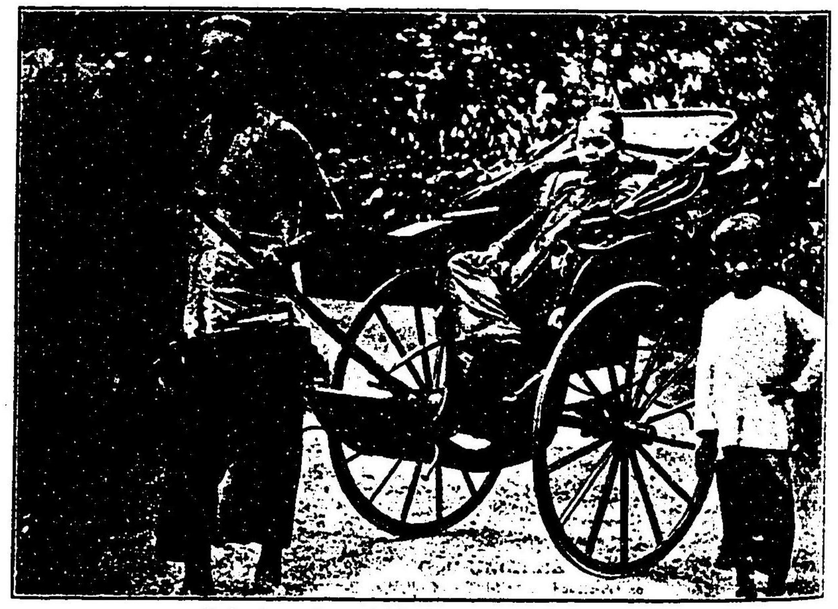
以上の制度の結果として、蘭領殖民地の土地は三種の耕作者あり第一は政府の土地を、政府自から耕作する者にして、此土地に於ける珈琲の耕作には、強迫耕作法を用ひ、珈琲以外には自由勞力を雇使す。而して此強迫耕作法を施行せざる地方に於ては、凡ての階級の土人より、毎年一ギルダアの人頭税を徴

收して、強迫勞働に代ふ。第二は私有地にして、曾て其大部分が土人の所有なりしも、今は大部分蘭人、支那人の所有に歸す。第三は政府の土地なりし、藪澤山林を私人が借用して開墾したるものにして、其年限は七十五年の長期契約にして、其子孫之を繼承するを得べく、一種の有限處有權と云ふを得べし。殖民地政府は此の如くして土地所有權の蘭人外國人の手中に落つるを禁ずと雖も、其排外心に由來せざるはバンカの錫礦事業は、政府の所有たるに係らず、其開墾、溶解、運搬等は一切を支那人の受負に一任し、或は爪哇、支那汽船會社の如きは、支那人の株主たるに係らず、之に保護金を與ふるを見て知るを得べし。

土人日本を好む　和蘭政府は以上の如く土人を保護するに於て極めて力を用ゆ。其衣服風尙に就ては勉めて舊態を維新せんと欲するが如き、學校敎育の普及を謀らざるが如き、或はまた歐洲人共通の風習に背きて、基督敎の傳播を助けず、土人をしてマホメット敎の信仰より移らざらしめんとするが如き、確かに壓抑政策に相異なしと雖も、余は之を以て慈愛ある壓抑と稱するに躊躇せず。何となれば若し敎育行れ變革來り、近世式の生活侵入せば、土人の幸福は永へに去るべければなり、然ども春來れば、都邑にも、深山にも、花は一時に開く。人種的覺醒の精神は、漸く世界の全面を吹き回り、此南荒の地に於ても、蘭人の家長政治は、醒めかゝりたる土人の目を閉ぢしむるに足らざらんとす。蘭人は爪哇其他の島嶼に於て、善政と惡政とを併せ布きたり。土人は曾て蘭人の善政に隨喜したるも、覺醒したる眼に見ゆるものは惡政のみ。且つ三百年間蘭人に屈服したるを見てマレー人に剛健なる氣魄なしとせば誤謬たるを免れず。曾て元人が大兵殺到を以てバタヴヤの王廷を威迫したる時、其使者の面に唾して之を放ちたるマレー人は、元の使者を鎌倉に斬りたる日本人と、其自尊無諱の一點に於て經庭あるを見ず。蘭人が其城廓をバタヴイヤに構へて、堅艦利砲を以て之を守りし後、二百餘年にしてマレー人の權利を回復せんとして起ち、五年の間全島を騷動せしめ、和蘭人を

して殆んど國力を擧つて鎭壓に勉め、一萬五千の壯丁を戰場に捨て、幾千萬の國用を費して僅かに能く全島を鎭定せしめたるジッポネゴロ(ジョクジャ王の妾腹の子)はマレー人の勇敢膽畧のために氣を吐くものと云ふべし。マレー人は今猶ほジッポネガロの死を信ぜず、マレー人危急の時は再び顯れて戰ふべしと信ずる者少からず、去ればスウラカルタニ於てもジョクジャカルタに於ても、舊王の朝廷は坐ながら年々幾十萬の贈遺を和蘭政府より受け、其家居生活は其自大の心を滿足せしむるに足るものあるに係らず、心中常に蘭人を怨恨して、且つ之を輕侮するの念禁すべからざるものあり、其臣僚の貧困痛苦と相合して、常に爪哇內政の困難を釀生す。凡そ何れの殖民地にありても其舊王、土司を待つの厚き、和蘭の如きは少なく、其成るべく舊王土司を用ひ、且其名によれる政治を行ふの一點は最も巧妙なる政策にして、蘭領統治の成功は、首として此政策に歸せざるべからずと雖も、此厚遇重遇も、以て中心より彼等の心を攬るに足らず、滿腔の

交趾支那音樂隊



西貢附近チョロンにおける支那人部落

不平、時ありて和蘭人を憂虞せしむるものあり。即ちスマトラのアチーンに於ては、土人蜂起して殆んど交戰國の狀態にあり。ニウギニヤに於ても、セレベスに於ても、土人の叛亂堪へず、常に兵禍に勞る。若し和蘭人にして馬上に取りし天下は馬上にて統治すべしとの思想を以て、單すら威力を以て諸島を治めんとせしならば、其統治は決して今日の如く成功せざりしならんと稱せらる。然るに此マレー人は今や日本が海表に崛起し、一戰して支那を破り、再戰して露國を破りたるを見て、歐洲人にあらざる者、また能く爲すに足るとなし、恰かも旅客が長夜を脫して、曉星を望みたるが如く、日本人を企慕するもの少からざるに至りて、瓜哇政府の憂虞一層增加するに至りたり。

蘭人の憂虞

和蘭の國際的地位は常に甚だ不幸なりと云はざるべからず。千八百年の大革命に方りてや、佛國革命の侵入に逢い、中立を維持する能はずして、佛國に黨し、佛國敗績の後、漸やく英國の厚意によりてセーロン島を除くの外、東洋

の領地を回收するを得たりき。近時露國がバルチック艦隊を日本海に送るや、和蘭政府局外中立を公表するも、殆んど露國のために之を破られんとしたりき。當時和蘭人は心中また私かに露國に黨したりと思はるゝもの少からず、瓜哇の新聞紙が露國の敗北を報道するを禁じ、土人をして成るべく露國の敗北を知らざらしめんことを謀りたりき。而して此頃より瓜哇在留日本人の擧動に對して、深く注目し、殆んど十中の八九、皆な國事探偵なるかの如く、監視の下に置かるゝに至りたりき。然れども禁菓を食はんと欲するは、エデンの花園を追はれたる以來、生人の通情なり。土人は此の如くして其耳目を掩はるれば、掩はるゝほど、日露の關係、日本の近事を知らんと欲して、已む能はず。昨年スウラカルタのソルタンが其市中を通行するに方りて、日本雜貨店の前に至りて其馬車を止めしが、車中にて陪乘の和蘭侍從武官と相語るもの久うして、侍從武官、車を出で、日本雜貨店に入りて日本皇帝の年齢幾何を問ふ。雜貨店主が陸下の寶算を以て答ふるや、彼は一揖して去り、王を促して一鞭を加へて馳せ去りたりき。思ふに是れ王の意、日本雜貨店に入り、日本人の口より、日本の近事を聞かんと欲したるも、侍從武官の何事を知らんとするかとの質問に逢ふて、僅かに陸下の寶算を知らんがためのみと推諉したるならん。而して侍從武官は陸下の寶算ならば余之を問はば足れりと號し、王を止めて車を下らしめざりならん。茲に至りてはスウラカルタの王も一の俘囚に過ぎざるを知るべく、其日本の近事を知らんと欲する所以の心事も、また畧ぼ察すべきのみ。またボルネヲに於ては土酋、一日、日章旗を掲げたるに、四隣響應したることありと云ふ。若し文學的修辭を以て之を形容すれば瓜哇の婦人は蘭人を好み、男子は日本人を好むと云ふを得べきか。

窘迫せらるゝ日本人

以上の如き關係より、蘭領印度に於ける日本人の位置は甚だ愉快なりと云ふ能はず。日本人の此地方にある者を數ふるに、瓜哇本島に三百人、スマトラに千百人、ボルネヲ其他の群島に在る者と合して二千六七百人に

なるが如し、然とも爪哇政府は各地に散在する是等少數の日本人に對して、極めて神經過敏にセレベス島のトンダノウに於ては、日本行商の上陸を禁止せられたるあり、其人、言論の才あり、巧みに條約を楯として官吏を難詰し、官吏をして言辭に窮して上陸を許さしめたるも、該官吏は更らに附近の土民に命じて、日本雜貨を買ふ勿らしめたるを以て、行商は力盡きて遂に退去したりき。またバリー島にブレレングと稱する小島あり、日本行商の此に入らんとするや、官吏之を禁じ此地方は、日本人と英人の入るを許さずと傲語し、遂に之を退去せしめたりき。一昨年和蘭女皇降誕節に際しスマラン市中の日本人も、また和蘭人と慶を分たんと欲し、各軒頭に日章旗を掲たるに、理事廳の警察官來りて、日章旗を除去せんことを要求し、且つ和蘭の國祭に際して日本國旗を掲ぐるを不敬なりと言ふ。スマランの日本人は純粋の商人にして、書生少きを以て、平生に於ては柔順なりと雖も、此の如く國旗を侮辱せらるゝに遇ふては默過する能はずとなし、總代を選びて理事官に面會せしめて、其不法を詰難す。理事官は其決して自己の命令に出たるにあらざるを辨疏すと雖も、日本人聽かずして謝罪を求め、遂に理事官をして該警察官の行爲は自家の命令に出しにあらざを旨を記したる覺書を自書せしめて、甘心したりき。如何に邊境の官吏と雖も、理事が此の如き命令を發したる者にあらざるは之を信ずるを得べし。然ども警察官の言行は無意識の中に、爪哇官憲の間に行はるゝ思想感情を洩發したるものと云はばるべからず。余がジョクジャカルタの舊王を見んと欲して、理事官の拒絶する所となりしが如きも、また此思想の發露したるに過ぎざらんのみ。

支那人の位置

蘭人をして日本人に戒心せしむるに至りたるものは、支那人問題もまた與かりて力ありとす。支那人の蘭領群島に移住したること一日にあらざるは、余が已に論じたる所にして、東印度會社を助けて强迫耕作法を行はしめたるは、支那人の力、少なきにあらず。其後前後二回大虐殺を受け、一時は殆ど遺種

なきに至りしが、再び滿潮の勢を以て移住し來り、今や政府の報告によれば支那人の數を五十五萬人なりとすと雖も、實際の事情に通ずるものは、之を以て少きに失すとなし、七十萬人と數ふれば事實に近かるべしと論ず。彼等は礦山の工夫より、田畑の耕作より、小賣商人より、大商店の主人より、製造所の社長に至るまであらゆる階級に普及す。今蘭領印度全體に於て政府が官有地を人民に貸附たるものを見るに、歐洲人に二百三十七萬エークルニして、支那人に三十萬エークルあり。以て本國政府より何等の援護を受けざる支那人が、其單獨の力量によりて、如何に政府の援護を有する歐洲人と相結抗して、經濟上の大勢力となりつゝあるかを見るに足らん。爪哇の支那人に起源と號する商店あり、其財力三千萬ギルダアにして、獨り支那人中の富者たるのみならず、爪哇全島を通じての最大富者なりと稱せらる。蓋し和蘭政府は其殖民地を開拓するに方りて、歐洲人は勞役に堪へず、土人は朴愚にして氣力なく、其間に立ち、勞役にも堪へ、且つ氣力と知識とあり、歐洲人と土人との媒合的勢力たるものは支那人にして、熱帶地には欠くべからざる要素たるを知ると共に、其勢力を過度に助長するは、また自から一個の危險を釀もすものなるを知る。故に支那人に對しては其勞力と財本とを使用するに止め、其自由を制限して、成るべく其發達を妨げんと欲するもの丶如し。

支那人の痛苦　蘭領印度の法律行政に二個の區分あり、一は歐洲人及ひ之と同階級の國民を主とし、一は土人及び之と同種類の國民を主とするは已に之を說きしが日本國民は其優等なる國家の位置より、歐洲人と同樣の待遇を受け、支那人は土人と同樣の待遇を受く。故に辨髮を着けたる支那人は往々一等瀛車に乘ることを拒絕せられ、日本人は三等瀛車に乘ることを拒絕せらる。是れ一等瀛車は歐洲人のためにして、三等瀛車は土人のために設られたるものなればなり。支那人はまた自家の居處を轉ずるごとに旅行免狀を要求せらる。凡そ如何なる國人と雖も、蘭領印度に入るものは、必らず旅行免狀を要求せらるゝが故に、一回は

必らず之を受けざるべからず、而して紳士の旅客には二圓五十錢の免許料を納むれば、ホテルの支配人は政府に至りて之を受へきが故に、手數なしと雖も、支那人に至りては一々政府に至りて之を受けざるべからず、支那人已に旅行免狀を有すれば、蘭領の何れの地方に行くも、理宜しく有效なるべし、然ども支那人のみは蘭領の一の地方より、他の地方に旅行するに、また別個の旅行免狀を要す、支那人若し、行商にして日々居處を轉ずれば、日々免狀を要す、是れ支那人の至る處、土人の利益を吸集すること、恰かも猶太人がバルカン半島の如き未開の地に入るが如く、殆んど土人の利益を枯渇せしむるものあるがためなり、歐洲人はまた租稅徵收の時にも、其財產營業狀態を宣言すれば、政府は之に應じて徵稅命令を發すと雖も、支那人に至りては、政府は其宣言に滿足せず、政府自ら財產營業狀態を檢討せずんば已まず、之がため支那人の課稅は常に歐洲人に二倍するに至る、また支那人は銃器を藏する能はず、是等は其一例なりと雖も、萬事に就きて、政府は

西貢附近チョロン市

交趾支那の土官

支那人を抑制するを以て其政策とするが如し。此政策は固より歴史の般鑑に顧念したる者にして歐洲人全體の贊同を得しものたるや疑ふ可らず。何となれば此等の支那人は、殆んど一百年前、或は二百年前より此地方に住居したる者たるに係らず、依然たる支那人にして、其土風に同化せず而して本國に於ては僅かに墳墓あるのみにして、生業なく、進みては和蘭人民たらず、退きては支那人民たらず。世界無宿の浪人たるに過ぎず、之を取締るは相當の抑制を要すればなり。

臺灣人の位置

然るに茲に支那人種にして、而して支那人ならざる一種類あり即ち臺灣人是なり。彼等は名は臺灣人と稱するも、其父祖が臺灣より出たりと云ふのみ、臺灣を知らざるものすら少からず。臺灣は彼等が蘭領に生を托する間に日本の手中に歸せしものなるが故に、當時に於ては彼等もまた、私かに日本を罵りて倭奴、我が故郷を取ると云へるものならん。然るに彼等は今に至りて始めて日本政府に感謝するに至る。何となれば彼等は日本帝國の統治を受る臺灣の民

たるが故に、而して日本政府は他國と制度を異にし、殖民地にも憲法を適用するを主義とするが故に、臺灣人は日本帝國の臣民として、憲法の保護を受くる文明人として、蘭領印度政府より歐洲人と同一の待遇を受くるが故なり。余が南方スウラバヤより中部ジョクジャカルタに入るや、茲に李の一姓あり、兄は清國人にして福州の民と稱し、弟は臺灣人にして、日本帝國の臣民たり。余の歴遊を聞知し、日本人を介して、其家に宿泊せんことを求む。余が到るや一族友人、相會して余を迎ふ。聞く所によれば兄弟等しく三十萬の財産あり、而して兄は清國人なるがため三千圓の租税を徴收せられ、弟は日本人なるが爲め、一千五百圓に止ると云ふ。斯の如くして支那人の間に生ずる問題は、何故に同一人種にして、一人は痛苦あり、一人は幸福なるかと云ふにあり。而して此問題の解決として彼等は日本に歸化して、日本臣民たるを以て捷徑なりと信ずるもの少からざるに至りしが如し。而して此間往々にして、自から子爵、若くは男爵と號する豪傑の一族類あり、支那人を欺きて日本臣民たらしむべしと稱し、多少の黄金を奪ふを業としたるものありたり。

支那人歸化問題

蘭領印度に居住し、居ながら日本に歸化すと云ふ、甚だ突飛なるか如くして、實は前例なきにあらず。佛國政府は暹羅と境を接して、佛領印度を有し、頻年暹羅の地圖を縮少するに怠らざるのみならず、暹羅の内政に對しても、威力を及はさんとして手段百端施さざる所なし。而して暹羅在留の支那人が、自國政府の保護の力足らず、往々枉曲を蒙むるや、則ち去つて佛國公使館に至りて、佛國に歸化せんことを乞ふもの多し。佛國公使館其請を容れ一定の登錄料を收めて之を佛國臣民として其保護を與ふ。今蘭領印度に於ける支那人が、座ながら日本に歸化して日本人たらんことを望むは、此前例を學ばんと欲するのみ。然ども我政府は之を好まず、眞に臺灣に事業を有するものにあらずんば、歸化を許るさざらんとするものゝ如し。思ふに日本政府は此點に關して和蘭本國の政府に

對して、一種の質言を與たるものにあらざるかと疑はる。夫れ支那人居留民の數已に五十五萬人に達し、而して日本臣民たらんとするの風靡然として起らば、蘭領殖民地に取りては、一個の困難と云はざるべからず。而して此困難の原因は、臺灣人が、帝國臣民として支那本國の人民と異なりたる待遇を受くるにありとなし、和蘭政府は此根本の問題を除かんと欲して、力を用へんと欲するものゝ如し。和蘭政府思らく、英領印度人は英國皇帝の臣民たること、猶ほ臺灣人が日本皇帝の臣民たるが如く、佛領印度人は第三共和國の下にあること、猶ほ臺灣人が日本帝國の人民たるが如し。然ども英國も佛國も其印度領の人民を以て、純然たる本國の自由人民と同一視せず、蘭領印度に來りては、英領印度人も、佛領印度人も、蘭領印度のマレー人と、同一の待遇を受くることを承認す。獨り日本の領土たる臺灣臣民のみ、其本國及び歐州人と同一の待遇を受くべきの理なしと、和蘭政府は此の如くして日本政府をして、臺灣人をマレー土人と同一の法律行政の下に置

交趾支那米田耕作の圖

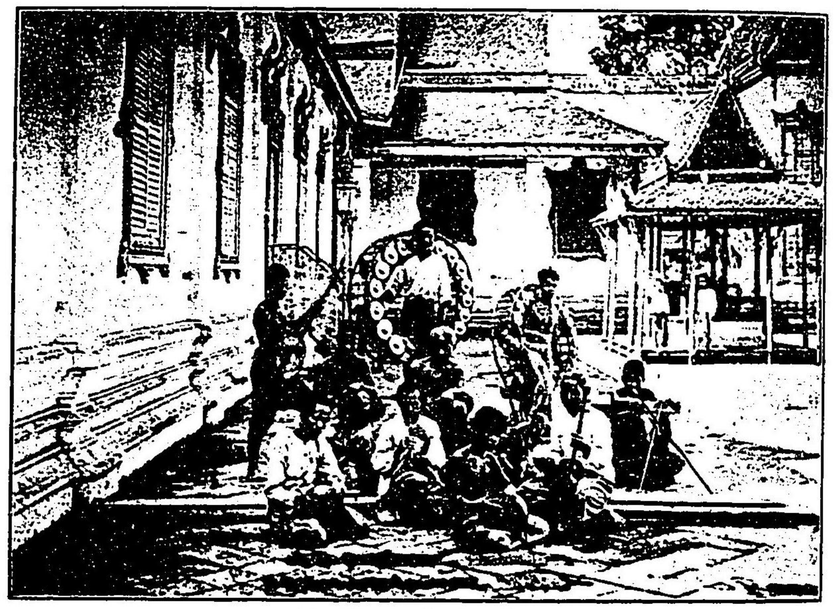
佛領印度支那西方の土人

かしめ、以て五十五萬の支那人が動搖するを豫防せんと欲するが如し。然ども日本政府は臺灣に憲法を行ふの主義を取る。余は其決して和蘭政府の要求を容れざるべきを信ず。和蘭政府は唯だ宜しく日本政府が佛國の還羅に試みたるが如きプロタージ法を行はざるべきを信じて、心を安んすべきのみ、而して支那人には何時までも從來の如く壓抑を施し得べきにあらざるを知りて、其抑制に多少の緩和を與ふること、最も緊急なりと云はざるべからず。

總督の位置　和蘭人は蘭領印度占領の三百年間に多くの痴愚と、賢能とに示したり。痴愚は歴史と共に消へ、賢能は殖民地と共に殘留す。余は和蘭の近世史に於て、英國のクロムウエル、若くは佛國のナポレヲンの如き、燦々の大名あるを聞かず。然るに其和蘭統治の跡を見るに、天才の遺風少からざるは頗る異しむべしとなす。和蘭人が始めて東印度會社を興すや、總督なく、組織なく、策源地なく、散漫荒忽として、殆んど商業的十字軍に類す、已にして其マレー海中に來往して策源地

の必要を見るや、バタヴイヤを取り、其組織の中心として總督を置くに至れり。此時に方りてや政權の中心、總督にあり。總督は國王と內閣とに其機密を語るも、自餘の政治家官吏に對しては、絕對に其事を秘密にし、其報告にも二種の帳簿あり、其眞正の報告は總督獨り之を握り、其表面の報告は之を公衆に示めし、眞正の報告は會社の重役すらも知らざるもの多し。爾後國會議員にして其眞相を公表せんことを求むる者ありしも、久しからずして會社の勢力に服せしが、社會公衆は猶囂々として其眞相を知らんことを求めて已まず。然ども政府は會社を特別保護の下に置き、例へ何人が之を告訴するも、之を受理することなからしめ、併せて公衆が會社の株式に就て投機することを禁令す。勿論會社は此報酬として政府に貢金を納付せしは云ふまでもなし。會社時代の總督の權、此の如くに絕大なりしが故に、千七百九十八年に會社が廢せられて、總督時代となりても、總督の權、依然として大に、千八百十八年、蘭領印度總督府は蘭領印度憲法なるものを私定して、之を公布し、一切の官吏は此憲法を遵守せんことを誓約し、其間本國に於て殖民地憲法なるものを作りたりしも、實際に於て行れず、私定憲法却つて行はる。而して此私定憲法が九年間の經驗によりて欠點するを見るや、千八百二十七年更らに總督府令を以て新憲法を發布したるも欽定裁可を經たるものにあらざりき。爾來千八百七十年の變革あり、交通機關の改善、自由主義言論の勃興の爲め總督の權力に多少の變化あり。蓋千九百五十四年の殖民地憲法によれば、殖民地の豫算は獨立ならず、之を本國政府の豫算中に包含することゝなりしを以て事ごとに議會の容喙を受くるに至りしもの其第一の變化なり。また其豫算が本國政府のために作爲せらるゝがため、本國の官僚等之を機會として、種々の干涉を殖民地に試みんとするに至りしもの第二の變化なり。第三の變化は本國議會は殖民地のために法律を作るの權利を得、而して總督も亦、法律を作り、及び本國議會が制定したる法律を適用するが爲めの法律を作るを得べしと雖も、此二箇の權

力共に千八百五十四年の和蘭殖民地統治法に準據せざる可らずと規定せられたること是なり、然れども近來國會に於て殖民地の事情に通ずるもの少からざるを以て、漸やく寛大となり、異常の大事にあらずんば、國會が殖民地に干渉することは甚だ多からず、余バタヴヤに於て一官吏に語りて、國會の干渉と官僚の干渉と、何れが最も事に妨害あると質問したるに彼れ答て國會の干係は得て之を說破し得べし唯官僚の干渉に至りては其事外に現れず、何等の公論に訴ふる道なく、而して往々私心を挾むものあるが爲め、最も痛苦を感ずと云ふ、然れども此等の中央の干渉を除きては、總督は專制君主にして、人民に對して責任を負はず、何等の民撰議會なく、土會に對して宣戰講和の權を有し、一切の文武の官吏を任免するの權力を有し事情によりては、一切の法律を停止することを得、唯此專制權が、印度評議會と稱する五人の委員の助言によりて行はるゝのみ、而して此評議會員が總督の指名によりて任命せらるゝこと、英國の多くの殖民地に於ける



東堡寨音樂隊

佛領印度支那と清國との境界防禦線の圖

が如ならずして、國王の勅任に成るに至りては、和蘭固有の政治的猜疑心に出てしと、從前總督の權力の絶對的なりし反動に過ぎざるべきか。蓋し殖民地の政治は、最も直裁と敏活と實行とを要す。種々の機關を設けて、經綸を拘束するは、殖民政治に成功する所以にあらず。和蘭殖民地が國王の如き總督を有したる時に於て如何に成功し、中央より干渉するに至りて、如何に其進歩を止めたるかを見れば思半に過きん。

政府と土司との關係は兄弟なり

等しく蘭領殖民地なるも、隨處に其行政を異にするは、此殖民地の特色にして、瓜哇を分つて二十二個の行政區となし、一行政區に一理事官を置くこと、恰かも我府縣知事の如し。此行政區畫は大體瓜哇王國時代の封建的區畫に從ふたるものにして、每區必らず一人若くは三人、王國時代の土酋を以て輔攝官となし、輔攝官をして直接に政治を施さしめ、理事官は唯だ、輔攝官の長兄として勸告を與ふるのみにして、直接に人民を統治せず然れとも

輔攝官は勢威爍々たる和蘭大官の親愛する家弟なりとの名稱を喜び、且つ其配下の人民に威柄を示すの機會あるを喜ぶを以て勤勉事を見て、上命を下達し下情を上達す、故に人民は其國家の亡びて人の掌中に入りしを辨せず、舊土酋が已を治むるを見て、大體に變化なきを信じ、若し租稅其他の痛苦あれば、痛苦は土酋の與ふるものなりと信じ、和蘭人が此痛苦を救はんことを望むに至る、全島輔攝官の總數七十二人にして、此下に村老四百三十四人副村老千三十三人あり、皆なマレー土人にして、補攝官の命を奉して政治を行ふ、而して理事官の下、別に七十八人の副理事あり、副理事の下、別に百六十五人の監督あり、副理事は補攝官の政治を監督し、監督は村老以下の政治を監督す、概して論すれば、蘭人の政治は監督政治にして、直接政治を行はず、政府は補攝官以下の土人をして其局に當らしめて成を彼等に責め、彼等をして、一は之によりて閑を消さしめて不平なからしめ、一は之によつて衣食の道を得せしむ、其俸給を見るに、理事は一年一萬五千フロリン、副理事は七千二百フロリンにして、而して補攝官は一萬二千フロリンを得、村老は二千五百フロリン、副村老は一千フロリンより七百八十フロリンを得、それ土酋に與ふるに一萬二千フロリンの給料を以てするに至りては、此中士族授產の意義あるを解すべし、補攝官已に此高給を得て生活の不平なく、且つ其風俗人情に通ずるを以て、能く土民を治む、和蘭殖民政治の成功したる所以、偶然にあらずと云ふべし、若しそれスマトラに至りては、行政組織概して爪哇に異ならずと雖も、土酋の權力利益は爪哇よりも多く、政府の理事官はマレー以外の外國人を治むと雖も、マレー土人は全然土酋の配下に屬し、土酋は和蘭統治以前に治めたるが如く、土人を治むること、爪哇と異なり、各區の歲入中より第一に取り去らるゝものは土酋の給料にして、第二に取り去らるゝものは和蘭官吏の給料なりとす、而して剩餘あらば之を以て、公共事業、土地の改良、民政の爲めに使用す、此剩餘はシヤク地方に於ては一割五分にしてランカット地方に於ては九割とす、若し

それセレベス、ボルネヲ以下の群島に至りては土酋の權利利益、更らにスマトラよりも多く、和蘭政府は僅かに官吏を派して、他國の侵蝕を防ぐと、租稅を收むるとの二事を勉むるに過ぎず、近世的行政なるものあることなし、然れども是また治めざるを以て、治むるものにして、夷狄統治の法、此の如くならざるべからざるのみ。

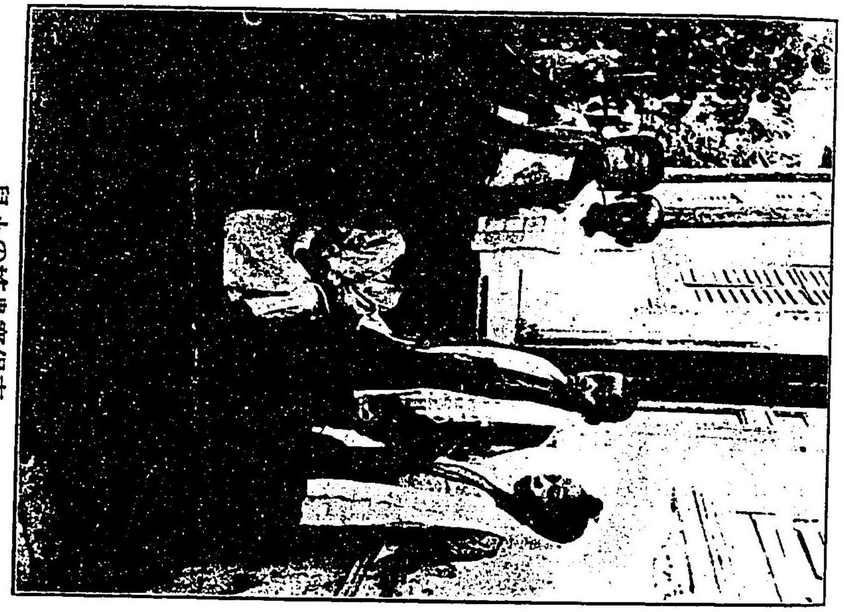
我朝鮮との比較　余は蘭領印度の統治を見て、深く朝鮮の事を慨するの情禁ずべからず、今や朝鮮の我國に於ける、單に瓜哇スマトラの和蘭に於けるが如くには止らず、何となれば蘭領殖民地は國利養成の地にして、之なくとも和蘭存亡の憂あるにあらず、然るに朝鮮の我國に於ける、之を失すれば即ち我國門を失するものにして、其有無は即ち我存亡の問題なりとす、是れ理宜しく苦な百年の大計の前に其私心を捨つべきなり、然るに朝鮮を治むべき官吏は、其政務の上より見て朝鮮人に政治を托すべからずと信じ、悉く日本官吏を以て之に代らしめんと欲して已まず、また民間の志士等は、政府の爲す所緩慢なりとして、期年にして之を同化せんと欲し、同じく朝鮮の官吏を一掃して、日本人を以て之に代らしめずんば已まざらんとす、今日朝鮮問題に關して朝野相爭ふと雖も、其實は性急短慮、日本人を以て一切の政治を行はんとする一點に於ては、朝野同主義にして一人の異論なしと云ふも不可ならず、然れども二三千年の歷史ある國民豈に一朝にして同化し得べきものならんや、之を同化せんとするものあらば、其轉覆や期して待つべし、余はかゝる夢想に近かき空論を戒はす前に先づ朝鮮が眞に平和に治められんことを望まざるとを得ず、之を治むるの道如何と問はゞまた宜しく和蘭人が瓜哇に成功したるが如く、兩班以下の土官土司の力を外にせず、與ふるに巨利を以てして其欲を遂げしめ、授くるに名譽を以てして、其虛榮心を滿たし、彼等をして喜んで我用を爲さしむべきのみ、兩班は如何なる缺點あるも、朝鮮を動かす所以の精神氣力にして、此勢力を外にして、日本自から直接政治を行はん

とするは、殆んど歴史の教訓を蔑にするものなり。若し爪哇の事學ぶに足らずと云はゞ、宜しく明治七八年より十八九年に至る我内政は、士族處分の一事にありしを顧みるべきのみ。

殖民地官吏任用法

和蘭政府が蘭領殖民地に派遣する官吏の撰拔に就きて、心を用ふるの一事も、また外人の注目を要す。凡そ蘭領印度總督府の官吏は、總督其參議官、各局長の外、一切の白人官吏は皆な文官試驗に及第したるものより取り、殊に東洋の法制言語を以て其試驗科目とす。是れ和蘭は其殖民地に對して和蘭語を强ひず、土語を以て官府通用語となすを以てなり。之より先き會社時代にありては吏員の撰拔、放漫にして規律なく、會社の重役の推薦あらば、何人も之を用ふるの風あり。且つ殖民地に於ては善良勇敢なる紳士によつて組織せられたる社會の、官吏を監察するものなきが爲め、紀綱敗頽、會社の衰滅を來たす。殊に其報酬少きは最も腐敗の原因たり。例へば和蘭の海外王とも云ふべく、殖民地全體の生殺與奪の權を握ぎりたる總督が、一ヶ月千七百圓の給料を受け、一年數十萬圓の正金を收入する出納者が、一ヶ月一百十圓を受くるに止るが如き是なり。然るに會社は此等の官吏に養廉銀を與ふることを謀らずして單に會社員を戒めて、金銀珠玉を鏤ばめたるものを用ふる勿れと言ひ、一片の訓令、以て其清廉を維持すべしと信ず。故に會社時代にありては多少の材幹あるものは、多くは不當の利益を漁して一身を富さんことを企て、然らざるものは殖民地に行を欲せず、殖民地に行くものは殆んど孤兒、浪士、投機師のみ。會社衰滅の原因實に此にあり。故に會社の廢せられて總督府時代となるや主として此點を改革するに力を用ひ、善良にして才幹ある官吏を撰拔するに勉め、其報酬もまた本國に比して頗る潤澤なりとす。今文官試驗の科目を案ずるに、第一は地理學、第二は一般立法論、第三は蘭領印度の宗教法、宗教制度、第四はマレー語、第五はジャバ人のマレー語にして以上の試驗を通過したる者は、一定の歳月の後、第二の試驗を受くるを得べし。第

二試驗の科目は、第一歴史、第二地理學人種學、第三宗教法、宗教制度、宗教風俗、第三蘭領印度の制度、第四マレー語、第五ジャヴァ人のマレー語にして、以上の試驗は和蘭本國に於ても、ジャヴァに於ても、何れに於ても受くるを得べしと雖も、實際に於ては全員の三分の二は之を本國に取り、三分の一はジャヴァに取るを定則とす、和蘭は今や歐洲に於ては第二流に墜下したるに係らず、其殖民地が平靜に發達する所以のものは、主として官吏が土情に通じ、土官と協力するが爲に外ならず。余は我朝鮮に於ける施設も少しく之に鑑みて、朝鮮の制度、風俗、習慣、言語に通ずる官吏を養成することに勉めんこと最も緊急なるを信ず。豐大閤が『彼をして我言語を學はしめよ』と云へるもの、英雄一時の權畧のみ、二千萬人の朝鮮人を殺盡するにあらずんば、朝鮮の風俗言語は、依然として存在せん。それ已に言語風俗あり、之に臨むもの其言語風俗に通じて、土情を審にするにあらずんば眞正の政治は、行ふべからざるなり。



東堡寨貴族の小兒

倉士の那支歩哨

輸入品は概して從價分税にして極めて種類少き石炭製藍工業用材木家具類の如き寄生植物の金屬分は極めて微細なる目的のものに限られ、其他の品目は從價分税にして六分五厘を超ゆるものなし、而して輸入品の多くは出港税目に入るものなし、又酒類、煙草、石油等の消費税は輸入品に課せらるるに過ぎず、

瓜哇の關税政策

若し和蘭の政治に忌はしき所ありとせば、其猜疑心に富みて排他的なるにあり、此缺點は其各種の制度に見はるゝに係らず、殖民地の貿易のみは排他的ならず、瓜哇に輸出入するものは、和蘭の物貨も、他國の物貨も、同一税率の下に取扱ふの一事は稱賛すべき政策と云はざるべからず、彼等豈に東印度會社が貿易專有を試みて失敗したる般鑑に顧みて、發明する所ありしが、東印度會社が輸出入の權を專らにするに方りては、瓜哇以下のマレー人は理必らずや和蘭の貨物のみを買ふべかりき、然る當時和蘭の權力猶ほ全島に及ばざるものありしが爲め、英國の物貨はバンタム地方より、和蘭の物貨に比して廉價なること二三割にして輸入せられ、東印度會社の吏員すらも之を使用するに至る、是れ權力と保護のみは、以て貿易を奬勵するに足らざるを證明するに足る、去れば和蘭政府は關税政策を以て、本國の貿易を助くるの愚を繰返さず、其收税は單に税關の事務を敏活周當ならしめんが爲めの財用に供せんとするのみ、本國との貿

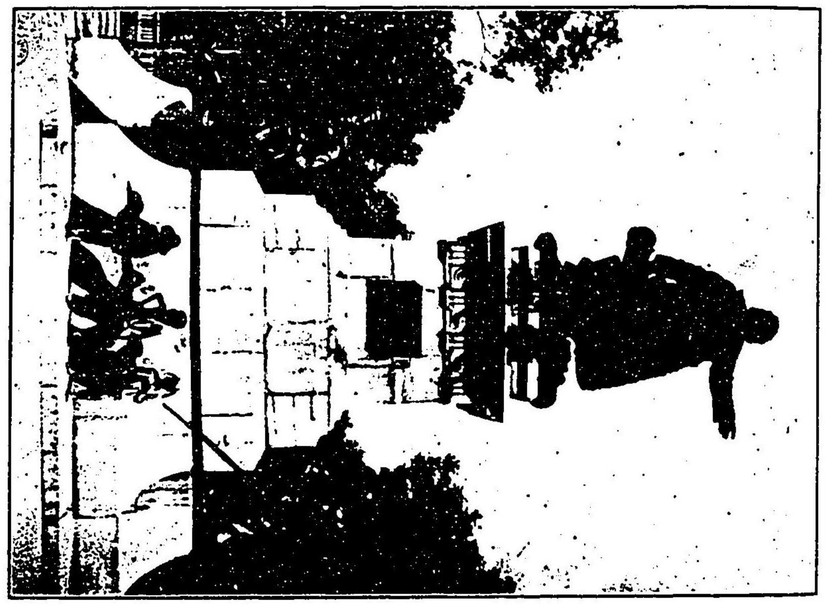
易を助くるは唯だ船舶運輸の便を謀るにありとなし、コーニングルウク、バケットバアルト、マアトシャバイと號する會社を保護して、本國と瓜哇、及び、瓜哇と各群島との間に定期航海を開らくと、別にネーデルランデッシ、ハンデル、マアルトシャバイと號する和蘭貿易會社を起し、利子補給政策によりて之を助くるのみ。此和蘭貿易會社は即ち蘭領殖民地が東印度會社より總督府に移るとき、政府の耕作品を本國に賣らしめんが爲めに起したるものにして、寸毫の政權なき商事會社なりとす。但し輸出入は以上の如く公平なりと雖も、マニラ煙草は一百キロごとに二百フロリンの重稅を課して、殆んど之を禁止せんとするもの丶如し。是れ蓋しスマトラの煙草を保護せんと欲するが爲めなりとす。

輸出入　今蘭領印度の貿易を見るに、千八百九十八年の輸入は一億七千九百八十三万フロリンにして、輸出は二億千七百七十五万圓なりしものが、千九百六年には輸入二億三千四百八十八万圓にして、輸出三億三千九拾二万圓に達し、前後八年の間に輸入は二割を增加し、輸出は五割を增加したるは建全にして有望なる兆候と云はざるべからず。

	輸出總額	政府輸出	私人對出	輸入總額
千八百九十八年	二一七七五四〇八七	一三五六〇一九九	二〇四一九三八九八	一七九八二一四三二
同　九十九年	二五〇九二三二五八	一四九四四三八七	二三五九七八八七一	一九一三三一二七〇
千　九百年	二五九〇三三六〇六	二六九五四三〇四	二三二〇七九三〇二	一九五九二三五二二
同　一	二五五二四一七一四	二〇二一七三二五	二三五〇二四三八九	二二九二二九〇六九
同　二	二六五四七一四八四	一八三四七一〇七	二四七一二四三七七	二〇二九五八〇四〇
同　五	三〇九一〇三四二八	一二六七六一五五	二九六四二七二七三	二一八七八一三七一
同　六	三三〇九二九六四二	一六二五〇二九九	三一四六七九三五二	二三四八八九三九三

和蘭政策の短見　余は蘭領殖民地に於ける和蘭の政策を見て、大體に於て嘆賞せざる能はずと雖も、唯一の欠點は、其眼前の利益に迷ふて、殖民地より歲計剩餘金を吸集せんことのみに苦心して、また遠大の計畫なき事にありとす。殖民地を飽まで絞れとは、千七百年代の殖民政策にして、此政策を繼續したるもの、概して覆滅し、然らざるものは僅かに生命を維持するのみ。今和蘭の瓜哇以下に行ふ所

を見るに、此古風なる殖民政策を、僅少の變形の下に行ふのみ。政府が全島の土地を官有地として、之より生する所の物品を歐洲に賣りて、其得る所より統治費を控除して餘まる所を母國政府に取るは、同一の租稅を土人に課して、之を母國に取ると何の異なる所かある。若し和蘭が疾くに此の如き政策を捨て、殖民地より得たる財用は、只だ陸軍費の如きものに對して母國に獻金せしむるの外、悉く之を殖民地改良の費用に投せしめしならば、其物產の製出、工業の勃興、購買力の增加より、本國との貿易を奬勵するもの一々擧ぐるに堪へざるものありしならん。然れば東印度在留の和蘭人が、近來本國政府の政策を非難して、殖民地より得たるものは、之を殖民地に投せよと論するもの多きは自然の勢と云ふべし。然れども願れば和蘭も已に老たり、暮景頽年、また遠大の計を案ずる能はざるものか。果して然らば、空しくマレー海中にある天惠の寶庫を開く能はずして終らん。是れ實に惜むべきなり。



後のタベムガ府貢西

妓歌るけ於に那支度印領佛

マレー海の天宮

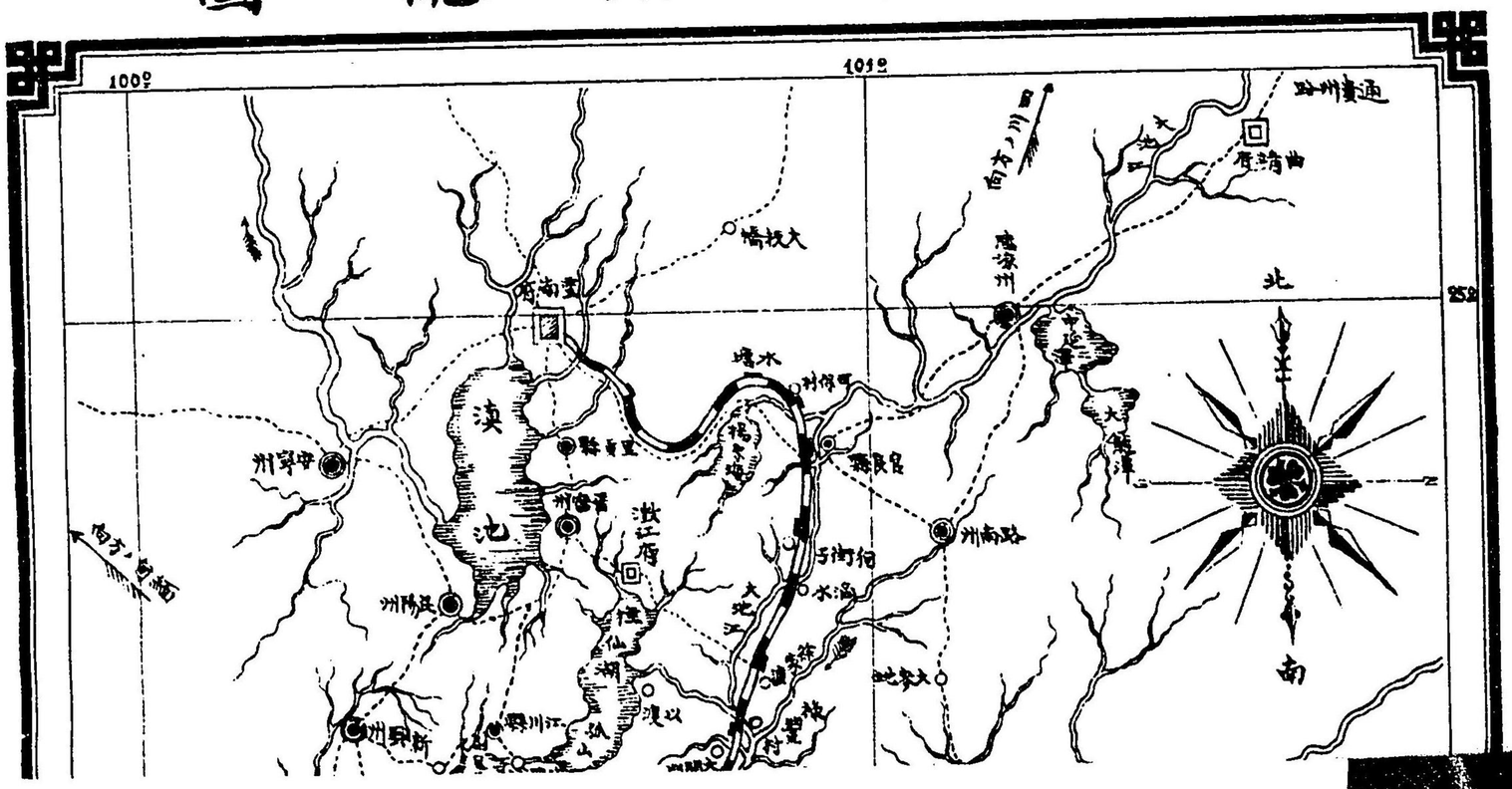
余は蘭領印度に於ける多くの島嶼を數たり。然とも其能く開拓せられたるは爪哇本島のみ、スマトラは猶ほ未開の地多く、マツウラは官鹽を供給するのみ。バンカは錫山が支那人によりて開かるゝのみ。其他の島嶼に至りては、草木、榛々、禽獸梧々、和蘭人は僅かに官吏となりて其租税を取るのみ。此等の山水によりて封せられたる富庫は未た開かれざるなり。セレベス島の一土酋酋て爪哇の稻垣氏に黑檀の一大樹を無代價にて贈與せんことを提供す。但し之を伐裁して船に積むまでの事業は、該土酋の受負たらしむべしとの條件を以てす。稻垣氏乃ち人を遣して之を見せしむるに、其周圍は三十二人の手を繫ぎて、漸やく圍繞すべく、高さ半空に聳へて目測すべからず。其巨大雄偉なる開く所に勝る。然とも之を伐裁して船に積まんとせは、先づ黑檀を斬りて轉墜下降して海に至らしむるの道路を作らんが爲め、悉く途上の樹木を伐除せざるべからず、而して黑檀は海中に投すれば石の如くに沈下するの恐あるを以て、之を浮ばしめんに

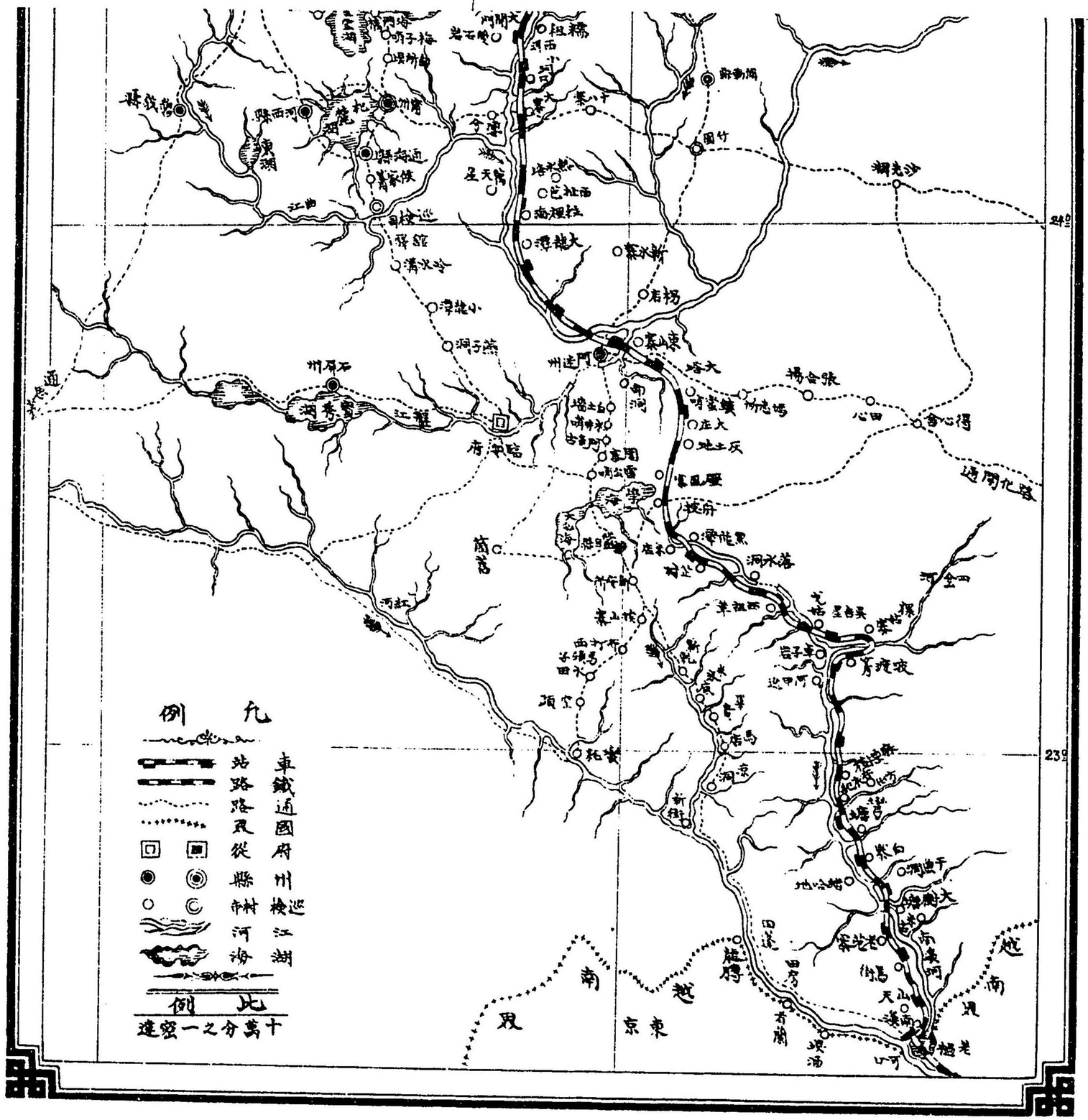
はランプの樹を代りて筏を作らざるべからず。而して筏已に成り、黒檀、已に浮びて、之を船上に引上るに幾何の力ある起重機を要するかと問ふに、七八千噸の巨船に備られたるものにあらずんば之を揭ぐるの力なし。然ども七八千噸の商船を此地方に運ぶの便なきを以て、到底此無代價の巨樹を引受くるの方法なかりしと云ふ。然ども是れ豈に孤立の黒檀ならんや。黒檀の此地方に於ける、松柏の我國にあるが如く、則すら黒粒にて製作せらるゝを見ては驚くに堪へりと云ふべし。右は自然が如何に寶貨をマレー海に封じ、蘭人が如何に之を開く能はざるかを示さんとする一例のみ。マレー海島にブリヤン樹あり、樹質硬堅にして鋼鐵の如し。歐洲人之を呼んで鐵木となす。此木は從來土人が輕柔、桐の如きランブウ樹と相磨して火を發し、其火をランブウに受くるの用に供するに過ぎざりしが、近年之を伐りて鐵道の枕木とするに至るに、火に燒けず、水に腐れず、廣東、シンガポール地方に於ては、日本の枕木を驅逐して之に代りつゝあり。グッタペルチャの木は數千年の前より榕樹の如く其液汁を樹下の土中に沒下し、今人は唯た其土を堀れば、即ちグッタルチャのゴムを得べし。歐洲人が苦心して發明したるカンフォルチンキの藥液は、マレー土人が已に數千年前より野生の樹液より之を取りて醫藥に供してミテヤボテと號したるものなり。其他セレベスにはダイヤモンドありミナドには眞珠あり。アンボンにはセーゴ樹あり。一本の生する所、一家三ヶ月を支ふるに足る。以上は貿易表に現れざれ一二の事物に就き、如何に天物の暴殄せられつゝあるかを示すを過きず。一言にして云へば、山に金玉あり、海に珠璃ありと云ふもの、實にマレー海島の光景なり若し科學と資本の力を以て之れを開くものあらば、即ち世界最大富庫の鍵を握るものなり。余は蘭領印度を後に見て北歸せんとする時、感慨無限、殆んと徊徘躊躇するに忍びざるものありたりき。

以上印刷に附せられたる後、瓜哇千九百十年の歳計を得たり其示す所によれば歳出二億一千八百三十三万五千〇六十二グルデンにして中、本國勘定四千七百十五万六千百七十四グルデン、印度勘定一億七千一百十七万八千八百八十八グルデンなりとす。また歳入は本國勘定二千一百九十六万五千〇四十六グルデン、印度勘定一億七千二百三十五万三千二百八十四グルデンにして、差引不足額二千四百一万六千七百三十二グルデンなりとす。

また近時土地國有法を實行するが爲め往々外國人と紛議を生ず、即ちチャセムランヂンのバマヌウカン領に於て英人が大地積の土地を有するを見て政府そを買上げんとして現に爭論中なるが如き是なり

滇越鐵路總圖


100°
101°
北
南
滇
池
昆明縣
呈貢縣
晉寧州
澂江府
撫仙湖
嶍峨縣
玉溪縣
易門縣
水塘
大沽
通海縣
河西縣
蒙自縣
開化府
廣南縣
廣南州
廣西州
廣通縣
曲靖府
雲南縣
大橋
塘水
村保甲
楊子橋
大關廳
昭通州
向方ノ川圖
向方ノ自流


例凡
車站
鐵路
通路
國道
府從
州縣
巡檢村市
江河
湖海
比例
十萬分之一密達
東京
越南
雲貴
廣西
廣東
通國九路
通雲貴
24°
23°

第六　佛領印度支那

佛國郵船ラセーヌ

余已に蘭領東印度諸島を見て積年の志望を達す。然れども大陸に於けるマレー人の生活を見て、之を蘭領諸島に比するも、また無益の業にあらざるべしと信じ、印度支那のデルタを訪はんと欲し、佛國郵船ラセーヌ號に頼りて新嘉坡（シンガポール）に歸る。ラセーヌは甲板のチーク樹最早や木理なきまでに磨擦せられ、周圍の鐵板より低きこと三四分に達す。一見して老船たるを知るへし。然かも佛國メサジリー、マリチーム會社に屬して、佛國政府の保護金を受く。余、船長に船齢を問ふに、船長笑て、最早四十歳の老女なりと云ふ。然れども流石に佛人の船なれば食卓の上には美味を上ぼすことを怠らず。料理長また慧敏にて細心、能く客の心を攫る。余は彼を愛するを禁する能はず。船中ジャヴア、スマトラに出稼する勞働者及び音樂師の一隊あり。佛國船員は英人の如く土人に對して傲岸なら

す、樂隊と相戯れ舞妓伶人また嬉笑して歌舞するが爲め船中の無聊も爲めに少しく慰めらる。此より新嘉坡（シンガポール）にてアウストラリヤンヌ號に乘替へて西貢（サイゴン）に向ふ。

余アウストラリヤンヌの船員に告ぐるにラセーヌ號老廢の事を以てす。船員曰く、四十歳の老女とは虚言のみ、多分五十歳ならん。足下再び彼船に乘ることあるも、決して甲板上に舞踏する勿れ。是れ甲板破れて下に沈下するの恐あればなりと大笑す。余は此の如き老船に保護金を與ふる佛國政府の無頓着に驚かざるを得ず。已にして余が東京（トンキン）に歸着したる後、佛領印度支那の友人よりラセーヌ號が英船に衝突してマレー海にて沈没したるを報し來るを見て、今昔の感に堪へず。知らず余が愛したる料理長は無事なるを得たりや。船員の愛撫する所となりし犬の運命や如何。憶ふ四年前余の米國に赴くや、米船ダコタ號に乘る。已にして歐洲を經過して歸るや、久しからずしてダコタは房州沖に於て暗礁に觸れて碎破す。余と破船と宿世如何なる因緣にや。

西貢河を遡る

アウストラリヤンヌはマルセーユ港と西貢（サイゴン）、日本を連絡する客船の一にして、噸數は八千に近く、年齢已に二十に達し、日英獨の新船に對しては稍舊式なりと雖も、二十年前已に此巨船と、設備を有したることを思へば、佛人の氣力才幹また侮るべからずと云ふべし。船客は佛國より印度支那に向ふ官吏、十の八九を占め他に二三の英人、二三の商人、一二の支那人と、余とあるのみ。船客中の陸軍中佐は恰かも元帥の如くにして、少佐は大中將の如く威風邊りを拂ふ。佛國商人曰く是れ余が國の病根なり。凡そ佛領印度支那の文武官、毎二年滯在の後には一個年の休暇を得て本國に居住するを得べし。而して鑢かて期滿ればまた此の如くして殖民地に來る。故に佛國船は其乘客の十中七八は官吏のみ。是れ他の船客の同乘するを好まざる所以なりと。果して然るや否や。余は唯た其說を敬聽するのみ。新嘉坡（シンガポール）より西貢（サイゴン）までは八百海里に近し。余等の船は三日目の午後一時、西貢河口に近つく。河口の右岸丘陵あり、名けてサン、ジャックと云ふ。丘陵の尖

崎は岩石にして、之あるがため、僅かに此邊の風光の單調を破る。岩石の上に一大館閣あり。曾て佛領印度支那の總督として大名を遺したるポール、ドウメーが其離宮とせんとして建築したるものにて、其名を紀念せんが爲めに、ドウメー館と名く。左方を望むにデルタの上に長草短樹の雜生するを見るのみにして、遠く望むに際涯なく、滿目荒凉、些の趣味あるなし。此間、虎、往々形を現はすことありと云ふ。余等の船は此沼澤の間を流るゝ河を遡ること四十マイルにして漸く西貢府に着し、船は直に河岸の壁端に繫がる。即ち余等は今や安南の舊帝國内に入りしものにして、三色旗が岸上處々、風に飜るを見る。已にして余はヲテル、コンチネンタルより遣はしたる馬車に乘りてホテルに投じ、一切の行李はホテルより遣はしたる小艇に托したれども、些の面倒も、間違もなくして受取られたり。

西貢市の光景　西貢（サイゴン）は久しき間東洋の巴理と稱せらる。其プールヴアールの大なる、家屋の構造の美術的なる、國家の保護によりて存在する演劇場ある、其店舗の飾付など、如何にも巴理を模したりと思はるゝもの少からず。且つ其アプニウには、タマリンドの樹を植ゆるなど、風趣極めて饒なり。然れども最も人をして巴理を聯想せしむるものは、恐らくはカフエーにあらん。通街大道に對する料理店の軒先にカフエーを設け、衆客此に群居し行人を望見しながら飲食談笑するは英國には之なく、歐洲大陸に多き所にして、佛人が此の制度を西貢に移すや、自然に、本國よりも一層盛んに發達す。何となれば西貢の炎熱は人の知る所にして、炎威が獨り白晝に於て盛なるものみならず、夜陰に於ても猶ほ衰へざるを以て、都人は唯だ此カフエーに出入して、其無聊を消すの一事あるのみ。去れば西貢府に於けるカフエーの盛なる、巴理のそれよりも盛にして、八九時以後の社會は唯だ此カフエーの生きたるあるのみ。ヲテル、コンチネンタルの如きも、一半はホテルにして一半はカフエーなり。客は日中はホテルにて食事すれども、夜は則ちカフエーに入りて食事す。是れ暑熱は唯だ此の如くして避くるを得ればなり。ホテルの

交趾は其土人夫妻足を交へて寢ねるなら以て名くるなりとの臆說あり

客室の後方には一坪半ほどの小室あり、甃石を以て敷きつめ、水道の栓を拔きて水浴するの便あり。余は白晝水浴を試むること二回、夜は十二時より曉に達するまでの間に之を試むること三回、猶ほ汗の湧くが如くなるを覺へたることありき。以て西貢の炎熱の、如何に甚だしきかを想像すべし。然れども下水の掃除の行届くが爲め、蚊は割合に多からず。余は七時より十二時まで、室内にて唯一蚊子の來襲せるを見たるのみ。

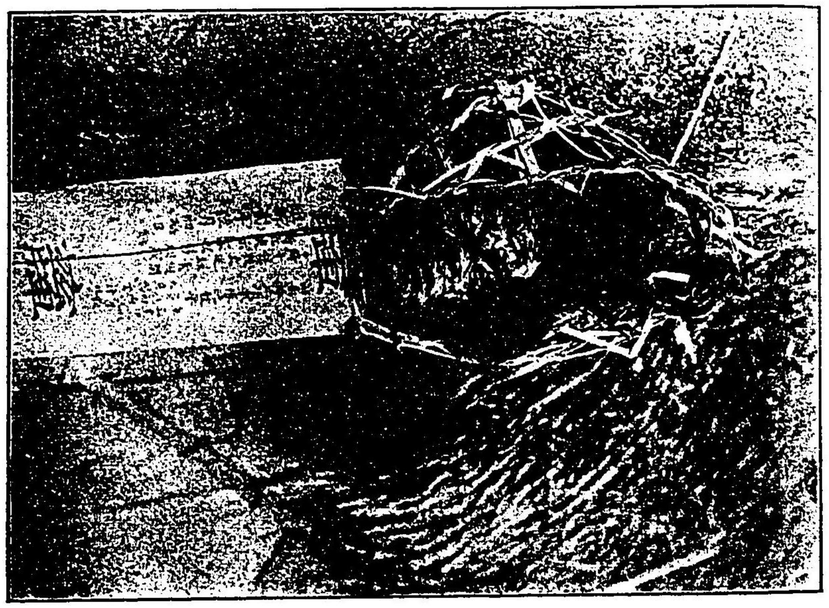
總督に會ふ

西貢は交趾支那殖民地の首府にして、千八百五十九年佛國が此地を占領したる當時にありては、人口僅かに五千人に過ぎざりしが、今は四萬五千人に達す。此中、佛人は三千三百人のみ。其地は安南人二萬五千四百人、支那人一萬四千人より成ると云ふに至りては、此殖民地は依然として支那人の土地たるを知るべきのみ。佛人は此の如くに少しと雖も、流石に其趣味天才は凡て市區經營の上に現はれ、道路は巴理の如くに作られて、恰たも玉突臺の如く、平坦にして且つ整正を極む。ブウルバアルを歩して市の中央に至れば、ガムベッタの石像あり、議會に臨みて、『諸君東京を見よ』と發聲せる態を示す。是より進んで總督の宮殿に至れば、其壯麗なること更らに巴理の建築の或るものに劣らざるを見る。蓋し佛領印度支那の總督は多く海内府にあるを常とすと雖も、時々、其發祥殖民地たる西貢に來りて、士民と相會するの必要あるを以て、此宮殿を設く。余が西貢に入るや當時總督、アクロブコウスキー氏、適、海内より來りて西貢にあり。余乃ち氏を其宮殿に訪問して來意を告げしに氏、深く之れを悅び、懇懃に余を待ち、且つ余の爲め電信を發して處々の政廳に、余の爲に便宜を與へんことを命ず。之より余至る所、頗る歡待せられ、顯官自から停車場に出て、余を迎ふる者あり。余が佛領旅行中快樂の一半は、同地官憲の賜なり。余は茲に之を書して感謝せざるべからず。

西貢に於ける佛人

ヲテル、コンチネンタルの左傍に劇場トラヴナタあり、其建築費二百万フランにして西貢政廳之れを作り、政廳自から之を維持すること猶

ほ巴理のラヤートルフランセーの如し。佛人はかゝる天涯にありて猶ほ演劇なしに生活すると能はざるは、猶ほ日本人が地角を極めても澤庵なしに生活すると能はざるが如し、然れどもかゝる僻遠の殖民地にある演劇なりとて輕侮すべきにはあらず。此演劇場にての成功は、やがて巴理に於ても成功すべき推薦狀となるものゝ如し。佛人は西貢に於てかゝる贅澤なるものを有するのみならず、別に植物園と公園とを有し、其の規模の壯大なる、流石に佛人の氣魄を示すに足る。然れども氣魄ある佛人も、自然力の威壓には堪へざるものゝ如く、男女青白にして、衰弱其面貌に現はるゝもの多し。蓋し室内九十六七度、室外百三十二三度と云ふ熱度は、日本にありても、一年に一度は之なきにあらず。而して此炎熱の後は、人身の疲勞甚だしきは我等の經驗する處なり。然るに西貢に於ては此の如き熱日は決して一日にあらず。而して炎威は往々にして夜に至りても衰へざることあればなり。



國の首魁匪土京東

國の冠衣官文京東

佛領に於ける支那人

佛人が西貢の炎熱に苦しむに方りて支那人は平然として生活し、繁殖し、其利權を佛國旗の下に於て樹立しつゝあり、世人交趾支那と云べば直ちに西貢を數ふるも、西貢よりも人口饒多の都會其附近にあり即ち提岸是なり。提岸は西貢より西北四マイルの地にありて、人口十六万を數へ、今は西貢と同市を作る。而して此中支那人の數四万二千人を數ふるに至りてはまた盛なりと云はざるべからず。此地方の產物は米を大宗とし、而して提岸は運河により土產を集散する中心市場にして、運河の兩岸、大小の精米所林立す。其事業の大半が支那人の掌中にあるは言ふまでもなし。余は提岸の市中を步行し、八万五千以上の安南土人が、大半支那人に壓伏せられ、利權を吸收せらるゝを見て、悲慘の情を催すを禁すべからざるものあり。然れども兩人種の容貌、體格の遙かに相異なるを見ては、また如何ともすべからざるものあるを認むるの外なし。余は唯だ支那人身心の雄偉を嘆美するのみ。支那人は唯だ此地に於て優者なるのみなら

す、佛領印度支那全體に散在し、南は安南より、北は東京に至るまで、マレー人の國に於ける經濟上の權力は、支那人之れを掌把し、佛人は其上に立ちて政權を攫るのみ、余は其の土人を見るに瓜哇其の他のマレー人の如く、唇頭朱の如く赤くして、齒は木蓮子の如くに黑く、一見しては其檳榔子を嚙むものなるを知るを得べし、然るに其人民の衣服を見るに、明代支那の衣服にして恰かも朝鮮服に似たるものあり、其土會の佛人化せざるものゝ衣服を見れば、益す明代の儒服に近きを覺ゆ、其寺院の荒草中に埋沒したるものを見るに、純然たる印度風にして、王宮等の廢跡を見るに支那李唐時代の風を存するを見れば、此地に於ても瓜哇の如く、印度と支那の文明は相湊合したるものなるを見るべく、其國を交趾と號し、或は安南と號し、更らに大越と號し、支那流の年號を立てしを見れば、宗教は印度に則り、政治は支那に則りしと云ふを以て適當なりとすへきか、清初、交趾の使、支那に至り西湖に遊ひて咄嗟筆を取りて一樹楊柳幾度花、華飲西湖賣酒家、我國繁華不如此、春來滿地是桑麻と咏じたりと云ふを見れば清初已に支那の學問が土人の間に普及したるを見るべし、其年號を立てしは紀元九百七十年、丁氏が大瞿越の朝を建て太平元年と稱したるに初まるを見れば、北宋の學問が交趾の朝廷に敬重せられしを想像するに難からず、夫れ支那人の此國に於ける一日行旅の關係にあらさる此の如し、然れば佛人の此國を治むる理宜しく、支那人を寛容し、勢ひ宜しく支那人と協同すべし、然るに事實を見れば支那人の此國内に於ける壓迫抑制せらるゝこと、瓜哇に於けるが如し、余は此間に於て英佛兩國殖民政策の異同を感せざる能はず、

虐遇せらるゝ支那人

人若し交趾支那に於ける都邑を歩行せんには、市街に於ける大商店の主人、田野に於ける大農夫等は、主として支那人なるを發見し交趾國と云はずして、交趾支那と云ふの適切なるを感するならん、假りに此等の支那人を國外に放逐し得たりとせんか、殘る處は懶怠にして無智なるマレー人のみ、

工業之れが爲めに衰へ、農業之れか爲めに退くへし。然るに佛國政府は此勤勉にして善良なる支那人を招徠するを勉めず、壓抑百端試みざるはなし。例へば支那人は老若男女を問はず毎年、毎人十四圓五十錢の人頭税を徴せらる。夫れ人頭税を納むること已に容易にあらず、其金額が毎一人十四圓五十錢に達するに至りては客旅の支那人としては一大負擔と云はさるを得ず。然るに佛國政府の支那人を苦しむる此に止らず、更に支那人使雇税なるものを設け、傭主は少きは毎年七十圓より、多きは二百四十圓を徴せらる。故に事業家は成るべく支那人を使雇せざらんことを欲するに至る。此外支那人は國内を轉移するに方りても、旅行免狀を要すと云ふに至りては、佛人の支那人に對する用意嚴肅を極めたりと云はさるべからず。然らば則ち佛人は支那人を驅逐して、其利權を吸集し得るかと云へば然らず、彈力に富みたる支那人は、山岳壓し來るが如き此壓抑の下に於て、汲々孜々、産業を勉め、利權を吸ふ、何となれば歐州人は其體質に於て、到底熱帶地に於ては支那人の敵にあらざればなり。夫れ此の如くして支那人驅逐の目的は遂げず、而して餘る所のものは支那人をして佛國の壓抑を憤らしむるのみ。余は政治の天才ある佛人が、何故に此一事を曉らざるかを怪しむ。

佛領の人口土地

所謂佛領印度支那は右の交趾支那、殖民の外に、安南保護國、東京（トンキン）及びラテス保護國、柬埔寨（カンボージヤ）保護國あり。以上の殖民地、四保護國は合して、佛領印度支那と號し、一の總督府の下に之を統率す。總督府は東京（トンキン）保護國の首府海内（ハイ）にありて、別に支那より租借したる廣州灣を有す。全領の面積二十五万六千方里と稱せらるゝも、果して然るや否、容易に信を措きがたし。然る所以のものは、隣國暹羅との境界甚た不明にして、常に紛爭絶ざればなり。從つて其の人口の千八百二十三万人と云ふも、また容易に信じかたし。是れ以上の理由の外、戸籍なき地方多ければなり。其の人種は大別してマレー人、支那人なりと雖も、之れを小別すれば安南人、柬埔寨人、シャン人、マレー人、支那人とす。而してシャン人は支那人に屬し、

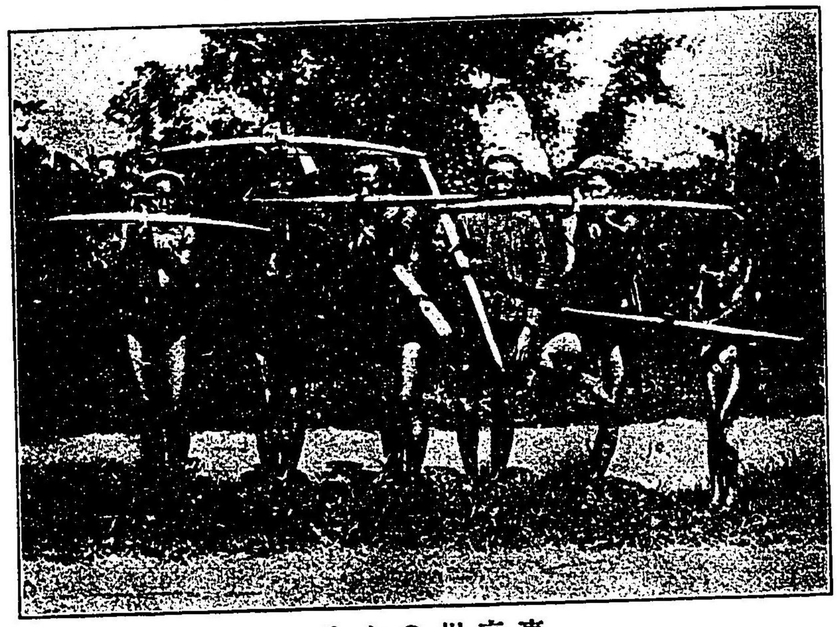
安南、東堡塞人はマレー種に屬す。交趾支那の人種は、多く安南人と支那人にして其河海によりて外界と交通すること久しきを以て、佛領印度支那中智見最も開けたるものなりとせらる。此地概して雲南より來る大河の將ち來りし沃土より成りたる沖積州なるを以て、地味肥沃、加ふるに氣熱、炎熱にして万物を鬱生するがため物のあらざるなし。日本人が南京米と稱する米も、緬甸及び此地方より出るものとす。其耕作法を見るに、農夫は唯だ稻種を水田に放下するのみにして、肥料を與ふることなし。然に陽光と大地とは農夫に代りて之れを育成す。此の如きもの數年にして、地味沾渇の恐れある頃は、洪水汎濫、河底の沃土を平地に散布して肥料に代ふ。此の如く大地已に沖積土より成るを以て、全國概して平坦にして、山岳少なく、メー山は該殖民地に於ける最高山岳として知らるゝに係はらず、六百メートルあるに過きず。三百間の山は日本に於ては一の丘陵に過ぎず。また以て該殖民地の低平なるを想像するに足らん。故に至る所平野にして望盡きず。小河大溝、其間を縱横して灌漑すべからざるの地なし。從來、安南政府の惡政の下に於てすら田野、遠く開けたるに加へて、近年、佛國殖民地となりて以來、生命財產の安全の保證せらるゝに至りしより、田野益々開け、山林藪澤を夷平開拓して米田とするもの愈よ多く、殖民地の面積五百一万千二百七十七ヘクテール中、百五十万ヘクテールは開拓せられたりと信せらる。而して此中の水田は百三十五万八千ヘクテールあり。產物は米を主として砂糖、ゴム、胡椒、ベテルナット、サフラン、藍、シンコナ、煙草、綿、メーズ、コプラ等なり。故に交趾支那の財政は割合に良好にして佛領印度支那總督府が他の保護國濠平のため、無用の資財を費やすを嫌ふて、往々にして總督府の治下を脫し、別個の獨立殖民地たらんことを欲するもの少からず。

四郊壘多し

サイゴンに佛人サリエージ氏あり、佛領印度に於て種々の事業に關係を有するヲグリヤストロ商店の重役にして慧敏、仁愛、善く日本人を待つ、氏

年來日本名譽領事として日佛兩國の利益を增進せんと欲して頗る勉むる所あり。夫人は英國に生し其才色雙秀、西貢社會の名花たり。余は一日サリエージ氏の自働車を動かして郊外に到るに、車道縱橫、坦々として砥の如く、夕陽西山に落ちんとする頃、佛人が車馬を驅りて四郊に遊ぶもの雲霧の如く、嬉々として、熱帶地にあるを忘れ、老の將さに至らんとするを知らざるが如く、此南荒に來りて猶ほポアド、ブーロンニュに遊ぶが如き心地を有するは流石に佛人の面目と云ふべし。余は行き行きて植物園の西方に行きたる時、土壘の隆起するを見て、同行の日本人に同ふて其砲臺なるを知り、併せて、其日露戰爭に際して急造せられたるものなるを知る。余は安南土人が果して當時、如何に動搖せしかを知らず。然ども土壘が累々として四郊に起つを見ては、此地方に於ける佛國官憲の當時の心理狀態を說明するに足るを信ず。

東堡寨王國　交趾支那の西北に東塞寨（カンボーヂヤ）保護國あり。西は暹羅に接し南は海によ



東京州の土兵

東京に於て土兵郵便物を護送するの圖

りて限られ、北はラヲスに續く。メーコンの大江、國中を縱貫し、霖雨至れば汎濫四出、浩瀚茫洋、際涯する所なし、而して其去りたる後は、沃土を留むること、恰かも埃及のナイル河の如し故に土人メーコンを呼んで尊ときメーコンと云ふ。此れを以て土地豐穰、万物產せざるなし、其山林有要の樹木八十有餘種ありと云ふを聞きては其天富を想像するに難からざるべし。然れども人民懶怠にして氣力なく、此富源を開發するを知らず。ある所の商業も、一に支那人に占有せられて、省みる所なし。首府をプノンペンと云ふ。國王此にあつて佛國保護の下に王政を布く。土人文武の官僚は國王の任免する所なりと雖も、佛國は此地に高等理事官を置き其財政、司法、稅關、收稅、土木等の政治は佛國官吏之を行ふを以て、事實に於ては佛人の政治あるのみ。道路は歐洲風に修築せられ、裁判所、郵便局、病院、登記局、警視廳、土木局、商業博物館、印度支那銀行等、歐洲風の建築、甍を並べて、恰かも西貢を縮少したるものゝ如し。此廢殘朝廷の舊都に電氣燈を見るは佛人の賜と云ふべきの

み。處々の殘模、廢閣より見れば佛領印度支那中、東堡寨の文化は曾て頗る高度に發達したるを想像し得べし。前年、東堡寨王、其官伎を率へて巴理に來遊し頻りに新聞三面に記事を供給せる頃、余、王と半面の知あれども、余は徒らに佛人の誤解を招かんことを恐れて、之れを訪問せざりき。

西貢より東京

印度支那北方の港灣に海防港（ハイフチン）あり、東京（トンキン）保護國の海口にして、西貢と海防との交通は曾て鐵道によらしめんとして計畫せられたれども、鐵道未た成らずして、資金已に盡き、今は處々斷續の鐵道あるのみにして縱貫鐵道なく、此間の交通は唯た海船によるのみ。而して海船には佛國郵船會社と、地方の郵船會社との二線あり、共に等しく政府の保護を受く。然れども西貢海防間に於ては寧ろ地方郵船に對する同情深きものゝ如く、余が最近海防行の汽船の時日を質したるに官憲もホテルも皆な答ふるに地方郵船の時日を以てし、また佛國郵船の時日を以て答ふるものなし。然れども余は新聞紙の廣告によりて佛國郵船の出發、數日早きを知り、該會社の汽船カシャ號に搭乘す。カシャ號は朝の五時に開帆すべしとのことなれば、余は前夜に乘込むの寧ろ便宜なるべきを思ふて、夜十二時、船室に入りて一夜を此に明したれども、世評に言ふが如き蚊害もなく、最も安靜に睡眠するを得たりき。蓋し西貢（サイゴン）河の蚊害の如きは十數年前、此地方の未た開かざりし時代の昔話ならんのみ。余等の船は西貢河を下りて再びサンジャツクの尖頭を經過し、左に折れて北に向ふ。是より蒼海渺茫、唯だ海波の音と、龍骨の響きを聞くのみ。此夜十二時頃まで余等甲板にあり、船員左方の雲山を示めし、カムラン灣は其下にありと言ふ。是れ即ち日露戰爭に際してバルチック艦隊が二十四時間法を利用して、石炭の供給を得たる土地なりとす。翌朝六時、船、ナアトラン灣に入り、佛國政府、軍隊の需給品と數人の土人旅客を上陸せしむ。ナアトランは港灣大ならざるも、三方繞らすに岩山を以てし、海水深湛、極めて要害の地とす。此間余はジャヴアに於て見たるが如く、籠の船を見、濕齒、朱唇の男女を見ては

意々マレー人と日本人との間の、歴史以前の關係を想像するを禁ずる能はず。余試みに籠船に乘りて上陸するに、極めて輕快にして、而して左右舷側の水底を見るに、長さ四五尺の魚ありて優遊浮沈す。其鼻頭尖鋭、形體狹長、恰かも我細魚に似たり。余其名を逸したれども、此邊極めて魚族に富み、輸出物の重もなるものは乾魚、鹽魚なりと云はる。余等の船は港内に止ること八時間にして、再び開帆、翌日午後五時トアラン港に入る。是れ蕃南安帝國の首都ユエー府の海口にして、海口より首府まで六十八マイルは鐵道によりて聯絡す。此灣遠淺にして船よりトアラン市街に行かんとするには小蒸氣によらざるべからず。余は本船の事務長と共に上陸しトアランホテルに入りて晩餐し、夜十時本船に歸れば、出發の汽笛已に鳴りつゝあり、倉皇船に上る。昔し王朝時代の阿部仲麿が唐より日本に歸らんとして、海風に流されて漂着したりと云ふは此地方にして、頭上天邊の月は曾て是れ彼が『三笠の山に出でし月かも』と無限の感慨を寄せたる月なりと思へば、尋常一樣の月光も、また深く詩興あるを覺ゆ。余等の船は此の如くして安南と海南島間の東京灣を走ること二十七時にして、有名なる海賊島などを右方に見つゝ、午前四時と云ふに海防港に達す。海防港と云ふも、其實は猶ほ未だ紅河の下流にして汚泥、大船を遣るべからざるを以て、潮待すること九時間、洋上微風すらも吹き來らず。炎陽人に誇らんばかりに、頭上より照射し來るを以て、船客皆な日射病を恐れしが、十二時頃、漸やく錨を拔き、蜿蜒屈曲したる紅河を遡ること四時間にして、午后三時始め眞の海防港に入る。西貢より此に至るまで、八百五十海里にして、九十六時間を費すに至りてまた遲緩と云はざるべからず。

海防港に入る

海防は固と沼澤より成りし一寒邑にして、土地卑濕、極めて瘴癘毒多く、而して河外には海賊島の名を帶ぶる島嶼あるほどにして、河流屈曲、海角出入多く、海賊の生活に便なるが爲め、殆んど匪徒賊盜の巢窟なりしが、千八百八十四年佛人此地を占領して以來、鋭意河口を改修し市街を築造し、盜賊を夷滅

せるが爲め今は安靖愉快なる港市となる。余等の搭乘したるカシャは四千噸の船なれども、直ちに棧橋に接着するを得、猶ほ之れよりも巨大なる船舶の河上に止るを見たり。余が宿するヲテル、ジュ、コンメルスは此地第一壯麗のホテルにして、最も凉しかるべしと思ふ一室を取り得たれども、猶ほ炎熱甚しく、半夜全身に汗するを見たり。全市の人口二萬人、此中安南人一萬二千人餘にして支那人は依然として多く、六千人あり。而して佛人は僅かに九百人のみ。此地に於ては日本雜貨店二軒あり。市街の建築、生活、皆な佛國風にして純然たる佛人の都會なりとす。かゝる小都會にありても、水道は清水を供給し、電燈は街上を照らし、日暮に至れば馬車を驅つて郊外に至ること、猶ほ歐洲の都會に於けるが如く、馬は日本馬より小なれども體格整正にして駿足のもの少なからず。此地一方には印度支那より支那省内省に入る鐵道の發起點にして、一方には日本、支那と東京州との貿易の要關なるを以て、其將來の發達は計るべからざるものあり。已に沼澤海賊の巢窟を變じて、一大都會となしたる佛人は、必らずや其前途にある大事業に應ずるの幹能あるや疑ふべきにあらず。若し佛人にして眞に其幹能を發揮するの日は、上海、シンガポール、香港と相拮抗すること決して難きにあらざるべし。

極端なる保護主義

然れども佛人にして眞に海防を變して、一大海港たらしめんと欲せば、先づ爲すべき幾多の事業あり。余は佛人が先づ其海關稅に就きて一考せんことを希はざるを得ず。佛國に於ては近時、佛國傳來の殖民政策たる同化畫一政策を非として、英國流の土情適應主義を賞揚する者多きに係はらず、殖民地の稅則に於ては、依然として排他主義を取り、寸毫協同政策に出つる意志なきは、頗る佛人の爲めに之を惜しまざるを得ず。佛人は印度支那全體に對して千八百九十二年の本國海關法を適用し、佛國の製造品にあらざる歐洲貨物に對しては、十分高率なる關稅を賦課し、印度支那の貿易は之を佛國本土との間のみに限局せんと欲するものゝ如し。但し佛國より供給する能はざる貨物、例へば麻甕の

如きは新舊とも無稅輸入品の中に數へられ、また通常佛國本國の海關法によりては課稅せらるべき性質の貨物なるも、佛國より廉價に輸入し能はさるもの、則ち動物、生乳、支那產の野菜、菓物、藷、及び材木の如きは、無稅品として取扱はる、然るに佛國より輸入し得へきものゝ中、靴の如きは若し他國より輸入せんには百キロ毎に五十フランを課し、陶磁器は六フラン、紙、文房具は、十三フラン、ガラス器具は二十五フランを徵す、然るに此等の物品が若し佛國より輸入せられんには、一切皆な無稅なりとす、他の諸國は如何ぞ此の如き高率の輸入稅を拂ふて、無稅の佛國品と競爭し得へき、此地方の貿易は殆んど佛人の手中に歸しつゝあるもの自然の勢のみ、然らば則ち佛國商人は此地に向つて、貿易を勉め、產業を起すに熱心なりやと云ふに、其體質と、嗜好と、生活狀態とは彼等をして幸福を此地方に享受せしむるに適せざるを以て、佛國は他人に禁して飲食せしめざると共に、己もまた飲食せざるが如き境遇に立ち、其結果として土人と在留佛人は、高價を拂ふ

東京州の土人

支那雲南省蒙耳府

て撰擇の自由なき狹隘なる市場より、貨物を購はんことを强らる、而し之れによりて何人が利するかと云へば、唯だ佛國に於ける少數の製造業者のみ。

日本品に對する待遇

殊に余が遺憾に堪へざるは、佛國官吏の日本商品に對する態度なりとす。日本より佛蘭西本國に輸出する商品は、他の諸國より輸入する同一物品に課せらるゝより多くの輸入稅を課せらるゝとなかるべきは、日佛協約の示す所なるに係はらず、日本より佛領印度支那に輸入する日本商品は、最高率の輸入稅を課せらる。日佛條約は佛國若し好まば、之れを印度支那に適用し得るものなるに係はらず、佛國政府は遂に之れを適用せざりしものは、印度支那官憲の異論のためなりしと信ぜらる。然れども千八百九十六年の日佛條約締結當時にありては日佛の間、今日の如き關係にあらざりしが故に印度支那の官憲が異論を唱へたることも怨すべからざるにあらずと雖も、日佛協約が印度支那を主題として締結せられたる今日に於て、日本品が猶ほ極めて高率にして殆んど

禁止税に近き課税を受くる至りては、咄々怪事と云はざるべからず。また日佛條約によれば、兩國の臣民、共に兩國に於ては通行税を課せらざるへしと約束せらるゝに係はらず、日本商品は印度支那を通過して、支那の雲南省に入るに方りては、輸入税の五分の一を課税せらるゝは、また更らに一大怪事と云はざるべからず、勿論日佛協約は印度支那に適應せられざるものなりと雖も、印度支那政府は、文明國の通義として、かゝる惡税を課せずして、以て日佛條約の精神を尊重するは其通義なるべきに、平然として通行税を課するに至りては、驚くべき政治と云はざるべからず。而して更らに甚だしきは、日本品と佛國品と、鐵道運賃に相異あること是れなり。日本より假りに食料ビール等を海防(ハイフォン)より、雲南省蒙耳(モンヴー)まで送らんとするに、一噸の貨車を借切とせんに、五十弗を徴せられ、而して佛國品ならば三十四弗にて送るを得べし。日本品は輸入税の五分一の通過税を徴せられて、更らに一噸の運賃につき、佛國品より十六弗高く徴らせるゝに至りては、果して公平なる政治と云ふことを得へきか。佛國政府が他の文明國と共に、支那の釐金税に對して數ば〻〻抗議したるは、余の記臆する所なり。然るに佛國自から、其殖民地保護國に於て、通過税の名の下に、一種の釐金税を徴するに至りては己の目に梁木あるを知らざるものと云はざるべからず。若し日本政府にして朝鮮若しくは滿州にて、通過税を徴するが如きことあらば、列國の慈訴それ如何ぞや。余は佛國に對して極めて親善なる感情を有するものにして、率先して日佛協約の必要を說きたるものなるが故に、日佛協約の生じたる兩國親善の精神が猶ほ未だ此地方に實現せざるを見ては、他人よりも一層深く遺憾に堪へず。余は此次に來るへき關税改正協約に際しては、日本と印度支那との間に、友愛協同の精神を以て、雙方の利益を計る條約の締結せられんことを希ふて已む能はず。之と同時に、日本の船舶が東京(トンキン)灣にも浮び、財産と地位ある我商人の東京に止りて、日佛兩國の士人が、相互に尊重するに至らんことを希ふて止む能はず。

矛盾せる關稅政策　印度支那政府は以上の如き手段によりて、他國よりの輸入品に重稅を課すと雖も、土人の生活甚た低くして、購買力少なきか爲め、政府が輸入稅より得る所甚た多からざるを以て、他の熱帶殖民地にあるが如く、輸出品に課稅して、歲計の平均を得んと欲し、動物、蜂蜜、魚類、菓物、種物、木材等は悉く之に課稅し、若し特に規定する所なくんば、從價百分の三を課せられ、米及び籾は若し三割三分以上の糠あるものは一百キロに付、七十六サンチーム、三割以下の糠あるものは、四十二サンチームを課し、白米は三十二サンチームを課す。是れ成るべく、精製品の輸出を奬勵せんがためなりとす。而して以上の輸出品も、若し佛國に向つて輸出せらるゝときは、無稅品となるが故に、歐州行の輸出品は、自然に佛國を經るに至る。政府は此の如く極端なる保護稅政策を實行するに係はらず、其千八百九十八年支那政府より廣州灣を租借するや、之れを以て自由港となし、一切の貨物、無稅にて出入せしむ。是れ蓋し香港と相對抗して、其繁昌を奪はんと欲するがためなるべしと雖も、一方に極端なる保護稅主義を實行するものが、一方に自由港政策を行ふに至りては、天下矛盾の極ならざるべからず。余は廣州灣に於て自由港政策の利を知りたる佛人が、せめては印度支那に於ては、寬大なる保護稅政策位に退却せんことを望まざるを得ず。

自給殖民地　印度支那に於ける保護稅主義は、以上の如くに極端に走ると雖も、其此に至りたる動機を考ふるに、また深く怨すべきものなきにあらず。千八百八十三年佛國が東京を畧取したる以來支那黑旗軍の殘黨と、安南の土匪と年々歲々蜂起して殆んど寧日なく、東京を略取したりと云ふも、權利上のみに止まりて、全國擾亂を極め、之れを平定せんが爲め、佛國は人命と財用とを用ゆること限りなく、千八百八十七年より九十六年に至る九年間に、本國より東京に送りたる財用は七億二千萬フランに上り、之れか爲め數ば內政の危機を釀し、幾多の政治家を墜落せしめ、東京と云へば、人之れを冷笑して、殆んど誇大にして事を好むの意

なりとするに至る。佛國政府が東京に費す所、此の如くに巨多なるも、需むる所多くして、與ふる所少きを以て、印度支那政府は千八百九十六年、更らに八千萬フランの公債を本國に募るに至れり。佛國の官僚は、殖民政治に就きては多くは狹隘にして性急なる畫一同化派に屬するを以て、機會さへあらば殖民地の政務に干渉せんと欲するに加へて、政治家は殖民地問題を孤柱として、政權を爭はんと企つる者多く、本國より補助費を供給するを機會とし、政府、議會、共に相率へて殖民地に干渉して其弊に堪へず。此に於てか印度支那政廳の官吏は、何人が首唱するともなく、本國の干渉を離るゝにあらずんば、殖民地は統治すべからず、而して本國の干渉は主として財用の補助より來るを以て、殖民地を財政上より自給自治ならしむるは、即ち一般政治上にも自治なるを得る所以なりとなし、鋭意して財政自給を謀り、千九百四年よりは、已に其目的を達して本國の補助を受けざるのみならず、本國より派遣する陸海軍費として、年々一千三百萬フランの金額を本國に納付するに至れり。夫れ印度支那政廳は此の如き目的を有するが爲め、あらゆる手段によりて其歳計の均衡を維持せざるべからず。是れ輸出品にも課稅する所以、輸入稅にも重稅を課する所以の一なるべし。然れども其動機の何處にあるを論せず、佛人が印度支那に於ける財政及び經濟政策は、全然其主義に於て誤謬なりと云はざるべからず。

廉價なり土地　横山正修氏は大阪毎日新聞の通信員にして、海防港に滯留して佛領印度を研究し、頗る土情に通ず。彼の語る所によれば、海防附近に三千五百町歩の寶地あり、中一千五百町歩は現に水田にして、米を生じつゝあり。七百町歩はゴム樹を植へ、三四年の後はゴム液を採收し得べし。殘る所の一千三百町歩も曾て東京王政時代には、水田なりしも、兵亂多年なりし爲め、人民の逃散相繼ぎて、數年、荒蕪に委したるが爲め野地となりしものにして、一たび鋤鍬を入るれば直ちに水田とするを得べし。而して紅河の支流、此地に添ふて流るゝか爲め、灌漑の利

は十分なりとす。右の持主は佛人にして、早くも東京の生活に倦みて、歸心矢の如くなるが爲め、十五萬圓にて之れを賣らんことを望むと。それ一年二作の水田にして、一町歩四十二圓八十錢と云ふに至りては、是れ一年一作の朝鮮の寒田よりも廉價なるものにして、殆んど世人、意想の外にあり。此の如きものは佛人が政權により、資本により、智能によりて、優勝の地に立ちながら、茲に土着して自から產業を營むの心が、如何に稀薄なるかを示して、餘りありと云はざるべからず。佛人已に此地方が提供する膳羞を食ふ能はずんば、宜しく他人をして食はしめて、自から地主たるの利益を享受するに止まらざるべからず。然るに佛人は自から食ふ能はずして、他人にも食はしめざらんとす。其結果は他の歐洲人や日本人は、寸毫も印度支那の產業貿易によりて利せず。而して佛人の最も厭惡する支那人のみ其利を占む。余は佛人の政治の、賢智を疑はざらんと欲するも得ざるなり。

海防より海內

海防（ハイフン）は東京（トンキン）州の關門にして海內（ハイナン）は其首府、且つ印度支那全體の

人類の種ウルル中族ソヤシ

美白るけ於に崖干猪南雲

首都たり、海内は汽車によりて海防と聯絡し、其間六十マイルにして、僅かに二時間を要するのみ。余の海防に入りし數日前より大雨あり、海内、海防の間、河水汎濫、鐵道を水底に沒して、汽車を動かす能はざるを以て、余はジエブセンの獨逸汽船によりて、河流を遡り、ダブコウに至り、此より汽車に乘りて海内(ハノイ)に入る。ダブコウは首府海内より支那廣西省の境に達する鐵道のステーションにして、余等の船は午後六時に海防を發して、翌日の午前六時ダブコウに着し、之れより汽車によりて海内に入りしは、午前八時半なりき、汽車によれば二時間程の道を、一夜舟行するに至りては、また極めて創世的の旅行と云はざるへからず。案するに東京(トンキン)州は古來獨立の一王國にして、千八百二年安南國の爲めに併呑せられて其郡縣となり、安南王の目代海内府に駐りて政治を行ひしが、千八百八十四年東京州を佛國保護の下に置く。全州の面積四萬六千方里にして、十縣八千村に分たれ人口一百萬を數ふ。此中支那人は三萬三千人にして、歐洲人は軍隊を除きては四千人に

過ぎず。日本人は一百人を數ふと雖も、十二三を除くの外は、香しからぬ人種に屬するは、余が旅行者として數ば耻かしく思ふ所なりき。

海内府の光景　余は海内（アノイ）ステーションを出て、一歩海内府に入りたる時、第一に其街道の廣大にして、四五臺の自動車をも並馳し得る程なるに感じ、第二には其純然たる歐洲流の都會なるに感じ、第三には其靜平にして人の來往少なく、車馬の音響なく、西貢より此地に入りては恰かも紐育よりワシントンに入るが如くなるに感ず。余が投宿したるヲテル、メトロポールは此地第一のホテルにして滯留の客の外、晩餐のみを此に取らんとする外來客の爲め、食堂常に充滿し、其食事の甘美なる巴理にて食ふものと畧ぼ等差あるなし。而して食卓には常に紅白二種の葡萄酒を備へて、客の自由に飲むに任かす炎南萬里、開拓の事業に伴ふ寂寞と無趣味とを救ふて、多少の慰樂となるものは、かゝるホテルの存在なりと思へば、此ホテルも、佛人の殖民歴史には、確かに數行の記事を要求するに足るものと云はざるべからず。（余は曾て外人より此ホテルの事を聞知して、政府の補助ありと臺灣統治志に記したれども、事實は然らず個人の自由營業なり）此地曾て大市と號して、安南時代より樞要の地なりしが、佛人之れを取つて以來、頻りに市街を改良して、溝渠を通じ、惡水を排し、道路を改良するもの已に五十里に及び、水道を作り、電燈を給し、今は純然たる最新式の歐洲風の都會となる。余は海内の風景として數へらるゝ小湖、大湖、植物園を見、博物館に入り、街衢を徘徊し、兵營を見、總督府に出入し、喟然として此地を取りし佛人氣魄の大なるを嘆美するを禁する能はず。佛人が最初に占領したる印度支那は、交趾支那の一區域にして西貢を以て其首府とする南方の一局のみ。然るに其一旦東京を占領するや、即ち都を北の方、海内（アノイ）に移して、蠻夷跳梁の間に突入す。是れ恰かも明の成祖が、南に起りて、歴世の首都たる南京を捨てゝ、北京に移り、以て北方を威壓せんとしたるが如し。經綸規模あるにあらずんば、焉ぞ能く此の如くなるを得んや。

官吏の都會　余は官人に接し、學校を見、螺鈿細工を見、土人の町に入りしが、電燈が、土人の住居をも照して、土人が余等を呼びかくるにモッシュの佛語を以てするに會ふては、佛人の大好物なる同化主義の一端を見て、破顔一笑するを禁ずる能はざりき。全市の人口十五萬人を數ふれども、歐洲人は武官兵士を除きては三千一百人に過ぎず、而して支那人は却て八千人ありと云ふに至りては、支那人の繁殖力は、例によりて驚くべしと云はざるべからず。佛人の多數は官吏にして商人少なく、商人あるも小賣商人にして、事業家に乏し、而して文武の官、二年を此地に經過すれば、一年の間、本國に歸休するを得るを以て、此地を以て腰掛の地となすもの多く、眞に此地の事を以て終身の事業となすもの少なし。今佛人の印度支那にある者を數ふるに、二萬人にして、別に八千の軍隊あり、印度支那在留佛國官吏の數を計るに、官員錄に記さゝる文官のみにても五千四百餘人あり、而して此官吏の大部分は海內府にあるを以て、海內府は殆んど官吏の都會にして、事業少なく、從て勞銀甚た廉なりとす。故に物價また甚た低廉なりとす。余は安南土人の家に就きて白絹を買たるに一反(二丈八尺)七圓六十錢なりき。勿論此絹たるや染上げて日本絹の如き光澤なしと雖も、七圓五十錢はまた非常の廉價なりと云はさるべからず。之を以て凡ての勞銀物價を類推するに足らん。

在留佛人の不平　東京は佛國に於ては一時好大にして失敗したる事業の代名詞の如くに使用せられたる時代もありたりき。然れども今や秩序回復して、また往時の紛亂を見ず。總督クロプコオスキー氏、久しく各國に使臣として、經驗を積み、寬大にして聰明、其政治は產業を興隆し、交通機關を整理し、土人を開發するを主とするが爲め、境內漸やく淸安、中外望を屬すと雖も、印度支那の痼疾たる官僚政治の病患、容易に拔け去らず。總督の仁政が、土民を澤さんとするを妨ぐるもの少からず。また何れの殖民地にもあるが如く、殖民地在留の佛人は、其貪濫飽くなき望を滿さんとして、土人を掠奪せんとして得ざるや、其咎を總督の政治に歸す

るあり。本國の議會には、また突飛なる人道論者ありて、總督の政治を尤めて土人に不仁なりとするものあり。若し在留佛人の言ふ所を眞なりとせば、現今の總督は、土人の利益を尊重して、本國人の利益を輕んする者なるか如く、若し本國の議會に於ける人道論者の言ふ所を眞なりとせば、現總督の政治は土人の利權を蹂躪して、顧みる所なく、殘虐無道なるが如し。一人の政治に對して、腹背相反したる非難あるは不思議の極なりと雖も、是れ土人と殖民と、利害相反したる土地に在りて、公平なる政治を布かんとするものが、往々受くる所の非難にして、已むべからさるの勢と云ふべきのみ。蓋し佛國は其軍隊の善戰善謀によりて東京を占領したる後は、善謀の將軍は愚政の痴人にして、多くの惡政を行ふて、其寵愛する佛人を利せんとしたること少からず。即ち印度支那の海岸一帶に鹽を產するに係らず、食鹽は佛國のアーブルより輸入せざるべからずと規定し、印度支那は全體粘土より成るに係はらず、煉瓦は凡てマルセーユ若しくはボルドウより輸入せざるへからすと規定したるが如き是なり。かゝる偏狹なる政畧の後を受けて公正なる政治を行はんとせば、非難は免るべからざるのみ。余は佛國の利益と殖民地の利益は、依然として現總督の寛大公平なる政治にあるを疑はず。

匪徒の出沒

東京（トンキン）は東北、支那の廣西省と境を接し、西北、雲南省と境を接するを以て、匪徒互に出入して、踪跡すべからず、是れ從來東京を難治の地と稱したる所以なりとす。余其村落を見るに、一村悉く一廓をなし、一廓は繞らすに竹林、若くは叢澤を以てし、唯一個の關門によりて出入す。また到る處公會堂の如きものあり。米穀の賣買、計量等多く此に於て爲さる。故に一村は一族の如し。是れマレー人種の特色にして、從來刑賞、課稅等、また一村の責任たりし所以なりとす。故に若し匪徒を出す時、一村が悉く之れを隱匿せんには政府之れを物色すること容易にあらず。是また東京の治め難き所以なりとす。余が海内（アンナン）にあるや、日曜日に於ても一個の兵士の、街衢を徘徊するを見ず。余が汽車によりて海内附近を旅行するや、往

々隊伍を作りたる兵士と、大砲と、汽車に出入するを見る。余怪しみて之れを傍人を問ふて、海内附近に匪徒あり、勢、猖獗なるか爲め、大兵四出して之れを掃蕩せんとし、海内に一兵を止めざるものなるを知る。一昨年七月、土兵數名、相謀つて其上長官たる佛人を毒殺するや、佛人狼狽して其禍源を極めんとし、珠聯、蔓延、頗る土人を動搖せしめ、結局其首領二名を斬り、其首級を海内總督官邸の門前に梟す。蓋し死刑廢止論の起るほどなる佛國が、其殖民地に於て梟首律を行ふは、矛盾に似たりと雖も、東京は保護國にして、佛人直接政治の所にあらず、安南王の舊法の行はるゝ所たり。其梟首の掲示もまた維新第二年の年號を以て公布せられたるを見れば、必ずしも怪むべきにあらざるのみならず、余は佛人が此一事の如く、百事を行ひ、土人には土人の習慣あるを解せば、其殖民政治は必らずや一層見るべきものあるを信じて疑はざるのみ。流石に佛人も梟首の一事は之れを天下に公知せらるゝを憚りたるにや、傍觀の日本人中、現狀を寫眞したるものを押收して、公刑を禁じたりしが、後數日、之れを公許したり云ふ。此一事、佛人は見て以て土人の心膽を寒からしめたりと信ずるに係はらず、却つて土人の心を動搖せしめ少からぬ困難を生じたり。之より先き、海内附近に土匪の首領あり、官軍攻戰に苦しみて、之れを招徠するや、匪首また窮乏の餘、欣然として歸順せしも、狼心虎志、久うして後、形跡頗る疑ふべきものあり。殊に以上七月の梟首を見てより稍動搖の兆あるを以て、昨年の夏佛人襲ふて之れを捕へんとして、其備なきを擊ちしが、匪首、偵して之れを知り、疾風の如くに逸出してより、意を決して佛軍に抗す。即ち海内に於て、雙兵の影を見さるものは、右の匪首と戰はんがため悉く大兵を發したるものにして、事態の容易ならざるを見るべし。而して余の最も驚きたるは、此土匪の蜂起が、海内を去る二十マイル内外の地にあること是なり。思ふに廣西の國境、諒山と土匪地方とは、間道相通するを得べしと云へば、佛人が其高壓政略のみに依賴せず、土人と親しみ、土語を解し、土情を察するを以て、殖民政策の要義とするに

至らずんば、全國を靖安するは、容易の業にあらざるべし。

海內より雲南

海內（アノイ）より身を汽車に投じて東北に向へば七時間にして諒山（ランサン）に達すべし。諒山より一驛を越ゆれば、即ち支那廣西省と接境の地にして、新州太平を越へて、南寧に出れば、汽船により西江を下り、廣東港に下るを得べし。更らにまた海內（アノイ）より汽車によりて西北に向ふて進むこと十二時なれば老橋（ラオカイ）に達すべし。老橋或は老開と書し、停車場に於ては牢該と書す、皆な土音ラヲカイの宛字のみ。老橋は即ち南蠻國の一部にして諸葛孔明が孟獲と戰ふて、七擒七縱したりと云ふ南蠻の地の一部とす。老橋は南溪河と紅河を隔てゝ雲南省と相望む。南溪河一名盤江にして即ち古の臨安元江なりとす。余は印度支那旅行の途次、幸に雲南を一見せんと欲し、朝の六時、海內より停車場を出發せしが、海內より安沛（ウエンパイ）邊までは、平地にして山容水態、安南普通の風光にして、特に記すべきものなし、余等の汽車は安沛にて老橋より來る汽車と相會ひ、乘客をして盡食せしめんが爲め、三十分間此に停車す。余等は驛內の小料理店に入りて食事するに、かゝる田舍驛にても佛蘭西風の料理と、赤白の葡萄酒とは依然として附き纏ふ。食事終りて汽車に入りて北行すれば、須臾にして右方丘岳を見、左方大河を見る。河は即ち紅河にして、水色丹氣を帶び、水勢汪洋、恰かも楊子江に似たり。汽船によりて上は老橋に通じ、下は海內に通ずるを得べし。河の兩岸藪澤にして、掩ふに芭蕉を以てし、長草短樹其間に點綴す。想見せよ、大河の兩岸に發生したる千百万の芭蕉が、紫紅の花を蕊心に點じて、殘れる雨露に、大陽の光を受くるの光景は、如何に壯麗なるか、如何に雄大なるか。詩も歌ふべからず。畫も畫くべからず。嘆美とは天がかゝる場合、無限の感情を言はんが爲めに與たる文字なるべし。行き行きて、更らに行き引けば右方の丘岳、愈々高く、樹林益密に、千年の樟枝、天を掩ふて暗らく、百尺の榕樹、地に垂れて廣し、所々の樹枝、猿猴の上下するを見、一聲兩聲、哀音耳に入り來る。然ども啼猿は、自から愁へず、愁は行人の心より來るならん。此地方に於て如何に久しく南蠻と、

支那人との間に、人種的抗爭が行はれたるか、南掌帝國も亡び、滇國も亡び、南越も亡び、今や佛國は三色旗を揚げて、鐵道を此地に進るとは、如何なる變化ぞや、此邊一體に鳥影を見ず、鳥音を聞かざるは、人里の遠きがためにやあらん、丘岳の斷續する間の平地には、往々にして新たに開墾を試みつゝあるものあり、其容貌を見るにセレー人よりは寧ろ支那人に近きは、其地支那本土に近くして、支那的血液の多きがためか、處々乘降の上等客は、軍人か鐵道官吏のみ、汽車を分ちて上中下、及び土人車となす、下等車中に土官あり、其家人臣下を率ゐ、余の通譯を介して、頻りに土情を語らんとするも、余は聞くも益なく、事に害あるを以て、之れを辭謝す、午後六時、老橋（ラオカイ）に着す、老橋は河を隔てゝ支那雲南省の河口（ホイハウ）と相對す、此夜急雨淋浪、大氣清澄、夜、虫聲を聞く、河口の右方に高丘ありて支那の兵營あり、其砲口は老橋にある佛國の兵營を下瞰す、他年佛清の間、事あるも佛兵が是より一歩を進むること容易にあらざるべしと信せらる、老橋と河口とは、鐵道の橋梁によりて相通じ橋の此方には佛國の兵士嬉々として街上に戯れ、橋の彼方には支那の兵士、逸々として何物をか物色するが如く徘徊するは、對照の妙を極む、而して汽車一たび此橋を渡れば、即ち直ちに隧道に入るものにして、此より以往雲南鐵道の本色を現はして、斷涯絶壁を縫ひ、高山峻嶺を貫く、二三十里の間、隧道七八十あり、天下の奇觀を極む、余が雲南省に入りしは昨年の九月にあり、當時鐵道の通するは蒙耳（モンヌー）までのみなりしが、蒙耳と云ふも其實は蒙耳を去る十二里の阿迷州（アミシウ）にして、技師の語る處によれは本年五月には、雲南城まで開通すべしと云ふ、佛人は其初、紅河によりて雲南に入らんと企てしも、小蒸滝の外、浮ぶべからざるを見るや、即ち意を決して、鐵道に頼らんとしたるもの、雲南鐵道の起源にして海防より老橋まで二百四十哩、老橋より雲南城まで一百八十里、合せて四百二十哩あり、其志望の雄大なる何人も、看取し得る所なるに係らず、雲南鐵道即ち滇越鐵道の最終點たる雲南城内に於ては獨逸人の活動著しく、官民の間に其勢力を植つゝあるは、

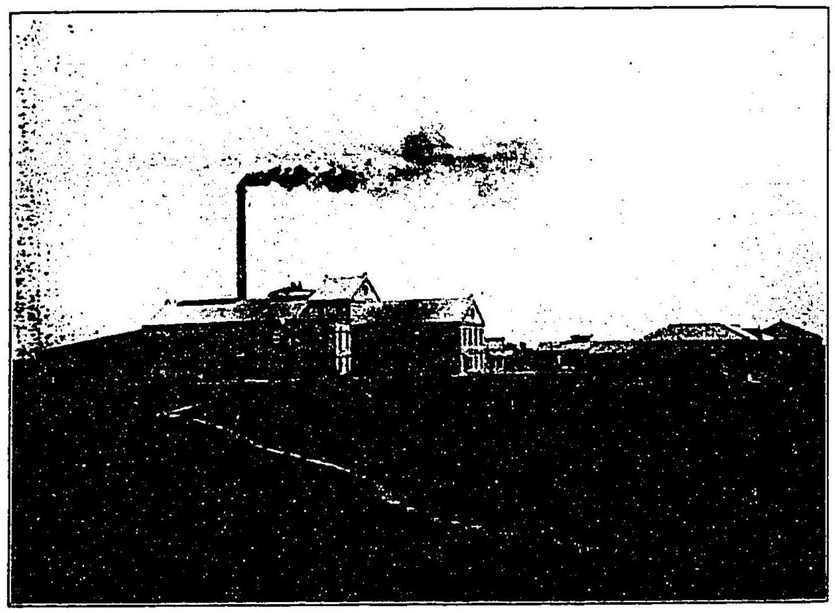
注目すべき一現象にして、有名なる昆陽池の水を利用して、城内に電燈を供給する事業が、容易に獨逸人の手に歸したるが如きは、其一例なりとす。蓋し數年の後、此地方に於ける列國爭競は眞に興味ある一幕たらん。

河口に於ける革命黨

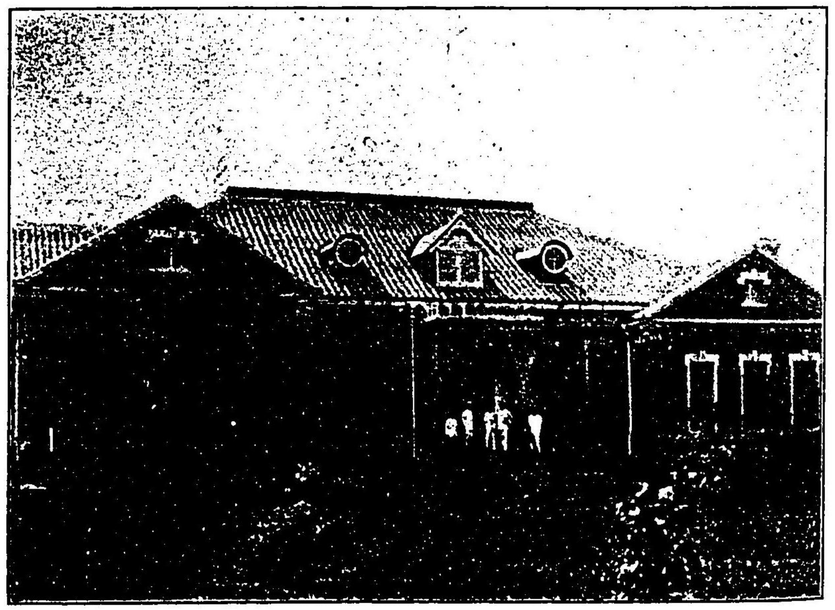
一昨年、清國の革命黨、雲南に起り、一時官軍を破りて、其城塞を奪へりとなし、頗る日本國民の視聽を聳動したりしが、其事を擧げしは、即ち老撾の對岸河口にあり。當時の事を目擊したるもの、余のために當日のことを語りて曰く、佛國政府の警察頗る周當にして、一人の日本人すら其踪跡は監視せらるゝほどにして、始んど蟻穴ほどの間隙もあらず。然るに一夜、河口の要塞に於て、卒然として數百の小銃の連發せらるゝあり。次て吶喊の聲、山河を動かすあり。余等は唯愕然として山上の火光を望むのみ。已にして黎明に至り、革命軍の旗城上に飜り、稅關、橋梁、兵營等悉く革命軍の收領する所となり、到る所の街道、悉く革命軍の宣言を貼附するを見る。其文意によれば、大清國を起さんが爲めに革命するものにして外人の生命財産は安然なるべし。雲南に入る物貨は凡て無稅なりと云ふにあり。其軍容堂々として紀律あり。服裝は日本軍隊に類す。且其清國守備長を執て、之れを街頭に斬るを見るに、支那流の殘酷なる寸斷法を用へず、一刀、其頭を斷ち、直ちに死骸を埋めて、其跡を洗ふなんど、頗る舊風と異なる者あり。土民皆な深く彼等に同情を寄す。已にして此を固守する十數日にして北、雲南城に向はんとするに、兵器金穀なく、躊躇するもの數日なりしが、雲南總督大兵を發して水陸兩道より來り、且つ附近鑛山の人夫に武器を授け、三方より河口に迫らんとすと報せらる。土民皆手に汗して、革命軍が如何にして二十倍の官軍と戰ふへきかを憂ふ。已にして革命軍、一旦結束して雲南の官軍を迎擊すへしと號して啓行せしが、遂に歸らす。而して戰もまたあるなし。傍人が最も怪しむ所は、周當苛細なる佛人警察の下に於て、如何にして五百の革命軍が、卒然として天より下りしが如く老撾に現出したるか。如何にして其武器を輸入し得たるか。如何にして何處に

去りしかにあり。之れを解するもの曰く、彼等は佛國官憲の默認の下に開戰したるものにして、此開戰の報が佛國に傳はるや、本國政府其政策を中止せんことを命したるを以て、東京政府は爾來之れを助けさるのみならず、海內附近より送るへき金穀の輸送を妨止したるかため、革命軍は遂に草間に沒し去りしのみと。

奴隷賣買の風　余等は亞弗利加及び阿剌比亞に於て、奴隷賣買あるを聞きて、其慘酷を想像するに止ると雖も、老樹を中心として、西シヤン國、緬甸より、南東京、ラヌス、柬埔寨等は奴隷捕獲及び賣買が、昨日まで行はれたる土地なりしを思へば、悚然として恐怖せさる能はす。佛人が始めて安南に上陸したるとき、其土酋に對して、土地の商品如何を問ふたるに、土酋は米穀、綿絹及ひ奴隷なりと答へたりと云ふ。彼等は其國境に於て相會する異邦人を捕へて奴隷となし、異種族と戰つて勝つや、之れを捕へて奴隷となし、同族中と雖も財本を貸與して期に至りて返さゝるや、其身體を沒入して奴隷となす。而して異邦人を捕へて奴隷とするは、シヤ



鹽水港製糖會社第一工場



鹽水港製糖會社クラブ

ン地方の境界に於て最も多し、奴隷の價は地方によりて一ならずと雖も、概して婦人は四十歳以下ならば六十五圓、男子は商品としては一等劣りて四十圓にて賣買せられ、村邑土豪の富は、奴隷の多少によりて數へられ、其官吏も階級の高下によりて、奴隷に多少あり、唯だ此等の地方の奴隷が亞米利加、亞弗利加の奴隷と異なるは、其所有主の奴隷に對すること、彼の如くに峻酷殘忍ならず、寧ろ待つに臣下の如くして、多少の自由を與ふるの一事にありとす、佛人が其勢力を印度支那に樹立するや、首として奴隷賣買の制を嚴禁せるか爲め、此風今は漸やく廢絶すと雖も、シヤン、ラヲス、緬甸、暹羅の國境不明の地方に於ては、此風猶ほ行はると云ふ、余は印度支那に於て、土酋等猶ほ十數の家人を從へて旅行するに會ふ、友人余に說明して云ふ、見よ此從屬等は、先代より臣下なるあり、奴隷賣買より來りしものありと、蓋し支那の歷史を見るに、世替り代進むる從つて、奴隷制度、廢せられて、井田班田の法、益々壞る、然るにマレー人及びマホメット教徒の國のみは、奴隷

制度と、村落共同法の名の下に於ける井田班田の法律を固守して、十九世紀に及ぶ、其世界の氣運に後れて他の制令を受くるも、また自然の勢なりと云はざるべからず。余は奴隷廢止の一事のみにても、佛國は印度支那を領有するの權利を有すべきを信ず。而して之と同時に久しき間儒者の理想として信ぜられたる周の井田法なるものは、極めて惡法にして、學ぶに足らざるものなるを見て、此等の田制を基として構成せられたる儒者の理想なるものゝ、毫髮取るに足るものなきを信じて疑はず。

印度支那の今昔

余は印度支那を旅行して、第三共和政府をして殖民策を行はしめ、共和政治もまた國家膨脹の大業に不利なるもにあらざるを知らしめたる政治家の雄才大略を嘆美すると共に、古の支那の偉大なりしを追懐するを禁ずる能はず。即ち前漢の時、已に廣東、廣西及び今の印度支那の大部分を併せて、儋耳、珠厓、南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、日南、九眞の九郡を置きたりき。儋耳珠厓は廣東海の海南島を云ひ、蒼梧、鬱林は今の廣西梧州附近を云ひ、交趾は西貢附近を云ひ、日南は安南附近を云ひ、九眞或は眞臘は、今の柬埔寨附近を云ふ。安南の名の現れしは唐代にありて安南都護府を置きしに初る。今の老撾は即ち南掌、越裟氏にして、緬甸は即ち古の朱波の地にして、漢時、撣と云ひ、唐時之れて驃と云ふ。爾來、土豪の自立するあり、漢官の僭僞するあり、國名また時によりて變更して考ふべからず。占城はチャンチャンにしてまたシャムパとも云ふ。今の西貢附近にして、秦始皇の時の象郡、林邑縣と同一區域なるが如し。其後今の安南漸やく大にして、四方を征服し、朝廷を立て安南と稱し、或は越南と稱す。時に支那本國の征討を受け、時として抗爭し、時として服屬するも、內に向つつは天王と號して帝號を稱す。是れ安南の地、支那本國に近く、支那人と交はること最も多く、支那人の血液最も多く、其智見文化の最も發達したるか爲めか、其蠶爾たる土酋に止らざるは、數ば支那の境域を犯して、遂に今日の老撾の地までを攻畧して、其範圍に入れたるを見て之れ

を知るを得べし。文錄の役、明朝日本と相攻戰して疲弊するや、安南王、書を明帝に寄せ、安南の兵を以て直ちに日本を攻めて、空虛を衝かんことを乞ふと云ふ。余は明帝が何故に之れを諾せざりしかは知らざるも、當時安南が自から信するものありしを證するに足らん。

安南史に現れし印度支那

安南人の歷史によれば、基督紀元前二千八百年に鴻厓氏あり、二百五十年に甌貉氏ありと云ふと雖も、六朝宋の武帝の頃(西曆五百四十四年李氏始めて國を建て、天德の年號を立てしを見れば、此頃漸やく王朝らしきものを生じたるか如し。其後久しからすして僞朝、趙越王之れに代り、また久しからずして後李氏の代はる處となり、九百六十八年には、丁氏之れに代りて大招越と號し、十二年にして前黎氏之れに代り、後吳氏之れを襲ぎ、千九年には別に李氏起りて、最も長く千二百二十四年まで位を保ち、千二百二十五年陳氏起りて國を安南と號せしが、千四百年胡氏起りて大虞國を立て、三年にして陳氏復た興り、千四百二十八年黎氏また起りて國を大越と號し、僞朝莫氏、國を竊むこと六七年、千五百九十年黎氏また中興し、千七百七十八年に及び、阮氏起りて西山朝を立ち、仍ほ大越國と稱す。即ち今の安南國王は、阮氏にして年號は維新と號す。

佛國との關係

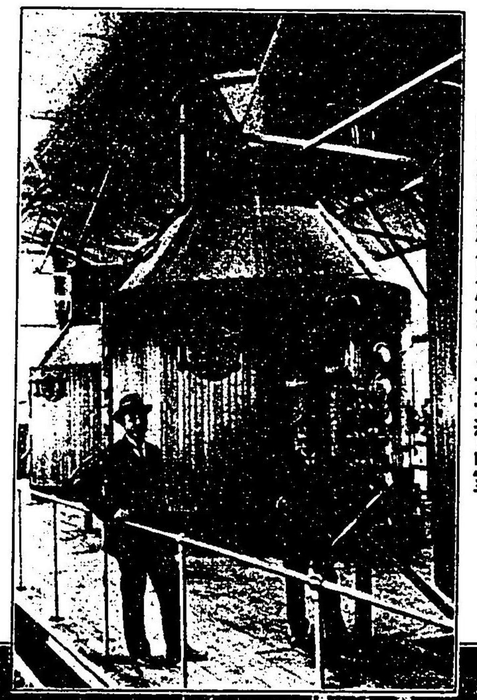
其外國との關係を見るに歷世、支那の郡縣にして、五代の時劉隱一たび之れを併せ、宋に至りて封して郡王となして、後其一國たるを認むるも、猶ほ支那の封冊を受けしが、千六百年前後となりては、安南國の王室、廢立の陰謀と、王位の競爭に勞れて、また自から起つの力なく、而して其宗國を以て自から任す明朝も、また南北の外敵に圍れて、外を顧みるの暇なし。故を以て安南の王室、苟も己を助くる者あらば何人にも賴らんとす。時に千六百八十四年佛人ルイシャップリエーヌ安南廢王の子を勸めて佛國に至りルイ十六世と條約を締結せしむ。その契約によれば佛國は內亂を鎭定して、廢王は王位に復すると共に、安南はトア

ラン半島とプーロコンド島を佛國に與へ、且つ十四艘の船舶を作るの材料を佛國に供給し、何れの地にありても、木材を截伐せしめ、佛國若し此地方に於て他より攻擊せらるる時は、安南は六萬の兵を出して佛國を助くべく、佛國は一萬四千の安南兵を招集して、之れを訓練するの權利ありとなす。已にして佛國大革命ありてルイ十六世は弑殺せられて、其約を果す能はず。ピノウ、ド、ベエーヌ即ちルイ十六世に代りて、約を果さんとし、自から私財を投じて、商船を借り、兵士を募り、安南に至りて其兵制を改革し、遂に國王の參議官となりて、叛徒を鎮定し、王位を回復す。安南王是よりピノー、ド、ベエーヌを信賴すること深く、其進言、悉く容るゝ所となり、佛人の登用せられて官吏となりしものまた少からず、東京地方の要塞城廓、皆な佛人の手によりて作らる。然れども佛人の勢力は、久しからずして土人の嫉視する所となり、其支那化したる土官と、土人と相合從し、各處に散在して經濟上の權力を占領する支那人と結びて、佛人を窘迫して至らざるより、千七百八十九年英雄僧ピノー、ド、ベエーヌの死するや、佛人の權力、全く地に落ち、千八百五十八年、土人土官、相合して佛國及び西班牙の僧侶を虐殺して、殆んど餘ます所なし。佛國即ち意を決して千八百五十九年提督ジュノイリーを遣はして、トアランを占領し、次で西貢を取り、遂に西貢を中心として一帶の地方を交趾支那殖民地と稱し、之れを策源地として、漸やく北方を窺ふ。此間普佛戰爭ありて、佛國の勢力の擴張、少しく怠ると雖とも、七十年の役の後、五年にして、海内在留佛國商人、ジュビユイが安南土人のために窘迫せられたるを機會とし、提督ジュブレー、之れを救ふの使命を少將ガルニエーに托す。ガルニエー即ち一艘の砲艦に乘り二百七十の兵を率へて海内に至るや、土官の抗拒する所となり、擊て之を走らして海内を取る

佛蘭西の保護國となる

然れども戰場に於ける勇者も、政治に於ては敗北者たることなきにあらず。佛人は此の如くにして安南王を屈するや、直に其國民的痼

疾たる同化畫一主義を實行せんとして躁急にも、種々の改革を行ひ、第一、國王に一定の歳入を與へて國家の歳入と區別し、國家の歳入は國庫に入れて、公費に使用すること、第二、行政區劃を大にして、官吏の數を減すること、第三、官吏の商業を禁すること、第四、都邑は其首長を公撰すること、第五、財政を整理すること、第六、人民が一年の中九十日間、土木其他の公事に服從して、租稅とする制度を廢し、金納を以て之れに代ゆること、第七、一切の土地を國有として、小作年限を延長する事、第八、奴隷は報償なしに解放する事、第九、蠻人を捕へて奴隷とするを禁する事、第九、佛人を以て政府の助言者とする事等を斷行す、此等の政革たるや、其目的動機の善良なるに係はらず、其手段と時機に於て土情に適せざるが爲め、王室の心をも得る能はず、同時に官吏及ひ貴族の心をも攪る能はず、去りとて金納租稅の如き改革のため、土民の心をも攪る能はず、一時に凡ての勞力を敵としたるがため、安南人は其曾て佛人を引きて爲したるが如く、支那黑旗軍を引きて助となし、佛



鹽水港製糖會社第一工場結晶室

鹽水港製糖會社第一工場乾燥室

兵を拒ぎ、之と共に支那政府に請ふて、佛安の間を調停せしめんとす。此時有名なる支那公使曾紀澤、巴理にありて、佛安間の條約は清國の承認する能はざる所なりと云ひ、傍ら論文を以て、支那の勢力の偉大なるを述べて、之れを以て獅子の眠りたるに比す。然かもガムベッタ昂々然、之れを斥け『佛國は支那に説明すべきものを有せず』と云ひ、兩國の間危機漸く迫る。北京在留の佛國公使ブーレー之れを憂へて權りに李鴻章が提出したる條約案に同意し、清國と安南との間に中立地帶を設け、東京を以て緩衝地となし、佛國をして安南の權利を尊重せしめんことを約するや、佛國政府之れを憤りてブーレーを招還す。之より兩國の間愈よ紛糾し、遂に千八百八十三年、黒旗兵襲ふて將軍リヴキエールと、其部下三十人を殺ろし、五十二人を傷く。佛國政府怒つて提督クウルベー、將軍ブーエーを遣はし、先づ安南の首府ユエーを陷し、國王をして安南東京を保護國とする條約に調印せしむ、之れより佛國の支那と、相抗爭するもの多年、遂にネグリエー將軍をして一萬

六千の佛軍を動かさしめ、クールベー提督の臺灣攻略となる。凡そ佛國が千八百八十三年東京攻略に力を用へし以來、費す所の財用三億三千五百萬フランにして、兵士を失ふ九千六十七人に達す。若し其失ふ所のみを數ふれば第三共和の歴史中最も重大なる損失ならん然れども其得たる者は世界中最も富裕なる殖民地の一にして、東埔寨の如きは、支那時代より最も富裕と稱せらる。明史眞臘傳に國中、金塔、金橋あり、殿宇三十餘所、王歳時一會、玉猿、孔雀、白象、犀牛を前に羅列し、名けて百塔州となし、食を盛るに金盤金椀を以てす、故に富貴眞臘の諺ありと云ふ。而して其面積を以てするも王朝時代以來、佛國が得たる最大殖民地の一にして、現今遺留する殖民地中最大なるものなりとす。其歳計は常に不足にして、國用を本國に仰ぎ年々上下紛糾の原因たりしものが、今は自給財政となりて、一千八百萬人の國は一億二千五百萬フランの歳計を維持し、本國に向つて臨海軍駐屯費を貢納するに至る。佛國若し善く之れを開發せば、余は其決して英領印度に劣るものにあらざるを信ず。

佛國の殖民政策　佛國の殖民政策は王政より武斷政治を經て、共和政治に至るまで幾多の成功と、失敗とを經來ると雖其の一定の傾向を生するに至りたるは、千八百四十八年アルゼリヤを攻略したる頃より始まる。當時佛國はアルゼリヤを夷平して三縣となし、佛國の郡縣と盡一ならしめんとして、代議員を撰出するの權利を賦與し、代議員と、地方議會と、市府代表者と相會して、更らに元老院議員を撰出せしめしが、是ぞ確かに、撰擧萬能の共和政治より來る論理的結果にして、凡ての異邦、殖民地、異人種も、また佛國文明に同化し得へしと信ずる理想より生じたるものにして、名けて同化盡一主義と云ふべし。然るに此制度の弊たるや二個の理由によりて全然、失敗に歸したりき。第一は土民にして撰擧權あるものは、悉く佛人に買收せられて、撰擧は何等の效力あることなく、而して佛人は同族相結びて、土人に不利なる政治を行はんとするが爲め、土民と階級的嫉惡の念を生

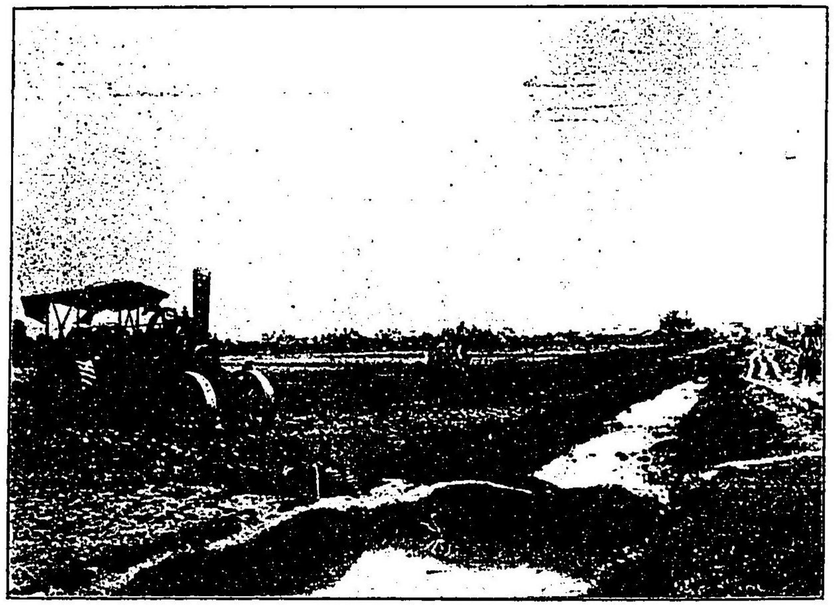
じたること其一なり、凡ての政治が、狹隘にして階級的精神、人種的思想に富みたる撰擧機關を通して爲さるゝが爲め、政治に一定の規模ある能はず、而して代議士、元老院議員は、巴理にありて、直接に政府と交渉して事を決するがため、總督以下の官吏、上は本國の官僚の鼻息を伺ひ、下は代議士、元老院議員の一顰一笑を顧みて、眞正に政治を行ふの心ある能はざるもの其二也、此に於てかナポレヲン三世が帝位に就くや、直に此制度を廢し、文武の權を有する總督を置き、絶大の權力を以て、顧慮する處なく其所信を斷行せしむ、其結果として諸種の改革行はるゝもの少ならず、當時の遺政として、今日に存するものは、人民の土地所有權なりとす、蓋し此地の亞剌比亞人は、土地に對して個人の所有權なく、凡ての土地は町村共有の所有權の下にあること、周の井田漢の班田の制の如く、近年まで瓜哇スマトラに行はれたる、田制の如し、故に土地に對して親愛の情なく、放浪の生を營み易く、産業の發達を妨くるもの、職として此に基かずんばあらず、故に總督は千八百六十三年勅令によつて町村所有權を禁止して、一切の土地を人民に分班す、是より人民漸やく私産を愛するに至り、此私産を保護する總督府に信賴するに至りたり、然るにナポレヲン三世倒れて、第三共和政府の起るや、總督の權力を縮少し、且つ同化畫一主義を極端まで應用せんと欲して、佛國の憲法民法を初めとして、凡百の法典を此地に適用するに至りしより、病弊百出、アルゼリヤ人をして佛國政府を怨恨せしむ、茲に於てか、共和黨の政治家も、之れに懲りて其殖民政策を變更せんと欲する時、千八百八十一年、政府がチユニジヤを取るや、之れを郡縣として本國と畫一制度の下に置かず、之れを殖民地として官僚と議會の干渉の下に置かず、直ちに保護國なる新制度の下に統治するに至りて、佛國の殖民政策は全然、此に一轉化したり、即ち保護國なるが故に政治の系統より云へば官僚の巢窟たる內務省よりも、外務省に近くして、官僚の刀筆政治を避るの便宜あり、保護國なるが故に、舊制度舊社會の上に、佛國の政治を行ふものにして、同化畫一主義

を行ふの餘地あるなし。而して保護國なるが故に代議士、元老院議員が、行政權を侵蝕するの憂あるなく、總督は副王として文武の大柄を握り、適往敢爲、事を斷ずるを得べし。ガムベッタ等、共和黨に屬すと雖も、久しく同化畫一主義の害ありて益なきを信ず然も亦、之れを改むるの辭柄なきに窮せしが、今や保護國の名の下に、一切舊主義を放擲して、專制主義を行はんとす。是れ專制の善なるが爲めにあらず、總督に專制擅行の權を與ふるにあらずんば、英國流の自然適應主義、及和蘭流の舊制舊官利用主義を行ふの機會なきが爲めに外ならず。而して其結果ガムベッタ等の先見に違はず、チユニジヤの政治頗る土情に適し、生活の改善、產業の發達遠くアルゼリヤの及ぶ處にありず。此に於てかアルゼリヤの總督ジウル、カンボン及び其幕僚等、アルゼリヤの自由制度、撰擧政治を攻擊して、奏議を政府に上るや、世論此に沸騰し、遂に千八百九十六年の閣令により、總督の權力を增加し、且つ歲計豫算も、一にアルゼリヤの財源に基きて、自ら編成せしめ、內閣若し之れを非とせば、唯だ之れに對して不認可するのみとなる。

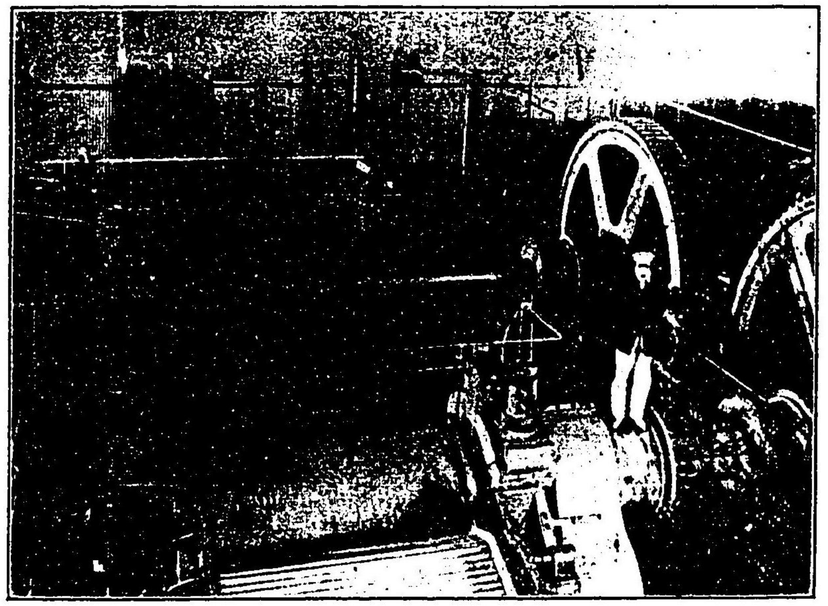
前車に鑑みたる印度支那

佛國は殖民政治に就きては、以上の失敗と成功とを重ねて、後印度支那殖民地を取りしが故に、大體に於て前車に鑑みる處少からず。即ち安南王、柬埔寨王を廢せずして、其朝廷を存するが如き、凡ての土地を直轄殖民地とせずして、保護國としたるが如き、成るべく其舊制舊組織を利用せんとするが如き是なり。唯だ其交趾支那（コシヤンシレーヌ）を取るや、直ちに之れを殖民地と爲し、同時に代議士撰擧の權を與たるが如きはアルゼリヤの失敗に懲りざるものゝ如しと雖も然らず。佛國が安南に迫りて交趾支那を取るや、其地安南の一部にして特立の土王あるなく、佛國は已むを得ずして直接政治を行はざるべからざるに至り、已に直接政治を行ふ以上は代議院議員を撰擧するの權利を與へざるべからざるを以て、是また已むを得ずして之れを與たるのみ。其他は前車の覆轍に鑑みて、頗る考量する所ありて制度を定めたる所多し。即ち交趾支那殖民地、及ひ安南、柬埔

寨、東京ラヲスの四保護國を合して、一人の總督の治下に置き、總督は文武の重權を握り、本國政府の內閣議長に對するの外、何人に對しても責任なき專制官たりとす、而して總督は總督府を開らき總督官房、政務局、民政局、軍務局、財務部を置き官房は佛國領事兼官房長、官房副官、秘書官、副局長兼暗號掛、第五民政官、アッタセーより成り、他の諸局も其人員署ぼ之れと相同じ、而して右の幕僚中、財務部長のみは本國殖民尙書に直隷し、其報告は總督の手を經由して、本國政府に送らるゝものなりと規定せらる、右の外、印度支那高等評議會ありて總督の諮問に應ずと雖も、其職員は選擧に出てすして、總督の撰拔する所にして、其性質は參議會にして、總督を掣肘するの權能あることなし、其議員は守備陸軍長官、支那海艦隊司令長官、交趾支那副總督、東京、安南、東埔寨、ラオス各州の高等理事官、財務部長、司法長官、稅關長、土木局長、郵電局長、農商森林局長、衛生局長、敎育局長、海內府醫學校長、交趾支那殖民地會議々長、各地商業會議所議長、農業會議所議長、及び總督の指名す



鹽水港製糖會社農場にて蒸汽ポンプを用ゆる圖



鹽水港製糖會社壓搾機

る土人四名より成り、此外に交趾支那撰出代議院議員、同區撰出各殖民高等會議員等は院外議員として會議を補助し、而して總督は其議長たるものとす。右の如くして佛領印度總督は、從來佛國の殖民地に見たることなき重大の權力を委任せられたりと雖も、治人ありて治法なし。法制も之れを活用するものなくんば、從來佛國行政の病根たる干渉同化畫一等の弊患は、起らざらんと欲するも得べからず。幸に東京戰爭後を受けたる總督ドゥラネッサンは殖民政治を研究して深く佛國の病患たる中央干渉の弊を曉りたるを以て、千八百九十一年フレシネー內閣がドゥラネッサンを總督とするや、政府に要求するに總督に與ふるに獨立自治の權力を以てせんことを要求し政府また其說を容れて之れを許容し、且つ文武大小の官吏、總督を經由せずして本國政府と往復するの權なしとして、政令二途に出つるを防ぎしかば、行政大に活動して、治績漸やく擧りしも、久しからずして武人と本國官僚の陰謀に中てられて退く。其後、ドウメーの之れに代はるや、固と

政府と黨派を異にするも、祖國の爲めに陣營を代へんとしたるものにして、政府また其志を諒として、十分に獨斷專行の權を與へしを以て、彼は毫も顧慮する所なくして、百事を決行す。今日印度支那に於ける偉大なる計畫は、多くはドウメーの時に於て企てられたるものにして、概して云へば、佛國の殖民地は、總督の權力廣大にして本國の議會と官僚との干渉なき時は成功し、之あるときは失敗すと云ふを得べし。蓋し總督の政治が、若し批評駁正を要すとせば、此聲は事情に遠き本國の官僚議會より出づべからず、土情に通曉したる殖民地臣民より出でざるべからずと雖も、殖民地に批評駁正の權を與ふるは、二個の理由によりて容易ならず。其一は土人に此權能を與ふれば、叛亂の勢を助長するに至るべければなり。其二は宗國より移住したる臣民は、家を爲す久しからず、其議論目前自家の利害の外、靜平なる判斷を下すの餘裕なければなり。大抵佛國が殖民地統治の政令を出すの道六あり。第一は上下兩院を通過したる法律。第二は內閣の閣令。第三は司法大臣が議長たる參議院の裁定。第四殖民大臣の命令。第五總督の命令。第六殖民地議會の條例是れなり。然れども近時佛國の政府、議會共に殖民地の事務に干渉するの非を曉り來りしを以て、重大なる政務に就きて干渉するの外、多くは殖民地、政府に一任するを以て、總督の命令は、唯一の政治なりと云ふも可なり。

佛領殖民地の一欠點

余は佛國が其共和黨の政治家が遺したる『一百年間の大誤謬』たる同化盡一主義の迷信より覺醒したるを賀す。思ふに今日の覺醒に達するまでには、幾多の失敗を重ね、幾多の犧牲を供したることを思へば、此覺醒たるや實に高價なる教訓と云はざるへからず。然れども此覺醒や遲しと雖も、猶ほ無きに勝る。佛國にして若し其貿易上の迷信たる極端なる保護稅主義より覺醒せんには、印度支那は獨り英領印度をして其富に誇らざらしめん。今日に於ても佛領印度の貿易は左の如き巨額を示めす。

	總輸入	總輸出	佛國より輸入	佛國へ輸出
千九百二年	二、一五一、一九九(フラン)八	一、八五二、六五八九	六四〇二、五〇〇〇	四九二四、八〇〇〇
千百七年	二、九四九、七一六八	二、五三三、七六五七	八一二九、一〇〇〇	五九九六、九〇〇〇

千九百二年の輸出入總額は千九百七年に至りて、殆んど四割の增加ありしに係はらず、佛國との貿易は僅かに二割九分を增加したるに過ぎず、今日の如き過激なる保護特典主義の下に於て、本國との貿易の進歩が、此の如きに過ぎざるを見ては、佛人も最早や其迷夢より覺醒するの時なるべし。

第七　南方亞細亞の明日

（四十二年十一月中央公論）

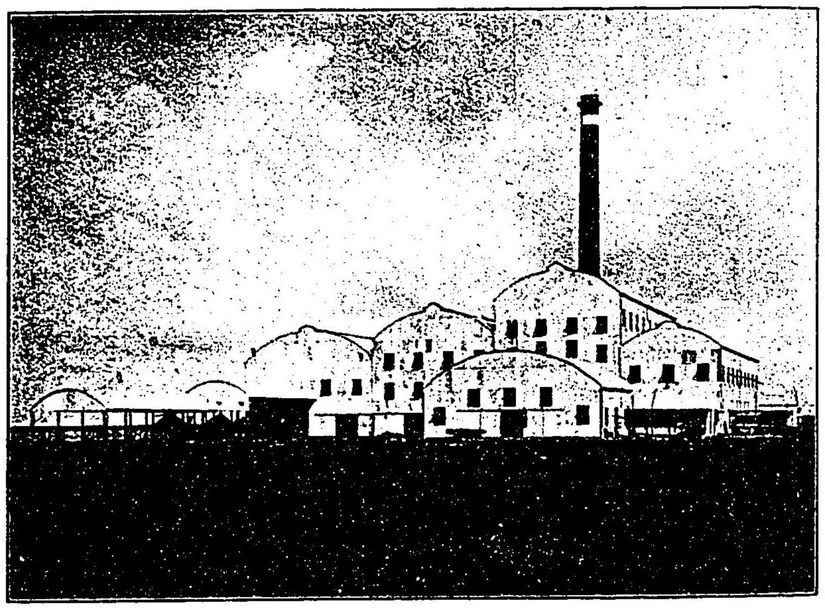
余が今回南方亞細亞地方海陸一萬三千里を旅行したる中に就て、最も余の注意を惹起したるものは、佛領印度支那に於ける鐵道の發達であつた。即ち佛領印度の中にあつても西貢(サイゴン)、安南(アンナン)、東京(トンキン)等に鐵道のあることは豫て承知して居つた所ではあるが、今回親しく實地に就て目擊して一驚を喫したるは、東京(トンキン)を横斷したる鐵道が支那の雲南省まで敷設せられて、來年の五月となれば吾々は鐵道により海防(ハイホン)より一直線に、古の滇と號せられたる雲南に入る、而も雲南の府城に達することが出來るのである。此鐵道たるや凡そ天下の鐵道中、最も偉觀を極めたるものであつて、海防より雲南省まで凡そ四百二十哩であるが、其中三百三十哩以上は既に敷設せられ、老挿(ラオカイ)より以北雲南府城まで九十哩ほど餘すのみである、此間長さ一百六十呎の橋が三つ未だ敷設せられずして殘つて居ると云ふ外、此九

十哩の未設線路たるや敷設は容易なものである。而して海防より佛領印度と雲南の國境なる老橋に至る間は、二百四十哩ほどであつて、老橋より雲南城に至る間は百八十哩ほどである。此百八十哩の間には墜道の數が百四十七あり、海防より老橋に至る二百四十哩の中には六百のカーブがある。此間は極めて平坦で僅に海拔三百尺位に過ぎぬものが、一旦雲南省附近に至れば海拔六千六百尺と云ふ高さに達するのである。故に其工事の危險にして且つ費用の多き、而して出來上つたる鐵道の天下の奇觀を極めたること、殆ど目擊者にあらずんば之を想像する能はざる程である。一言にして言へば殆ど古の蜀の棧道の如きもので、唯蜀の棧道は之を木にて作り、佛領印度の鐵道は、之を鐵にて作ると云ふの相違があるに過ぎぬ。而して其費用は佛領印度の境、老橋より雲南府城まで一百八十哩の間を敷設するだけで六千萬圓を要して居る。余は此鐵道を見て如何に佛蘭西人が英吉利に先つて雲南に入り、雲南より四川に達せんとするに急であるかと云ふことを想見して、其氣魄の大なる、其勇氣の盛んなる、而して其工事上の天才の高きに一驚を喫したのである。而して此鐵道は幅一メートルであつて、枕木は凡べて鐵である。

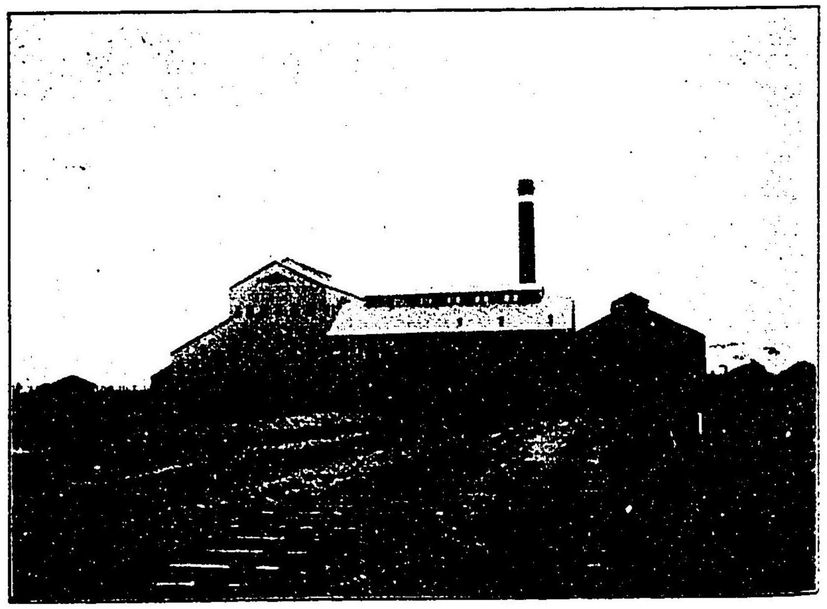
此鐵道たるや現今經濟上の價値は甚た多しと言ふことが出來ぬ。何となれば雲南は支那十八省中最も貧しきものゝ一つであつて、其天產の開發せられざる以上は、未だ此鐵道を潤すに足るだけの輸出物は出ないのである。譬へば大理府―現今大理石と稱するものゝあるのは其初め皆な蜀の大理府から採取して南京、北京の朝廷に送つたもので、それより此種の石を凡て大理石と云ふのであるが、此ほと有名な大理府も今は人口二萬の餘に出でざる小都會になつてしまつた。而して人口極めて少きが爲に、また佛領の平地より物品を購買する所の力も極めて少い。從つて、此鐵道は東北の方四川省まで達するにあらずんば、其經濟上の値價は極めて低し。故に佛蘭西政府は極力此鐵道の運賃を高くして、僅に其歲計

の不足を補はんとする方策を執つて居る。例へば日本より雲南府城に物を送らんとすれば、此物品が佛領印度に於て消費せられざるに拘らず、佛蘭西は此鐵道を通過する日本品に對して、佛領印度に入る物品の輸入税の五分の一を、通過税と稱して徴發して居るのである。凡そ自國を通過する物品に對して通過税をかけると云ふものは、支那の厘金税などの外、余の見聞せざる所である。佛蘭西政府、豈此徴税法の不法にして、且つ經濟的に自殺の策であると云ふことを知らぬものならんや。知つて而して尙ほ斯の如き收税法を爲しつゝあるは、要するに鐵道經濟、目前の急に制せられて已むを得ぬからであらうと思ふ。

更に轉て英吉利が如何に雲南鐵道を急て居るかと云ふことは、一度緬甸國、蘭貢（ランゴーン）の雲南鐵道工事を見たる者の直ちに知らざらんと欲するも能はざる所であらうと思ふ。今や蘭貢に於けるイラワヂ河の支流に於ける海陸聯絡の設備は、非常に雄大なる規模を以て經營せられ、殆ど區々たる緬甸內地の商業に十倍以上の



鹽水港製糖會社第二工場



臺灣製糖會社後壁林工場

規模を以て經營せられて居る。蘭貢は尙ほ西貢の河口にあるが如く、河に面した
る都である。然るに西貢は其附近の物貨を吸收するだけの經營に止まるが、蘭貢
に於ては一旦英吉利の鐵道が緬甸を越して、更に四川に達したる時のことを想
像したる規模を以て經營せられて居る。今日に於ては雲南府城に先づ達したる
ものは即ち佛蘭西である。併ながら一旦雲南府城に達したる後の競爭は、恐らく
は英吉利の蘭貢、四川鐵道が先を制するのではあるまいかと思ふ。兎に角斯の如
くして英國は佛蘭西と相並んで、先づ關中に入る者は王たりと云ふが如き筆法
を以て、極力雲南に達することを急いて居る。恐らくは十年の後、又二十年の後、吾
々の最も注目すべき外交經濟上の大事實は、此鐵道の爲に雲南附近に於て現は
れたるのではあるまいかと思ふ。佛國は近來、雲南鐵道に飽き其之を支那政府に
賣り付けんと運動すと云ふ風說はあるが、恐らくは國民は之を承知すまいと思
ふ。

斯の如くして英國は緬甸四川鐵道を急いで居る、佛蘭西は滇越鐵道を急いで居る。而して斯の如く鐵道に依て包まれたる印度支那は、今後如何に變化すべきかと云ふことは一大問題である。雲南なるものは古來我が國人の多くの者に依て解釋せられて居らぬが、地理上最も必要なる土地であつて、支那の本國と印度支那及印度地方との陸上交通の關門は此所にあるのである。即ち諸葛孔明が孟獲を、七度捕へて七度放つたと云ふ南蠻の地は、今日の雲南より老撾附近の土地である。今日尙ほ雲南地方に於て土中より青銅の陣太鼓を堀出すことが往々にしてある。而して支那の博識家の間に於ては、之を以て孔明が孟獲征伐に用ゐたる陣太鼓であると鑑定して、識者の間には異論のないことである。又文選を見れば司馬相如が蜀の父老を難ずと云ふ文章がある。是は漢の武帝の時に司馬相如等の議に依て、四川の兵を發して此雲南地方を平げて仕舞ふと云ふ策を立てた時に、四川即ち蜀の父老共が其征伐を難しとして拒んだ、之を非難した文章が即ち蜀の父老を難ずるの文章であるが、後世の人司馬相如を以て眉目清秀、唯文君と手鍋を提げた好男子に過ぎぬと思ふて居るが、豈計らんや此遊冶郎及能文家は、支那の歴史に於て最も卓越したる國權擴張家の一人であつて、漢が一度此雲南を平げれば、東西兩世界の關門茲に開かれて、支那の西方幾千萬里に在る大小無數の國をして、梯山航海、支那に朝貢せしむることが出來るであらうと云ふ想像から割出された大政策であつたのである。即ち此雲南が當時に於て東西の關門たりしが如く、今日に於ても尙ほ關門である。然るに英佛相競ふて此關門に入らんとするのである。恐らくは今後二十年の後には、至大なる變化を此地方に生ずるのであらうと思ふ。

斯の如くして英佛兩國の鐵道に依て雲南の關門を破られ、而して此鐵道は緬甸、暹羅、印度支那を包含することゝなるのであるが、其支那に及ぼす影響は、第二として、此鐵道に依て包まれたる地方に及ぼす影響如何と問へば、第一に來るもの

は恐らくは暹羅の滅亡であらうと思ふ。更に一轉して馬來半島を見れば、新嘉坡より、以北に至る道は、深林巨澤、容易に越ゆる能はずと云ふ有樣であつたが、今は已に三百マイルの鐵道がある。此鐵道は從來更に馬來半島を縱斷して、而して緬甸の闌貢より、雲南鐵道に至るものに接近する時があらうと思ふ。而して馬來半島に於ける英人は、汲々として暹羅との境界を進めることを怠らず、今年の七月既に又暹羅の一部分を侵蝕したる英吉利、暹羅條約の發布となつた。斯の如く英吉利は北方より鐵道を以て印度支那を圍まんとし、南方よりは馬來半島の境界を突出せしめて暹羅を浸食しつゝある。而して佛蘭西は又東の方より暹羅の地圖を染め變へることを怠らず、故に暹羅の分割せられざるや唯時日の問題である。恐くは二三十年の後には到底自から立つ能はざるものとなるのであらう。實に憐むべき形勢ではあるが、大勢又如何ともする能はざる事である。

茲に最も趣味ある問題は暹羅、佛領印度、雲南、緬甸の間にシャンと云ふ一の國が

西本省三氏は余が前年支那同雲南伴遊者たりし昨年一月酒井氏と共に雲南の入口なる蒙自に到り、一節を終へて左の如き紀行を寄せられたり。

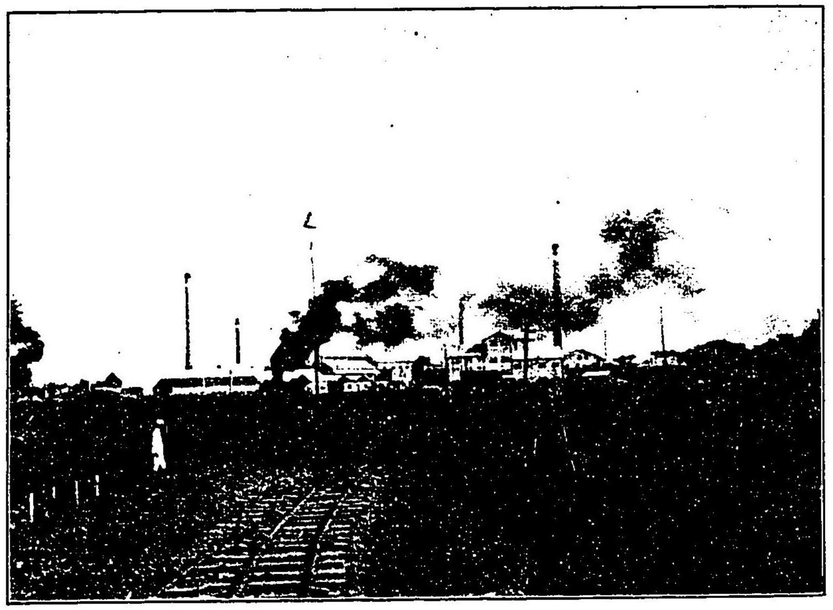
土司の管轄する地域は不明であるが、唯シャンの國と稱せらるゝのみである。此シャンは極めて趣味ある國で、恐らく今日の緬甸、暹羅、佛領印度及雲南の大部分は、曾てシャンの領分であつた時代があらうと云ふ說がある。而して其人種極めて質朴にして、緬甸、佛領印度などに於ける人種と殆ど面目を異にして居る。一方には尙ほ奴隸賣買の遺風があるかと思へば、一方には尙ほ堯舜時代の質朴なる遺風を持つて居る。學者は其シャンの何物たるを研究せんとして今日に於て未だ的確なる解釋を得ないが、佛蘭西のラクーペリーの如きは之を以て支那の三代時代に於ける商（シャン）の遺民であると號して居る。支那の三代の夏、商、周と云ふあの商である。即ち殷の紂王の子孫である。周の文王武王は西方の戎であつて、中央を滅ぼしたものであるが、三代時代に於ける支那も尙ほ其政治的範圍に於ては、殆ど今日の支那の如く南方の極端まで領分を有したものであつて、例へば舜は蒼梧の野に死すと云ふ傳說がある。蒼梧の野と云へば則ち今日の廣西省である。縱し是が一

賦雩がある元朝當時の雲南遊西は緬甸の半はに同じ即ち雲南遊西とは其半はを云ふのである唐朝の蠻國になる思南王︵土詔にてコソンとンと云ひシヤム種なり︶なる者があつて領甸、シヤム、南詔國︵國都は現時の大理府︶と相對し自ら一國を形作り其國都を現存の猛卯土司城内に置きしが明の國初洪武三年に之を征し其半はを取り更らに緬甸の半はを攻略したそこで洪武帝は征府有功の將士を以て其土地を分領せしめたのである、それで今でも山岳多き處には難々、花苗、白苗等を始めとして多數の番族が居るが此遊西各土司中にも白夷、野人、崩龍、猓々、阿昌、掠羅と名づくる種類が居る

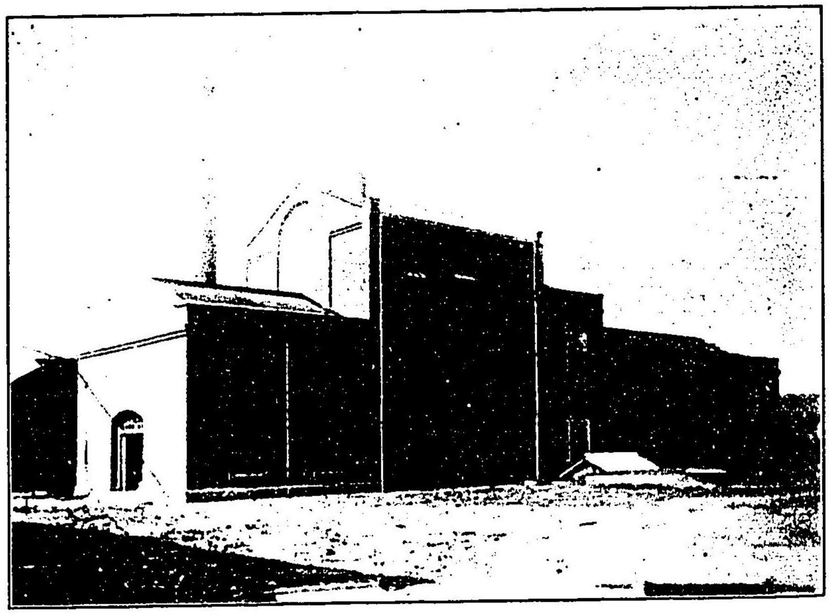
の傳説に過ぎずとするも、此傳説の因て來る所を言へば、堯舜時代に於ける帝王遠征の跡を想像することが出來るのである。又揚子江の南方に禹王廟がある。即ち禹は此地方まても征伐したものであると云ふことが想像が付く。世間禹を以て僅に水を治めた者とするけれども、豈たゞ水のみならんや、即ち東戡西伐、寧日なく遠征軍を率ゐた人と想像せられるのである。然らば其政治的範圍は當時既に南方まで及んだものと云ふことが想像せられる。而して周が商を攻めて着々と之を南方へ〳〵と壓迫した結果、商人はトウ〳〵揚子江で堪らず、湖南湖北を越えて、四川に逃込み、從來の敗殘者が總て逃隱れる所の雲南へ逃げて、而して此所に其尻を落着けて、是より印度地方へと段々下つたものが、即ち今日のシャン、彼の商であらうと云ふ説であるが、是等のシャンであるか將た商であるかは別別題として、確に堯舜時代の遺風を有して居る人民には相違ないが、是等の人民が佛領となるか英領となるか、兎に角鐵道の競爭に依て二三十年の後には歷史上の最も古き遺物たる人民が、最も新しき政治を行ふ國の影響を蒙むるに至つては、古今の奇觀であつて、殆ど小説家の腦中より出てたる奇想と名くべきものである。

余は更に廣東に至つて廣東より漢口に至る鐵道を見た。此鐵道は遲々として進まぬが、恐くは此十年の中には漢口と廣東と、即ち更に一轉して香港と相聯絡する鐵道が出來るのであらうと思ふ。然らば支那の多くの識者が考へるが如く、漢口は揚子江に依て東西を貫かれ、鐵道に依て朝鮮滿洲及北京、南は廣東と聯絡する中心が即ち漢口であるから、漢口は今後二十年には今日の二十倍若くは三十倍の發達を爲すであらうと思はれる。廣東とは即ち古の越の都であつて、廣東の五層樓に登れば、所謂南越王の古蹟は眼下に見らるゝのであるが、此南越王の古蹟が鐵道に依て貫かれるに至つては、是亦古今の感に堪へぬ次第である。余は我國人が海の彼方には斯の如き大事實の現れんとすることを考へ、而して漢口の

繁盛は、殆ど想像の出來ぬまでに達せんとすることを考へ、區々たる內國に於ける小事業、小競爭に齷齪とせずして、海の彼方に於ける大事實に着目して活動せんことを望むものである。



臺灣製糖會社橋仔頭工場



臺灣製糖會社橋仔頭酒精工場

第八　印度支那より臺灣

海南島沖の一周間

余が曩日、海防(ハイフチン)港より東京(トンキン)洲に入るや、豪雨、鐵道を破壞したるを以て、汽船により、河を遡りて河内(ハノイ)に入りしが、東京、雲南に數日を費して後、余は河内より海防に下らんとするに、鐵道は依然として修繕せられず。余は舊の如く汽船によらざるべからざるに至りしを以て、今回はダプコウに出でず、直ちに河内より紅河によりて海防に下る。船は佛人マアテーの所有に屬して、寢室もなければ食堂もなし。余等數人の上等客が一個のサロン中に、起臥食事する其不快言ふべからず。而して曉起するに、顏を洗ふ水盤もなく、頭を梳る櫛もなく、燈火は言ふまでもなく石油のランプにして、其舊式なること甚くに堪へたり。唯だ乘客の輕快善談、能く遠人を待つによりて聊か慰むるのみ。夜、船尾にて我義太夫の如き絃音を聞き、土人の群臥せるを踏み越へて、音を頼りに進めば、汽船の水夫、料理番